

41824

教科書文庫

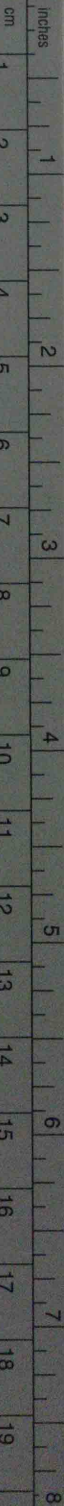
4
810
41-1930
20000 67117

Kodak Gray Scale



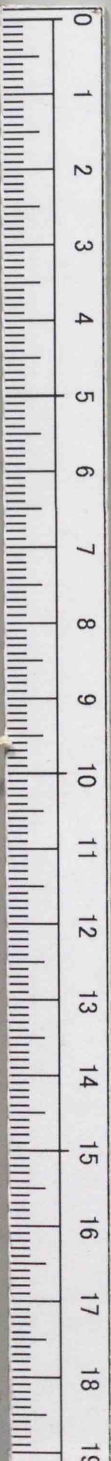
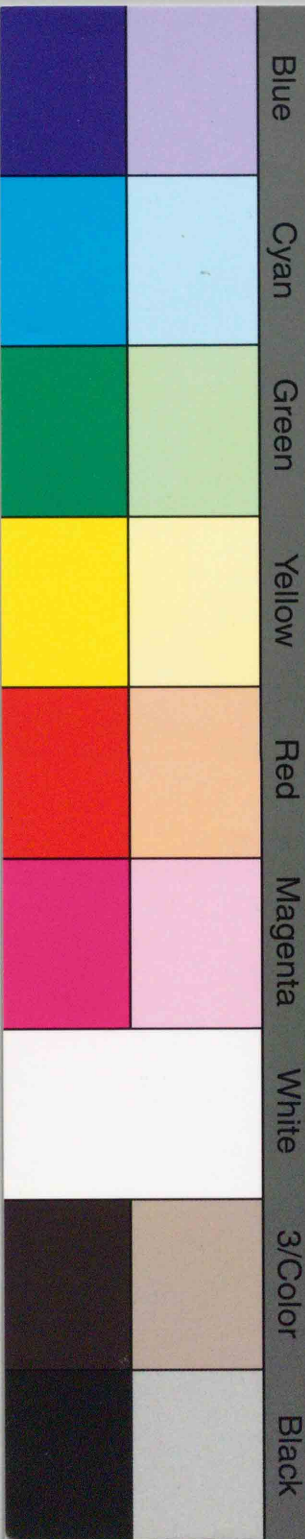
© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak



4a
810
冊5

國  
文  
選  
卷九





資料室

日八十二月一十年五和昭

濟定檢省部文

用科語國校學中

國  
文  
選



東京高等師範學校教授  
垣内松三編

42  
810  
BB5

國  
文  
選

- 一 縦に學年を貫き横に學期に互りて特に全篇の組織に留意せり。
- 一 文化と國語との關係を基本として國民精神の涵養を意圖せり。
- 一 教材の選擇に關しては作品の本質と學習の態度とを考慮せり。
- 一 原作の更改は教科書としての用意に出づ原作者の諒恕を乞ふ。

目次

一 文學の新生……………久松潜一……………四

二 由利八郎の意氣……………(吾妻鏡)……………二四

三 新島守……………(増鏡)……………三

四 史論三書……………清原貞雄……………三

五 東路の旅……………(東關紀行)……………七

六 愚禿親鸞……………西田幾多郎……………四

七 良友……………(十訓抄)……………四

八 北畠親房……………田中義成……………五

九 落花の雪……………(太平記)……………三

一〇 吉野の軍……………(太平記)……………九

一一 四季……………吉田兼好……………八

一二 謠曲の本質……………五十嵐力……………六

一三 鉢木……………(謠曲集)……………七

一四 入間川……………(狂言記)……………二四

一五 永徳と山樂……………中井宗太郎……………三

一六 俳諧の變遷……………佐々政一……………三七

附錄 國文學形態史圖表  
國文學年表 下

### 一 文學の新生

日本文學の主潮を流るゝ精神に、「まこと」物のはれこ  
「幽玄」がある。この三つの精神は、日本文學を構成する本質  
であり、随つてそれを透視し得る三つの標目である。

「まこと」は眞實をあるがまゝに表現するもので、我が上古  
文學を貫流する精神である。そこには強い國家的精神と個  
人的精神とが現れて居る。その國家的精神があるがまゝに  
表現されたのが古事記である。古事記には想像もあり、超現  
實的なことも多いのであるが、それは古代人の眞實な精神  
の反映であつて、子供の心に描くお伽噺の世界が空想的で  
あり、超現實的であつても、子供にこつては眞實の世界であ  
る。同様である。又その個人的精神は萬葉集を中心として

古事記 卷七「日本武尊」參  
照。

萬葉集 卷七「純ふる心」參  
照。

流れて居る。素より萬葉集には國家的な意識が見えないこ  
いふのではない。例へば人麿の挽歌などは國家の建設を説  
き、神の世界を歌つて居る。けれどもその中心はやはり皇子  
の薨去を痛む個人的主觀的の感情である。唯その表現は、我  
が上古文學に通有な素樸性を帯びて居る。

かうした精神は、後世に於ても、文化が爛熟した時、常に復  
古的精神として現れて來るのである。この復古的精神は、古  
代人の眞實性と素樸性に復ることがその思潮の中心で  
ある。現實生活のはかなさ、醜さに惱む時に、この現實から離  
れて素樸性と眞實性を求める。「まこと」の精神が、常に力強  
い雄々しい増荒男振りの精神となつて、國文學の中に持續  
的に流れて居るのである。

「物のはれ」は心と形との調和の中に見出される情趣の

人麿の挽歌 萬葉集卷二に  
「高市皇子尊城上殞宮之  
時、作歌一首並短歌」か  
けまくもゆゝこさかも言  
はまくも綾に長き明日香  
の眞神の原に久堅の天津  
御門をかこくも定め給  
ひて云々」さあり。

世界である。それは上古文學を流れて居るやうな素樸な感情ではなく、それをあくまでも洗鍊した境地である。この「物のあはれ」は平安朝時代の文學のすべての形態の上に見出されるもので、強烈な感動を沈靜にし、情趣化するものである。この精神は當時の物語類に最もよく現れて居る。軍記物語には、英雄的叙事的精神とこの「物のあはれ」を主潮とする抒情的精神とが互にもつれあつて、そこに花やかな勇壯な悲壯美を形づくつて居る。また徒然草に於ても、その思索を體驗にまで深める哲人的精神の中に、この「物のあはれ」が流れて居る。この「物のあはれ」が流れて居ることによつて、近古文學は薄暗い中にほのかな明るさを有し、寂しさの中に一脈の花やかさを保つて居るのである。

「幽玄」とは、言葉として古今集の眞名序にも、既に「或事關」

當時の物語類 落窪物語・宇津保物語・源氏物語・衣物語の類。  
軍記物語 保元物語・平治物語・平家物語・源平盛衰記・太平記の類。  
徒然草 八〇頁參照。

古今集の眞名序 紀貫之の和文の序を紀淑望の漢譯したるものなり。

神異或興入幽玄とあるが、その本來の意味からいふと、物のあはれとはほゞ同様な纖細なる情趣である。それが平安朝末期の現實のはかなき轉變から人生の無常を觀するに至つて、幽玄の心持も物寂しい境地を主とするやうになつて來た。俊成がその最も得意な歌として、

ゆふされば野べの秋風身にしみて鶉なくなり深草の里

を擧げたといふことによつても、幽玄の中心となるものが、秋の夕暮の寂しさのやうな境地であつたことが察せられる。西行が自然の中に放浪する事によつて見出した靜寂の境地も、亦これと同様である。この「幽玄」は俊成の所謂遠白い即ち壯大といふ感情と、心が細かい即ち纖細といふ情趣とを結びつけて、これを統一した中に見出される精神である。

俊成 藤原氏。歌人。千載集の撰者。元久元（一八六四）年歿す。年九十一。

西行 歌僧。俗名佐藤義清。鳥羽上皇に仕へて北面の士たり。二十三歳にして出家し、四方に周遊す。建久元（一八五〇）年歿す。年七十三。

平安朝時代には、何事も個人を中心としたが、鎌倉時代になるに、個人の弱さはかなさを觀じた結果、傳統の中に自己の生命を見出さうとするやうになつた。即ち文學を個性的にそのまゝ表現しないで、これを傳統の型の中に入れて、それにいぶしをかけた上で表現するやうになつたのである。個性を否定して、その小さい私の否定された中に現れてくる大きな自我から、幽玄の精神は現れて來るのである。あの小さい茶室の中に於て、その中から型に捕はれない自由な境地を見出して來る所に、茶道の精神はある。又庭園の一樹一石にも深山を象徴し、一本の線の中にも限らない餘情を含ましめ、氣韻を生動せしめる當時の文人畫にしても、一見型に嵌つた粗笨なものやうに見えるが、その中には自然や人生が象徴的に表現されて居るのである。

茶道の精神 卷六「茶境」參照。

この幽玄はまた能樂に於ても見られる。それは一つの型に入れて、その中に普遍的な人間性を表はさうとして居るのである。世阿彌は「物まね・花・幽玄」の三事を説いて居る。物まねは寫實である。花は變化であつて、一つから他のものに移り變る事によつて生ずる珍らしさである。散つて行く花から新しい花を創造してゆく所に、花の眞の生命がある。そこに花そのものの永遠性が見出される。幽玄はこの變化を超越した花である。それは不變の花であり、美の絶對的境地である。これを「物まね」と「花」の境地の間から見出して來るのである。この人生の永遠性を一つの型の中から見出して來るのが能樂の精神である。而してこれは又近古文學を通じて流れて居る精神であつて、表面には現れてゐない美しさであるが、しかもその中に限らない大きな深い美しさが満た

世阿彌 八五頁參照。



されて居るのである。

この「幽玄」の精神は、近世に於て芭蕉の閑寂の精神ともなつて居る。芭蕉は自然を深く凝視して、その本質を「寂び」であること見たのである。これは自然をあるがまゝに見たこといふよりは、あるがまゝの自然に奥深く入ることによつて、その本質を見極めたのである。まことの精神にあらゆるものから脱却した新生の叫びがあることすれば、「寂び」はそのあらゆるものから解放された中に見出されたものの本質である。而して芭蕉が不易と流行との間を透して、この「寂び」の精神を見出して来たことは、物まねと「花」の間から「幽玄」を見出した世阿彌と同一の立場にあつたのである。既に西行も、自然の中からこの静寂を擲んで来たのであるが、西行にはこの静寂の中に入りきれなかつた所に焦燥があつた。しかも

芭蕉 卷十一「元祿文壇の三偉人」参照。

芭蕉に至つては、この境地に深く徹して、「寂び」をその生活の上に見出して来て居る。一簑一笠の旅の中に、大きな生活を見出した芭蕉は、自然の本質が「寂び」であること見極めたのみならず、人間生活の本質もこの「寂び」にあること考へたのである。高く心をさこりて俗にかへるべし。といふのは、生活を寂び化し、幽玄化することであること解される。かくの如くして自然と人生との窮極である「寂び」や「幽玄」は、又、藝術の窮極でもあつたのである。句ひと「寂び」と「細み」としをりを重んじた彼の俳諧は、「寂び」の藝術であり、「幽玄」の藝術であつた。自然と人生と藝術とを貫いて流れる「寂び」や「幽玄」の精神が芭蕉の精神であつたのである。即ち俊成・西行等によつて見出されて、近古文學の基調をなした「幽玄」の精神は、近世に流れて芭蕉に及んだのである。これを「まこと」と「物のあはれ」とに比

較するこゝまこゝはあるがまゝのものに理念を見出した境地であり、あるがまゝのものの中から、あらうとするものを見出して表現したのが物のあはれであり、更に自然と人生と藝術とを結びつけて、それにいぶしをかけて、統一せしめ結晶せしめた白光の如き境地が「幽玄」である。

かくの如く見る時は、まこゝと物のあはれと「幽玄」は、一見異なつた理念のやうではあるが、しかもそれは本質的な相違ではなく、展開の過程であることが知られる。まこゝが童心と素樸との藝術を生み出し、物のあはれが心と形との融合調和した藝術を生み出し、更に「幽玄」が自然や人生を型の中に入れて、その間から結晶した白光として象徴的な藝術を生み出したのである。而して此等の展開流動する精神を統一するものが、日本文學の本質である。この本質的精神

が原始時代から絶えず流れて来て、まこゝから物のあはれとなり、幽玄となり、而してその窮極した境地が陳套に陥つて来る時、またまこゝの精神が甦つて新生の氣運を醸し、更にそれが持続的に展開するのである。

明治以後の文學は歐米の新しい文學思潮と種々の科學の影響によつて、上述の三精神も大いに變化して、その形が變つて来たが、これを見出すことは決して困難ではない。元よりありしまゝのまこゝや物のあはれや「幽玄」ではなく、新しい意義と形態とを與へられたものであるが、しかも日本文學を流れる傳統的精神はそこに見出されるのである。この傳統的精神を日本文學の中から探るこゝによつて、國民の生命の糧であり力である國民文化の本質ともいふべきものが理會されるのである。(久松潜一の文による)

久松潜一 國文學者。明治二十七年愛知縣に生る。東京帝國大學國文科出身。現に同大學助教授。

## 二 由利八郎の意氣

文治五年九月二日己未。二品平泉に出で、岩井郡厨川の邊に赴かしめ給ふ。これ泰衡隱住の處を相尋ねんが爲なり。亦曩に頼義義家將軍の朝敵を追討せし比、十二箇年の間、處々の合戦勝負を決せず、年を送りし處を視そなはし、遂に件の厨川の柵に於て貞任等の首を獲し時の佳例に依つて、當處に到り、泰衡を討つて其の頸を獲べき由、内々思案せしめ給ふ。

三日庚申、泰衡數千の兵に圍まれ、一旦の命害を遁れん爲に、夷狄が島を差して糟部郡に赴き、此の間、數代の郎從河田次郎を恃んで肥内郡贊の柵に到れる處、河田忽ちに年來の舊好を變じて、郎從等をして泰衡を相圍んで首を梟せしめ、

### 参考資料

吾妻鏡 五十二卷の中現存五十一卷。鎌倉幕府の日記にて、當代特有の漢文體にて記されたり。参考書には、

高桑駒吉「依田喜一郎成川容次郎」「吾妻鏡集解」芝野六助「吾妻鏡物語」八代國治「吾妻鏡の研究」

文治五年 後鳥羽天皇の御宇。(一八四九)

二品 源頼朝。

平泉 岩手縣西磐井郡平泉村。

厨川 岩手縣岩手郡厨川村。

泰衡 藤原秀衡の子。陸奥、出羽を領す。歿する時、

年三十五。

頼義 源頼信の長子。陸奥守、鎮守府將軍に任ぜられ、安倍氏を討つ。承保二

此の頸を二品に獻ぜん爲に鞭を揚げて參向す。

四日辛酉、志波郡に著御。今日、二品陣が岡の蜂社に陣せしめ給ふ。北陸道追討使能員實政等、出羽國の狼戾を靡けて參加せる間、軍士二十八萬四千騎なり。面々白旗を打立て、廣野の間に倚せ置きたれば、秋の尾花色を濕し、曉の月勢を添ふ。

六日癸亥、河田次郎主人泰衡の頸を持つて陣が岡に參る。景時をして之を奉らしめ、義盛重忠を以て實檢を加へられし上、囚人赤田次郎を召して見せられし處、泰衡の頸たる條、異議なき由を申す。仍つて此の頸を義盛に預けられ、亦景時を以て河田に仰せ含められて云はく、汝の所爲、一旦は功有るに似たり。雖も、泰衡を獲る條元より掌中に在る上は、他の武略を假るべきに非ず。忽ちに譜代の恩を忘れ、主人の首を梟したる科、已に八逆を招ける間、抽賞し難きに依つて、後

(一七三五)年歿す。

夷狄が島 北海道。

贊の柵 岩手縣二戸郡福岡町。

陣が岡の蜂社 岩手縣紫波郡古館村。

景時 梶原氏。頼朝の臣。

正治二(一八六〇)年歿す。

義盛 和田氏。頼朝の臣。侍所別當なる。建保元

(一八七三)年歿す。年六十七。

重忠 畠山氏。頼朝の臣。

元久二(一八六五)年歿す。年四十二。

八逆 謀反、謀大逆、謀叛、惡虐、不道、大不敬、不孝、不義。

輩を懲らしめん爲に、身の暇を賜ふ所なり。則ち朝光に預

けて斬罪に行はせらる。

七日、甲子、宇佐美平次實政、

吾泰衡が郎從由利八郎を生虜

妻にし、相具して陣が岡に參上

鏡す。天野右馬允則景之を生虜

北にしたる由相論ず。二品、主計

條、允行政に仰せて、先づ兩人の

(本馬、並びに甲毛等を注し置か

せられたる後、實否を囚人に

尋ね問ふべき旨景時に仰せ

らる。景時、由利に立向かつて云はく、汝は泰衡の郎從の中、名

ある者なり。眞偽強ち矯飾を構ふべからざらんか。實正に任

通達日御書是

五日、甲子、能分二即、是實者、是屬朝夕、格勤

之、京去治、東四年、建對佐竹、能者之時、殊、旋、勤、功

係、令、感、其、武、勇、武、藏、國、舊、領、寺、傳、止、直、光、之、押

領、可、領、筆、之、由、被、仰、下、而、直、當、此、間、在、國、今日、令

卷上、賜、件、下、文、也

下、武、藏、國、大、野、郡、能、分、次、即、平、直、實、時、之、禰、所

領、事

右、件、直、光、祖、相、傳、見、而、之、下、傳、子、直、光、押、切

事、得、止、直、實、者、地、國、之、職、改、單、以、阿、看、佐

次、也、四、郎、常、陸、國、奥、郡、衣、園、之、禰、龍、自、鎌、倉、令

實、御、時、其、日、御、合、戰、直、實、實、勝、分、人、前、懸、一、陣、懸

塚、一、人、當、十、頭、萬、名、直、實、當、件、時、谷、崎、之、地、取

願、以、單、子、之、傳、也、永、代、不、可、有、他、功、故、下、直、性

手、直、實、知、教、不、可、違、失

治、承、正、年、五、月、廿、日

七日、西、午、武、藏、國、出、雲、井、浦、郡、壯、士、寺、各、地

之、馬、之、直、實、者、平、直、實、時、之、禰、所、也、也、也、也

せて言上すべきなり。何色の甲を着たる者汝を生虜にした

るか。由利忿怒して云はく、汝は兵衛佐殿の家人か。今の口

上過分の至にて、喩を取るに物なし。故御館は秀郷將軍嫡流

の正統たり。已上三代は鎮守府將軍の號を忝うす。汝が主人

も猶此の如き詞を發すべからず。矧や亦汝は吾と對揚の處、

何の勝劣あらんや。運盡きて囚人となるは勇士の常なり。鎌

倉殿家人を以て奇恠を見はす條、甚だ謂れなし。問ふ所の事、

更に返答し能はず。景時頗る面を赧らめ、御前に參つて申

して云はく、此の男惡口の外、別に言語なき間、糺明せんことを

を欲せず。云へば、仰せて曰はく、景時無禮を現すに依つ

て、囚人之を咎むるか。尤も道理なり。早く重忠之を召問ふべ

し。仍つて重忠手づから敷皮を取り、由利が前へ持來りて

之に坐せしめ、體を正して誘ひて云はく、弓馬に携る者、怨敵

兵衛佐殿 源賴朝。

故御館 藤原泰衡。

秀郷 藤原氏。下野掾、領

使となる。平貞盛と共に

平將門を誅し、功を以て

下野武藏兩國守、鎮守府

將軍となる。

秀郷、清衡、基衡、秀衡

、泰衡

こなつて囚るゝは漢家本朝の通規なり。必ずしも恥辱と稱すべからず。就中故左典廐、永曆に横死あり、二品又囚人となつて六波羅に向かはしめ給ふ。結局豆州に配流せらる。然るに佳運遂に空しからずして天下を拉り給ふ。貴客今生虜の名を蒙らるゝ雖も、始終沈淪の恨を貽すべからざらんか。奥六郡の内、貴客武將の譽を備ふる由、兼ねて其の名を聞ける間、勇士等勳功を立てん爲に客を擲め獲れる旨、互に相論ぜるに及べるか。仍つて甲を云ひ、馬の毛付を云ひ、畢んぬ。彼等の浮沈この事に究るべきなり。何色の甲を著たる者に生虜にせられ給ふか。分明に之を申さるべし。云へば、由利云はく、客は畠山殿か。殊に禮法を存じ、前の男の奇怪なるに似ず。尤もなれば之を申すべし。黒絲緘の甲を著、鹿毛なる馬に駕したる者、先づ予を取つて引落す。其の後は、追來る者、嗷々こ

左典廐 左馬頭の唐名。源義朝をさす。永曆元(一八一九)年誅に伏す。

六波羅 平清盛の邸あり。

奥六郡 伊澤、和賀、江刺、稗拔、志波、岩手の六郡。

して其の色目を分たず。重忠歸參して具さに此の趣を披露す。件の甲馬は實政のものなり。已に御不審を開き、訖んぬ。次に仰せて曰はく、此の男の申し狀を以て心中の勇敢を察するものなり。尋ねらるべき事あり。御前に召進らすべし。云へば、重忠又之を相具して參上す。御幕を上げられて之を覽給ひ、仰せて曰はく、己が主人泰衡は威勢を兩國に振ふ間、刑を加ふる條、難儀の由思食さるゝ處、尋常の郎從無きかの故に、河田次郎一人の爲に誅せられ訖んぬ。凡そ兩國を管領し、十七萬騎の貫首たりながら、百日を相支へず、二十箇日の内に一族皆滅亡す。言ふに足らざる事なり。由利申して云はく、尋常の郎從少々相從ふ。雖も、壯士は處々の要害に分ち遣られ、老兵は行歩進退せられざるに依つて、意のまゝならずして自殺し、予の如き不肖の族は、又生虜となる間、最後

兩國 陸奥、出羽。

に相伴なはざりしなり。抑、故左馬頭殿は、海道十五箇國を管領せしめ給ふ。雖も、平治の逆亂の時、一日を支へ給はずして零落し、數萬騎の主たり。雖も、長田庄司の爲に、輒く誅せられ給ふ。古、今と甲乙如何。泰衡管領せらるゝ所は、僅に兩州の勇士なり。數十箇日の間、賢慮を煩し奉る。一遍に不覺に處せしめ給ふべからざらんか。と。二品重ねて仰せらるゝなく、幕を垂れ給ふ。由利は重忠に召預けられ、芳情を施すべき由仰せ付けらる。〔吾妻鏡による〕

由利忿怒云、汝者兵衛佐殿家人歟。今口狀過分之至、無物取喻。故御館者爲秀郷將軍嫡流之正統、已上三代汲鎮守府將軍之號。汝主人猶不可發如此之詞、矧亦汝與吾對揚之處、何有勝劣哉。運盡而爲囚人、勇士之常也。以鎌倉殿家人見、奇恠之條、甚無謂。所問事、更不能返答云々。景時頗頰面、參御前申云、此男惡口之外、無別言語之間、無所欲糺明者。〔吾妻鏡〕

海道十五箇國 伊賀伊勢志摩尾張三河遠江駿河甲斐伊豆相模武藏安房上總下總常陸長田庄司 平忠致。

### 三 新島守

承久三年四月二十日帝おりさせ給ひ、春宮四つにならせ給ふに譲り申させ給ふ。近頃皆この御齡にて受禪ありつれば、これもめでたき御行末ならむかし。同じき二十三日、院號の定めありて、今おりさせ給へるを新院と聞ゆれば、御兄の院をば中院と申し、父帝をば本院とぞ聞えさする。この程は家實の大臣關白にておはしつれど、御讓位の時、左大臣道家の大臣攝政になり給ふ。かのあづまの若君の御父なり。さて、も院のおぼし構ふるこゝ、忍ぶとすれどやうく漏れ聞えて、東さまにもその心遣ひすべかめり。あづまの代官にて、伊賀の判官光季といふ者あり。かつく、彼を御勘じの由仰せられければ、身方に參るつは者ども押寄せたるに、遁

#### 參考資料

増鏡 十卷。作者不詳。後鳥羽天皇より後醍醐天皇に至る約百五十年間の史實を記せり。體裁は大鏡に倣ひて、嵯峨の清涼寺に於て百餘歳の尼が物語りし所を記録せる態となせり。「おどろの下・新島守・ふち衣・三神山・内野の雪烟の末末・おりの雲山のみみ・おち葉・北野の雪・あすか川・草枕老のみみ・今日の日影つげの小櫛浦千鳥・秋のみ山・春のわかれ・村時雨・久米のさら山・月草の花」の二十篇より成る。參考書には、和田英松・佐藤球「増鏡詳解」永井一孝・竹野長次「増鏡新釋」

るべきやうなくて、腹切りてけり。先づいごめでたしごぞ、院は思しめしける。

あづまにもいみじうあわて騒ぐ。さるべくて身の失すべき時にこそあなれと思ふものから、討手の攻めきたりなむ時にはかなきさまにて屍を曝さじ、おほやけに聞ゆとも、みづからし給ふことならねば、かつはわが身の宿世をも見るばかりと思ひなりて、弟の時房と、泰時といふ一男と、二人を頭として、雲霞の兵をたなびかせて都にのぼす。泰時を前に据ゑていふやう、おのれをこのたび都にまゐらすことは、思ふ所多し。本意の如く清き死にをすべし。人にうしろを見えなむには、親の顔また見るべからず。今を限と思へ。賤しけれども義時、君の御爲にうしろめたき心やはある。されば横ざまの死にをせむことはあるべからず。心を猛く思へ。おの

3世 aut.

承久三年 紀元一八八一年。  
帝 順德天皇。  
春宮 仲恭天皇。  
御兄の院 土御門上皇。  
父帝 後鳥羽上皇。  
家實 近衛基通の子。攝政  
關白となり、三宮に准ぜ  
らる。仁治三(一九〇二)  
年薨す。年六十四。  
道家 藤原良經の子。攝政  
關白となる。建長四(一九  
一一)年薨す。年六十。  
あづまの若君 藤原賴經。  
當時征夷大將軍として鎌  
倉に在り。  
院 後鳥羽上皇。  
あづまの代官 京都守護。  
わが身 北條義時。  
時房 北條義時の弟。承久  
の役後、六波羅を鎮し、  
伊勢守護を兼ね。義時の  
卒後、執權連署となり、  
修理大夫に任ず。仁治元  
(一九〇〇)年歿す。  
泰時 義時の長子。北條氏  
三代の執權。三善康連と  
貞永式目を制定す。仁治

れ打勝つものならば、二たびこの足柄箱根山は越ゆべし。なご泣くく、いひ聞かす。誠にしかなり、また親の顔拜まむこともいと危しと思ひて、泰時も鎧の袖を絞る。かたみに今や限と哀に心細げなり。

かくて打出でぬる又の日、思ひかけぬ程に、泰時只ひとり、鞭を揚げて馳せきたり。父胸うち騒ぎて、いかにと問ふに、軍のあるべきやう、大かたの掟などは、仰の如くその心を得侍りぬ。若し道の邊りにも、圖らざるに、忝く鳳輦を先立てて御旗をあげられ、臨幸の嚴重なることも侍らむに参りあへらば、その時の進退いかゞ侍るべからむ。この一ことを尋ね申さむとて、ひとり馳歸り侍りき。といふ。義時、さばかり打案じて、かしこくも問へるをのこかな。そのことなり、まさに君の御輿に向かひて弓を挽くことはいかゞあらむ。さばかりの

三(一九〇二)年歿す。年六十。

足柄山 靜岡縣駿東郡。  
箱根山 神奈川縣足柄下郡。

時は兜を脱ぎ、弓の弦を切りて、ひこへにかしこまりを申し  
て、身を任せ奉るべし。さはあらで、君は都におはしましなが  
ら軍兵を賜はせば、命を捨てて千人が一人になるまでも戦  
ふべし。こいひも果てぬに、急ぎ立ちにけり。

都にもおぼし設けつる事なれば、武士ども召しつごへ、宇  
治勢多の橋も引かせて、敵を防ぐべき用意心ここなり。公經  
の大將ひこりのみ、御孫のこともさる事にて、北の方一條中  
納言能保こいふ人の女なり、その母北の方は、故大將のはら  
からなれば、一方ならずあづまを重くおぼして、さしいらへ  
もせず、院の御心の軽き事とあぶながり給ふ。中院は、飽か  
位をすべり給ひしより、言に出でてこそ物し給はねど、世の  
いこ心やましきまゝに、かやうの御騒にも殊に交らひ給は  
ざめり。新院は同じ御心にて、萬づ軍の事なども、掟て仰せら



(圖車輿) 輦 鳳



(圖車輿) 車代網

宇治 京都府宇治郡。

勢多 滋賀縣栗太郡。  
公經 西園寺公經。その孫  
頼經は當時鎌倉將軍なり  
き。

故大將 源頼朝。





れけり。

いつの年よりも、五月雨はれ間なくて、富士川・天龍などえ  
もいはず漲り騒ぎて、いかなる龍馬も打渡し難ければ、攻め  
のぼる武士どもも、あやしく惱めり。かゝれども、遂に都に近  
づくよし聞ゆれば、君の御武士も出でたつ。その勢六萬餘騎  
さかや。宇治勢多へ分ち遣す。世の中ひゞきのゝしるさま、言  
の葉も及ばず、まねび難し。あるは深き山へ逃げこもり、遠き  
世界に落ちくだり、すべて安げなく騒ぎ満ちたり。いかゞあ  
らむと君も御心亂れておぼし惑ふ。かねては猛く見えし人  
々も、誠のきはになりぬれば、いと心あわたゞしく、色を失ひ  
たるさまども、頼もしげなし。六月十日餘りにや、幾何の戦だ  
になくて、遂に御方のいくさ敗れぬ。荒磯に高潮などのさし  
くるやうにて、泰時と時房と亂れ入りぬれば、いはむ方なく

あきれて、上下たゞ物にぞ當り惑ふ。

あづまよりいひおこするまゝに、かの二人の大將軍はか  
らひおきてつゝ、保元の例にや、院の上、都の外に遷し奉るべ  
しと聞ゆれば、女院宮々、處々におぼし惑ふこと更なり。本院  
は隱岐國におはしますべければ、先づ鳥羽殿へ、網代車のあ  
やしげなるにて、七月六日入らせ給ふ。今日を限の御ありき、  
あさましうあはれなり。ものにもがなやとおぼさるゝも甲  
斐なし。その日、やがて御ぐしおろす。御年四そぢに一つ二つ  
や餘らせ給ふらむ。まだいと惜しかるべき御程なり。信實朝  
臣召して、御姿寫し描かせらる。七條院に獻らせ給はむことな  
り。かくて、同じ十三日に御舟に奉りて、遙かなる波路を凌ぎ  
おはします御心ち、この世の同じ御身もおぼされず、いみ  
じういかなりける代々の報にかゝ恨めし。

保元の例 保元の亂後、崇  
德上皇を讃岐に遷し奉れ  
り。

鳥羽殿 城南の離宮。今の  
京都府紀伊郡鳥羽町にあ  
りき。

ものにもがなや さらかへ  
すものにもがなや世の中  
をありながらの我が身  
と思はむ (源氏物語河海  
抄)

信實 藤原隆信の子。左京  
權大夫に至る。肖像畫に  
巧なり。文永二(一九二  
五)年歿す。年八十九。  
七條院 後鳥羽上皇の御  
母。

中向 out

六つにて位に即き給ひて、十三年おはしましき。おり給ひ  
て後も、土佐院十二年、佐渡院十一年、なほ天の下には同じ事  
なりしかば、すべて三十六年がほど、この國のあるじとして、  
萬機の政を御心一つに治め、百の官を従へ給へりしそのほ  
ご、吹く風の草木を靡かすよりも勝れる御有様にて、遠きを  
あはれみ、近きを撫で給ふ御めぐみ、雨の脚よりも繁ければ、  
津の國のこやのひまなき政を聞しめすにも、難波の葦の亂  
れざらむことをおぼしき。藐姑射の山の峯の松も、やうく  
枝を連ねて、千代に八千代を重ね、霞の洞の御すまひ、幾春を  
經ても、空ゆく月日の限知らず、のどけくおはしましぬべか  
りける世を、ありありて由なき一ふしに、今はかく花の都を  
さへ立ちわかれ、おのが散りゆくにさすらへ、磯の苦屋に軒  
を並べて、おのづから言問ふものにては、浦に釣する海人小

土佐院 土御門天皇。  
佐渡院 順德天皇。

津の國の 津の國のこやこ  
も人をいふべきに際こそ  
なけれ蘆の八重葦 (和泉  
式部)

舟、鹽焼く煙のなびく方をも、わが故郷のしるべかこばかり  
 詠め過させ給ふ御すまひごもは、それまでと月日を限りた  
 らむだに、明日知らぬ世のうしろめたさに、いと心細かるべ  
 し。まして何時をはてごか廻り逢ふべき限だになく、雲の浪  
 煙の浪の、幾重ごも知らぬ境に世を過し給ふべき御様ごも、  
 口惜しといふもおろかなり。

このおはします處は、人ばなれ、里遠き島の中なり。海づら  
 よりは少し引入りて、山陰に片添へて、大きやかなる巖の敬  
 てるをたよりにて、松の柱に蘆葺ける廊など、げしきばかり  
 ことそぎたり。まことに柴のいほりの只しばしご、假初に見  
 えたる御宿りなれご、さる方になまめかしく、ゆるづきてし  
 なさせ給へり。水無瀬殿おぼし出づるも夢のやうになむ。は  
 るくご見やらるゝ海の眺望、二千里の外も残りなき心ち

柴のいほりの いくにも  
 生まれすばたご住まであ  
 らむ柴の庵のこぼしなる  
 世に(西行法師)  
 水無瀬殿 本院の造らせら  
 れし殿舎。攝津國三島郡  
 島本村廣瀬に在りき。

する、今更めきたり。汐風のいごちたく吹きくるをきこし  
 めして、

われこそは新島守よおきの海の荒きなみ風こゝろ  
 して吹け

同じ世にまたすみの江の月や見むけふこそよそに  
 おきの島守 (増鏡)

おもひ出づる折焚く柴の夕けぶりむせぶもうれし忘れ  
 がたみに (後鳥羽天皇)  
 しら雲を空なるものとおもひしはまだ山こえぬみやこ  
 なりけり (土御門天皇)  
 花鳥のほかにも春はありがほにかすみてかゝるやまの  
 はのつき (順徳天皇)  
 世の中の晴れゆく空に降る霜のわが身ひとつぞおきど  
 ころなき (慈鎮和尚)

二千里 三五夜中新月色、  
 二千里外故人心。(白氏文  
 集)

四 史論二書

我が國は昔から言擧げせぬ國と言はれて居るが如く、理論的方面に於て特色のある著書は稀であつた。殊に歴史は單に過去の事實を羅列するものと思惟せられ、これを哲學的に觀察するといふやうなことは、平安朝の末頃まで殆ど見ることが出来なかつた。然るに鎌倉時代に入つてから、宋學輸入の影響を受けて、それが著しい變化を來した。先づ第一が慈鎮和尚の著した愚管抄である。この書は我が國に於ける歴史を哲學的に解釋したものの嚆矢であつて、歴史の推移に對して理論的説明を試みようとしたものである。北畠親房の神皇正統記、新井白石の讀史餘論などは、これに次いで出た同趣のものであつて、實に我が國の史學史上に異

性原(性原) 天賦(天賦) 性原(性原) 天賦(天賦) 性原(性原) 天賦(天賦)

參考資料

愚管抄 七卷。神武天皇より順德天皇までの歴史。 神皇正統記 六二頁参照。 讀史餘論 十二卷。古今に亘りて天下の大勢の推移を論述せるものなり。 宋學 宋代の學者の説ける性理學程朱學・朱子學等をいふ。 藤原忠通 長子。 白太政大臣たり。長寛二(一八二四)年薨す。年六十八。 九條兼實 攝政・太政大臣。關白たり。世に月輪關白と稱す。又典故に通ず。承元元(一八六七)年薨す。年六十。 青蓮院 京都市上京區粟田口に在り。天台宗の門跡の寺。 覺快法親王 鳥羽天皇の第七皇子。安元三年座主に任ぜられ、養和元(一八四一)年薨す。 良經 正治二年に左大臣に、建久二年に攝政に任ぜらる。和歌に長じ、書畫に巧なり。建永元(一八六六)年薨す。年三十八。 嘉祿元年(一八八五)九月二十五日薨す。嘉祿は後堀河天皇の御宇。 嘉禎三年 四條天皇の御宇。(一八九七)

彩を放つものである。

愚管抄の著者慈鎮は關白藤原忠通の子で、兄は九條兼實である。兼實は源賴朝が幕府を創立するに當つて、その顧問となつて信任を得、賴朝の力によつて後鳥羽天皇の攝政となつた人である。これより九條家は武家の後楯によつて、勢威朝廷に並ぶものになつた。前に青蓮院に入つて覺快法親王の法弟となつて居た慈鎮は、こゝに於て天台座主に任ぜられ、同時に後鳥羽天皇の護持僧として御信任を忝うしたが、建久七年、兼實が失脚するに及んで、職を辭して籠居することになつた。その後、兼實の子良經が攝政に任ぜられたので、慈鎮も亦座主に還補せられ、再び護持僧となり、更に良經と共に和歌所寄人にも任ぜられた。かくて嘉祿元年、七十一歳で寂するまで、後鳥羽上皇の殊寵を蒙り、なほ嘉禎三年

その身の十三回忌に當つて慈鎮ミと諡號レをも賜はつたのである。慈鎮はかくの如き人であるから、その歴史觀は佛教を根據とし、又藤原氏の專横や鎌倉幕府の執政について、辯解大いに努めたのも怪しむに足らないのである。愚管抄著述の目的は、世の移り行く理によつて治亂興廢の跡を説かうとするにあつた。隨つて因果の道理から史實の解説をなし、更に從來の歴史的推移を基礎として將來に對する豫言を試みたのである。當時の政治を批判し、將來を豫言して居るのはその第七卷であつて、慈鎮は自らこの卷を秘して居つたのであるが、それには、鎌倉幕府の出現したのは歷史上必然の推移であるから、これが爲に朝廷と武家とは相乖離してはならぬ、殊に源氏の血統が絶えた後、幕府が九條家から頼經を迎へて將軍としたことは、公武合體の實を擧げたも

ので、これこそ神明の計ひであるから、後鳥羽上皇が鎌倉討伐を企てられるのは朝廷と武家とを離反させるもので、若しかやうの事があれば朝廷の衰頽は忽ちに至るであらうと論じてある。この豫言は不幸にして適中した。適中したからこそ慈鎮の識見が高かつたといひ難いが、過去の歴史上の種々な例を照合して未來を豫測しようとしたことは、一種の歴史哲學又は應用史學であつて、愚管抄以前には嘗て見えなかつた所である。

親房の神皇正統記は、その量に於ては大日本史・本朝通鑑などに比して特にいひ立てるに足るほどのものではない。しかし歴史を單なる事實の記述と見ないで、大勢の推移を論じ、治亂興廢の跡を尋ねようと試みた點に於て特筆すべきものである。その著述の目的は、三種の神器の所在と皇位

大日本史 三百九十七卷。  
別に目錄五卷。水戸藩の編。神武天皇より後小松天皇に至る漢文體の歴史にて、本紀・列傳・志表の四部より成る。  
本朝通鑑 二百七十三卷。  
正編四十卷は林道春、續編二百三十卷及び前編三卷は林恕の撰なり。神武天皇より後陽成天皇に至る漢文體の歴史。

この關係を明かにして我が國體の根本義を示し、又一面には建武中興の事業の跡に鑑みて、治亂興廢の理法を論じて帝王の守り給ふべき道を説き、後村上天皇の御政治の参考に供したものである。その中に、今の御門また天照大神より以來の正統を受けましくぬれば、此の御光に争ひ奉るべきものやはある。なかくかくて靜まるべき時の運こそぞ覺え侍る。こあつて、現在の悲境をかこつことなく、光明を將來に認めて居る所にその識見の高かつたことが窺はれる。

白石の讀史餘論は、正徳二年夏、將軍家宣の命に依つて、座を賜はつて古今の成敗の跡を論じた時の草稿である。この書はその性質からいつて獨逸の大歴史家ランケの論に比すべく、その價值に於ても亦や、近いものであつて、立論の堂々たる、觀察の精微なる點に於ては、東西その軌を一にす

後村上天皇 後醍醐天皇の第七子。御在位二十九年。正平二十三年(二〇二八)年崩す。壽四十一。

正徳二年 中御門天皇の御宇。(二三七二)  
家宣 徳川六代將軍。正徳二年薨す。年五十一。  
ランケ ドイツの史學者。現代史學の基礎を作れり。西曆一八八六年歿す。年九十二。

るものである。因果の關係を明かにし史實を忌憚なく論評したことは、遙かに愚管抄・神皇正統記にも優るもので、その所論の大部分は白石獨自の見解と見るべきである。即ち歴史批判の進歩してゐなかつた當時に於て、白石が鳥瞰的に古今を見、又一々の問題についてその因果の起伏を考察した非凡の識見は、往く所として佳ならざるはなき彼の大才に非ざればなし得ざる所である。勿論、讀史餘論の結構が神皇正統記に負ふ所のあつたことは疑ふべからざる事實であるが、それと同様に、神皇正統記も亦愚管抄に負ふ所が少くなかつたやうである。

西洋の新しい史學思想が輸入せられた以前に於ては、我が國の史書は殆ど皆支那の史風を眞似たもののみであつて、文明史的に史實に對して哲學的解釋を試みた著書は殆

ごなかつたのであるが、たゞこの愚管抄神皇正統記讀史餘論の三書だけはこの例に倣はなかつたものである。此等の三書はそれ、鎌倉時代の初期吉野朝の頃、徳川時代の初に、我が國民的精神の興隆に際して現れた稀有の名著であつて、永く我が史學史上に彩然として光り輝くものである。

(清原貞雄「日本史學史」による)

春の彌生のあけぼのに

花ざかりかも白雲の

花橋も匂ふなり、

夕暮さまのさみだれに

秋のはじめになりぬれば、

わが世更けゆく月かげの

冬の夜寒の朝ぼらけ、

心のあとはつかねども、

四方の山邊を見渡せば、

かゝらぬ峯こそなかりけれ。

軒のあやめもかをるなり、

山時鳥なのりして。

今年も半ばは過ぎにけり。

かたぶく見るこそ哀なれ。

契りし山路は雪ふかし。

思ひやるこそあはれなれ。

(慈鎮和尚)

清原貞雄 史學者。文學博士。大分縣の人。京都帝國大學國史科出身。廣島文理科大學教授。

### 五 東路の旅

仁治三年の秋八月十日餘りの頃、都を出でてあづまへ赴くことあり。まだ知らぬ道の空、山重なり江重なりて、遙々遠き旅なれども、雲を凌ぎ、霧を分けつゝ、しばしは前途の極り無きに進む。終に十餘りの日數を経て、鎌倉に下り着きし間、或は山館野亭の夜の泊り、或は海邊水流のかすかなる砌に至る毎に、目に立つ處々、心にこまる節々を書きおきて、忘れずしのぶ人もあらば、自ら後の形見にもなれどてなり。

東山の邊りなる住家を出でて、逢坂の關うち過ぐる程に、駒牽きわたる望月の頃もやうく、近き空なれば、秋霧立渡りて、深き夜の月影ほのかなり。ゆふつけ鳥かすかに音づれて、遊子なほ殘月に行きけむ、函谷の有様思ひ合はせらる。昔

#### 参考資料

東關紀行 一卷。源親行の著。四條天皇の仁治三年八月十日に京都を出發して鎌倉に向かへる紀行なり。参考書には、

島中龜之助・辻橋大吉「註釋東關紀行」

鳥野幸次「東關紀行詳解」

吉川秀雄「新譯東關紀行精解」

仁治三年 四條天皇の御宇。(一九〇二)

逢坂の關云々 逢坂の關の清水に影見えて今や引くらむ望月の駒(紀貫之)

遊子なほ云々 買島の曉賦に「遊子猶行、於殘月、函谷鷄鳴。」(和漢朗詠集)

蟬丸こいひける世捨人、この關の邊りに藁屋の床を結びて、常は琵琶をひきて心を澄まし、大和歌を詠じて懐ひを述べけり。嵐の風の烈しきをわびつゝ、ぞ過しける。

いにしへの藁屋の床のあたりまでこゝろをこむる  
逢阪のせき

關山を過ぎぬれば、打出の濱、粟津の原なんぞ聞けども、未だ夜のうちなれば、定かにも見えわかず。昔、天智天皇の御代、大和の國飛鳥の岡本の宮より近江の志賀の郡に都遷りありて、大津宮を造られけり。聞くにも、このほごは古き皇居の跡ぞかしと覺えてあはれなり。

さゝ波や大津の宮の荒れしより名のみ残れる志賀の故さこ

曙の空になりて、勢多の長橋打渡すほごに、湖遙かに現れ

藁屋の床云々 世の中はさてもかくてもおなじこと宮も藁屋もはてしなれば (蟬丸)

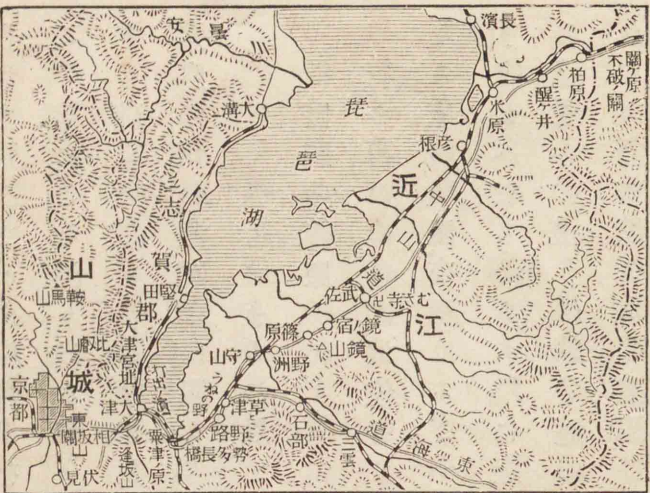
飛鳥 大和國高市郡高市村。

て、かの滿誓沙彌が比叡山にてこの海を望みつゝ、詠めりけ

む歌思ひ出でられて、漕行く舟の迹の白波、誠にはかなく心細し。

世の中を漕行く舟に  
よそへつゝながめし  
跡を又ぞながむる

篠原こいふ處を見れば、西東へ遙かに長き堤あり。北には里人住家を占め、南には池の面遠く見え渡る。向の汀、緑深き松の村立、波の色も一つになり、南山の影を浸さねども、青くして洗滌たり。洲崎處々



滿誓沙彌 右大辨等麻呂。

養老五(一三八一)年出家。

漕行く舟の云々 世の中を何にたこへむあさばらけこぎゆく舟のあさの白浪 (拾遺集)

篠原 近江國野洲郡。

南山の影云々 白樂天の詩に「影浸南山青洗滌。」 (新撰則詠集)



に入りちがひて、葦かつみなど生ひ渡れる中に、鴛鴦鴨の打群れて飛びちがふ様葦手を書けるやうなり。都を立つ旅人この宿にこそ泊りけるが、今は打過ぐる類のみ多くして、家居も疎らになりゆくなど聞くにこそ、變りゆく世のならひ、飛鳥の川の淵瀬には限らざりけりこ覺ゆれ。

行く人もこまらぬ里こなりしより荒れのみまさる

野路の篠原

行き暮れぬれば、武佐寺といふ山寺の邊りに泊りぬ。疎らなる床の秋風、夜更くるまゝに身にしみて、都にはいつしか引きかへたる心ちす。枕に近き鐘の聲、曉の空に音づれて、かの遺愛寺の邊りの草の庵の寢覺も、かくやありけむこあはれなり。行末遠き旅の空思ひ續けられて、いこいたう物悲し。都出でて幾日もあらぬ今宵だにかたしきわびぬこ

變りゆく世の云々、世の中は何か常なるあすか川昨日の淵を今日は瀬になる  
(古今集)

遺愛寺の邊云々、白樂天の詩に「遺愛寺鐘敲枕聽。」  
(和漢朗詠集)

この秋風

この宿を出でて、笠原の野原打通るほごに、老蘇の森といふ杉むらあり。下草深き朝露の霜にかはらむ行末も、はかなく移る月日なれば、遠からず覺ゆ。

の森の下草

音に聞きし醒が井を見れば、蔭暗き木の下の岩根より流れ出づる清水、餘り涼しきまで澄渡りて、げに身にしむばかりなり。餘熱未だ盡きざるほごなれば、往還の旅人多く涼みあへり。かの西行が、道のべに清水流るゝ柳かげしばしこてこそ立ちごまりつれ。こ詠めるも、かやうの處にや。

道のべの木蔭の清水掬ぶこてしばし涼まぬ旅人ぞなき

西行 歌僧。俗名佐藤義清。出家して四方に周遊し、建久元(一八五〇)年寂す。年七十三。

柏原こいふ處を立ちて、美濃の國關山にもかゝりぬ。谷川霧の底に音づれ、山風松の梢にしぐれ渡りて、日影も見えぬ。木の下道、あはれに心細し。越えはてぬれば、不破の關屋なり。萱屋の板庇、年經にけりこ見ゆるにも、後京極攝政殿の、荒れにし後はたゞ秋の風。詠ませ給へる歌思ひ出でられて、この上は風情もめぐらし難ければ、賤しき言の葉を遺さむもなかく、に覺えて、此處をば空しく打過ぎぬ。

株瀬川こいふ處に泊りて、夜更くる程に川端に立出でて見れば、秋の最中の晴天、清き河瀬にうつろひて、照る月なみも數見ゆるばかり澄渡れり。二千里の外の故人の心、遠く思ひやられて、旅の思いこゝ押へ難く覺ゆれば、月の影に筆を染めつゝ、花落を出でて三日、株瀬川に宿して一宵。しばし幽吟を中秋三五夜の月に傷ましめ、かつく遠情を前途一

後京極攝政殿 藤原良經。荒れに後は云々 人すまぬ不破の關屋の板びさし 荒れに後はたゞ秋の風 (新古今集)

照る月なみも云々 水の面に照る月なみをかぞふればこよひぞ秋の最中なりける (源順) 二千里の外云々 二九頁參照。

千里の雲に送る。なご、或家の障子に書きつく。

(源親行「東關紀行」)

昔壁の中より求め出でたりけむ書の名をば、今の世の人の子は夢ばかりも身の上の事とは知らざりけりな。水莖の岡の葛葉、かへすくも書きおさける跡確かなれども、かひなきものは親の諫なり。又賢王の人を捨て給はぬ政にも漏れ、忠臣の世を思ふなさけにも捨てらるゝ者は、數ならぬ身一つなりけりと思ひ知りながら、又さてしもあらで、尙この愁こそ遣る方なく悲しけれ。(中略)

深き契を結び置かれし細川の流も、故なく堰止められしかば、跡弔ふ法の燈火も、道を守り家を助けむ親子の命も、もろ共に消えを争ふ年月を経て、危く心細きものから、何としてつれなく今日までは長らふらむ惜しからぬ身一つは、易く思ひ捨つれども、子を思ふ心の闇は尙忍び難く、道を顧みる恨は遣らむ方なく、さてもなほ東の龜の鑑に寫さば、曇らぬ影もや現るると、せめて思ひ餘りて萬づの憚を忘れ、身をえうなきものになし果てて、ゆくりもなくいさよふ月に誘はれ出でなむとぞ思ひなりぬる。(阿佛尼「十六夜日記」)

源親行 歌人。光行の子。

參考資料

十六夜日記 一卷。阿佛尼の著。京都より鎌倉までの紀行なり。參考書には、

- 小山田典清「北條時隣」十六夜日記殘月抄
- 三木五百枝「十六夜日記」講義
- 佐野保太郎「十六夜日記」新釋

阿佛尼 歌人。藤原爲家の後妻。初安嘉門院に仕へて四條また右衛門佐と稱せり。弘安六(一九四三)年歿す。

### 六 愚禿親鸞

親鸞上人が自ら愚禿と稱したといふ話から推すと、愚禿の二字は能く上人の爲人を表はすと共に、眞宗の教義を標榜し兼ねて宗教その者の本質を示したものであると思ふ。人間には智者もあり愚者もあり、徳者もあり不徳者もある。併しいかに大なりとも、人間の智は人間の智であり、人間の徳は人間の徳である。三角形の邊はいかに長くとも、總べての角の和が二直角に等しいといふには何の變りもない。たとひ翻身一回、この智この徳を捨てた所に、新たな智を獲、新たな徳を具へ、新たな生命を開き得らるゝのである。これが宗教の神髓である。宗教のことは世の所謂學問・知識と何等交渉もない。又徳行の點から見ても、宗教はおのづから徳行を伴な

親鸞 京都の人。一向宗の祖。本願寺の開基。始は慈鎮に學び、後に法然に從ふ。他宗に惡まれ、越後に流さる。後赦されて弘長二(一九二二)年寂す。年九十二。

ひ來るものではあらうが、必ずしもこの兩者を同一視する。ここは出來ぬ。昔、融禪師が牛頭山の北巖に棲んで居た時は、色々の鳥が花を啣んで供養したが、四祖大師に參じてからは、鳥が花を啣んで來なくなつたといふ話を聞いたことがある。宗教の智は、智その者を知り、宗教の徳は、徳その者を用ひるのである。心靈上の事實に對しては、英雄豪傑も匹夫匹婦と同一である。たとひ眼は眼を見ることは出來ず、山にある者は山の全體を知ることには出來ぬ。この智この徳の間に出沒する者は、この智この徳を知ることには出來ぬのである。何人でも、赤裸々なる自己の本體に立返り、一たび懸崖に手を撒いて絶後に蘇つた者でなければ、これを知ることには出來ぬ。即ち深く愚禿の愚禿たる所以を味はひ得たもののみがこれを知り得るのである。上人の愚禿はかくの如き意味

融禪師 姓は韋氏。潤州延陵の人。出家して牛頭山幽棲寺北巖の石室に禪す。唐の永徽中、建初寺に住じ、顯慶二年寂す。年六十四。

愚禿の二文字を味はふに外ならぬのである

相平ノイカシヨラズ大陽ノ影先  
四六ヲ與ルルコトヲモテ侍ト

の愚禿である。他力といはず自力といはず、一切の宗教はこの愚禿の二字を味はふに外ならぬのである。

併し右のやうにいへば、愚禿の二字は獨り眞宗に限つた譯でもないやうであるが、眞宗は特にこの方面に著目した宗教である。愚人・悪人を正因とした宗教である。絶對的愛絶對的他力の宗教である。いかなる愚人、いかなる罪人に對しても、彌陀はたゞ汝の爲に粉骨碎身するといつて、これを迎へられるのが眞宗の本旨である。

宗祖の人格に就いて見ても、彼の日蓮上人が意氣冲天他宗を罵倒し、北條氏を目して小島の主と壯語したのに比べて、吉水一門の奇禍に連り、北國の隅に流されながら、若し我配處に赴かずんば、何によりてか邊鄙の群類を化せん。こいつて、法を見て人を見なかつた親鸞上人の人格は、頗る趣を

日蓮 四七頁參照。

吉水一門 淨土宗の開祖法然上人の門下をいふ。吉水は今の知恩院の地をいふ。

奇禍 承元元(一八六七)年、法然を土佐に、その徒弟を越後に流す。  
西田幾多郎 哲學者。文學

異にしたものと謂はねばならぬ。風號び雲走り、怒濤澎湃の間に立つて、動かざること巖の如き日蓮上人の意氣も壯であるが、煙波渺茫、風靜かに波動かざる親鸞上人の胸懷も、亦何となく奥床しいではないか。(西田幾多郎「思索と體驗」)

日蓮は明日佐渡の國へまかるなり。今夜の寒きについても、牢の内の有様思ひやられて痛はしくこそ候へ。あはれ殿は、法華經一部を、色心二法ともに遊ばしたる御身なれば、父母六親一切衆生を助け給ふべき御身なり。法華經を餘人の讀み候は、口ばかり言ばかりは讀めども心に讀まず。心は讀めども身に讀まず。色心二法ともに遊ばされたるこそ貴く候へ。天諸童子以爲給使、刀杖不加、毒不能害。と説かれて候へば、別の事はある可からず。牢をばし出でさせ給ひ候はば、とくく、來り給へ。見奉り、見え奉らん。恐々謹言。

文永八年辛未十月九日

日

蓮花押

筑後殿

(類纂高祖遺文録)

### 七良友

人は善き友にあはむことを希ふべきなり。麻の中の蓬は矯めざるに自ら直し。さいふ喩あり。蓬は枝さし直からぬ草なり。されども麻に生ひ交りぬれば、歪みて行くべき道のなきまゝに、心ならず麗しく生ひ昇るなり。心の悪しき人なり。こも麗しくうちある人の中に交はりぬれば、さすが彼此を憚る程に、自ら直しくなるなり。これによりて、善き友にあはむことを經にも説かれ、文にも勸めたり。顔氏が家訓には、**與善人居如入芝蘭之室。久而自芳也。與惡人居如入鮑魚之肆。久而自臭也。**

さいへり。また或文には、人の心は水の器に従ふが如し。器細ければ即ち細くなり、器圓ければ即ち圓くなる。心は朋友に

參考資料

十訓抄 三卷。作者不詳。舊談古説の教誡に益あるもの二百五十條を十目の下に収録せるもの。参考書には、岡本保孝「十訓抄典故」石橋尚寶「十訓抄詳解」

麻の中の蓬云々 「蓬生麻中不扶自直」(荀子)

顔氏の家訓 北齊の顔之推の著。二卷。

芝蘭之室 薛瑄の著。芝蘭之室 薛瑄の著。芝蘭之室 薛瑄の著。

ならふ。何ぞ擇ばざるべし。むやみやたらに書けり。また九條殿の遺誡には、**高聲悪狂の人に伴ふこと勿れ。教へ給へり。かればばはかなくうち語らばむ友なり。さもよくその人を選ぶべし。薰蕕器を異にすべし。さなり。花のもごに春ばかりを契り、月の前に一夜を限る友までも情あるたぐひは、忘れ難く思ひ出でらるゝものなり。**

すべて友を語らふには、隔つる心なきを徳とす。ゆめく心悪しからむ人には伴ふべからず。芝澗に住みし四人の翁竹林に籠りし七賢のたぐひ、さこそ思はしき友なりけり。

子猷は雪の夜、月にあくがれて、遙かに剡縣の安道を尋ね、劉惔は清風朗月に、玄度のなきことを恨みけり。まことに心にかなふ友のなからむには、いかなる興宴ももの憂く覺えぬべし。さればこそ梁の孝王は、鄒枚と聞えし二人の臣去りに

九條殿 九條師輔

薰蕕云々 「薰蕕不同器而藏。堯桀不共國而治」(孔子家語)

四人の翁云々 東園公・夏黄公・角里先生・綺里季。これを商山の四皓といふ。子猷、王徽之。子猷は字。晋代の人。風流をもつて名あり。

安道 戴逵。安道は字。晋代の人。博學、殊に琴・書・畫に巧なり。劉惔 字は眞長。沛國蕭の人。晋代の人。

しかば兎園の遊をもごぼめ給ひ、魯の仲尼は子路をいひし  
思はしき弟子に後れて後には互に勧めけるものをも捨て  
給ひにけれ。清和第九の皇子貞眞親王の作り給へりける、

鄒枚散後平臺靜 空遣春風只斷腸

文選第二十一卷、魏文帝與吳質書に曰く、

昔伯牙絶絃於鍾期、仲尼覆醢於子路、痛知音之難遇、傷門  
人之無逮。

元稹と樂天とは詩の友にておはせしが、元稹はかなくな

りしかば、樂天その作りたりし詩どもを三十卷集めて、唐の  
大教院の經藏にぞ籠めおかれける。

遺文三十軸 軸々金玉聲 龍門原上土

埋骨不埋名

とは、これを書かれたるなり。

玄度 許詢。玄度は字。晋  
代の人。風流をもつて名  
あり。鄒・枚 鄒陽と枚乘。共に  
當時の名士。

文選 三十一卷。梁太子統  
が文選樓を築いて諸文人  
と共に集録したる文集。  
伯牙・鍾子期 共に周代の  
音楽家。

元稹 中唐の詩人。

樂天また、或文の友に寄せらる、詩に曰く、

交情鄭重金相似 詩韻清鏘玉不如

まことによき友の交は何よりも面白かるべし。阮家の南北  
の垣をも隔てず、貧しきをも耻ぢざりし如何なることを契  
りけむ。孟母が子を思ふ故に、隣を三度までかへけるも、友を

擇ぶ心、これ又こりぐなぬ友につきて斷金伐木の契など  
いふことあれども、人皆口づける上に、こゝ長ければしるさ  
ず。山鳥の鏡に向かひて鳴き、鴻雁の行をなして飛ぶ、皆友を

思ふ心なり。佐保の河原の霧の中に、友まごはせる千鳥の夕  
暮の聲、すこくこそ聞ゆれさゆる入江の波の上に、つがはぬ

鴛鴦のうきねも、した安からぬ思のほご、さこそはごあはれ  
なり。友なし小舟のほのかに漕ぎゆく、明石の浦の島がくれ、

友とする人少かりける東路の八橋のわたり、かれもこれも

勢物語參照。 卷八「伊

七良 友  
スツク  
五二

思ひやられて心細し。(十訓抄)

昔、いみじき盗人ありけり。十月ばかりに衣の用ありければ、  
處々窺ひ歩きけるに、夜半、月の朧なるに、絹の狩衣を著指貫の  
そばはさみて、唯一人笛吹きて練りゆく者あり。走り懸りて衣  
を剝がむと思ふに、恐ろしく覺えければ、添ひて二三町往き、愈  
試みむとて走り寄りたるに、笛吹きながら見返りたる氣色、取  
懸るべくも覺えざりければ、走り退きぬ。やがて刀を抜きて走  
り懸りたるに、此の度は笛を止めて立返り、「こは何者ぞ」と問ふ  
に、心も失せはてて、「引剝に候」といへば、「誰ぞ」と渾名は袴垂となむ  
いはれ候」と答ふれば、「共にまうで來」とばかりにて、又笛吹きて  
行く。今は逃ぐともよも逃さじと覺えければ、鬼神に取られた  
るやうにて、共に行く程に、家につきぬ。攝津前司保昌といふ人  
なりけり。綿厚き衣を賜はりて、用あらむ時は參りて申せ。心も  
知らざる人に取懸りて誤すな」とありしこそ淺ましく恐ろし  
かりしかと、捕へられて後、物語りけり。(宇治拾遺物語による)

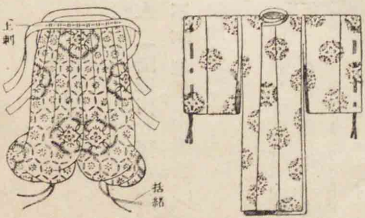
### 八 北畠親房

興國九年甲子四月十八日、吉野朝の柱石たる准后北畠親  
房は大和賀名生に於て薨ぜり。時至らず志達せずして空し  
く、幽明を隔つ。然れどもその絶代の忠魂は天地の間に留り  
て流芳長へに薫ず。

吉野朝を建設せしは卿の力なり。吉野朝の政治的經綸軍  
事的計畫は皆卿の方寸より出でたり。南軍の根據を奥羽と  
九州とに置けるが如き、皇子を各地に派して地方南軍の中  
心としたるが如き、又自ら常陸に赴きて東國を經營し、以て  
足利氏の根據を覆さん謀れるが如き、或は東西夾撃の策  
を樹て、或は尊氏直義兄弟の不和を利用して諸將を操縦し、  
苟も乗ずべき機會あれば之を逸することなく、假令一時的

【參考資料】  
宇治拾遺物語 十五卷、  
作者不詳。古今の雜事異  
聞百九十四條を収録せ  
るものなり。參考書に  
は、

小島之茂 「宇治拾遺物  
語私註」  
三木五百枝・三輪杉根「宇  
治拾遺物語註  
解」  
中島悦治 「宇治拾遺物  
語新釋」  
狩衣・指貫



親房 權大納言源師重の  
子。家を北畠又は中院と  
稱す。後二條天皇延慶元  
年(年十七)中納言とな  
り、後醍醐天皇元亨三年  
(年三十二)大納言に陞り  
世良親王の傳となる。元  
徳二年(年三十九)出家  
す。元弘三年(年四十二)  
再び出仕して従一位を授  
けられ、大臣に准せらる。  
長子顯家陸奥守となり義  
良親王を奉じて任に赴く  
や親房これに輔たりし  
が、後京に歸る。延元元年  
(年四十五)尊氏叛するに  
及び親に從ひて叡山に赴  
く。既にして天皇尊氏の  
降を納れて京師に還り給  
ふ。親房尊氏に屬するを  
欲せずして伊勢に走る。  
三年次子顯信陸奥介鎮守  
府將軍となる。親房また  
輔となりて任に赴かんこ  
して、海上大風に遭ひて  
常陸に漂着し、後に小田  
城に據る。敵兵これを攻  
むれども陥るゝ能はず。

こはいへ、常に勝利を占めて北軍を苦しめ、敵將尊氏をして一日の安きをも得しめざりしもの、實に卿の謀略に基づかざるはなし。

興國三年十月十六日、卿が關城に在りて結城親朝に與へたる書狀に曰く、

不肖之身、自稱之故、雖有其憚、先皇深被仰付之間、云當今御事、云竹園御事、爲一身之負累、諸方依之、伺此境之安危、候。忽失一命者、天下之御方一時可落力之條、殆無疑貽歎。

卿は後醍醐天皇より深重なる御依託を蒙り、一身を以て君國に捧げつゝも、自己の在亡は直ちに天下宮方の興廢に關するを思ひ、自ら其の身を重んぜるここかくの如し。其の慷慨憂國、至誠奉公の情眞に欣慕するに堪へたり。吉野朝將士の遺詠を誦するに、いづれも憂國の至情溢れざるはなきも、

後村上天皇興國二年（年五十）興良親王を小田城に迎ふ。同年高師冬來り攻む。城主小田治久降るに及び、親房は關城に走り、援を結城親朝に請ひしが遂に應ぜず。四年十一月城陷るに及び、海路吉野に歸る。正平六年（年六十）三宮に准ぜらる。七年敵を追ひて一度は京師に入りしが、九（二〇一四）年四月十八日志成らずして薨す。年六十三。賀名生 奈良縣吉野郡。



直義 足利尊氏之母弟。延元元年兄と共に叛す。

一誦熱涙の滂沱たるを禁じ得ざるものは、實に卿が慨世の哀吟なり。試みにその一二を擧ぐれば、

露にぬれ霧にしほれてあしびきの山分け衣ほすひまもなし

片絲の亂れたる世を手にかけて苦しきものは我が身なりけり

以て其の東奔西走、崎嶇艱難の狀、想見するを得べし。

抑、卿が身を獻じて勤王の節を盡くししは、淵源する所あり。卿の曾祖父雅家は後嵯峨天皇に信任せられ、天皇の御出家に際して共に出家し、祖父師親も龜山天皇に従ひて出家せること曾祖父の如く、又父師重は後宇多天皇の殊寵に感じ、同じく出家してその父祖に倣へり。かくの如く父子相繼いで主上に従つて出家せしは類稀なることにて、公卿補任

後鎌倉に走り、尊氏に攻めらる。正平七（二〇一二）年歿す。年四十七。興國 後村上天皇の御宇。關城 茨城縣眞壁郡河内村。五八頁地圖參照。結城親朝 忠臣宗廣の長子。晩年に至り、吉野朝の振はざるや、遂に足利氏に降る。弘和二（二〇四二）年歿す。



にも、父子三代法體並例と記されたり。卿が後醍醐天皇に忠節を抽んでしも、由つて來る所遠しといふべし。

卿は後醍醐天皇の御信任厚く、皇子世良親王を預けらるるや、一心を傾けてこれが輔導の任に當れり。親王は殊に賢明におはせしかば、天皇の御寵愛斜ならず、早くより天下の政務をも見習はしめられき。この時に當り、天皇は銳意皇運の恢復を圖り給ひたれば、卿も亦親王と共に樞機に參じ、大政を翼賛したり。然るに元徳二年、親王の早世せらるゝや、卿は我が世盡きぬる心地して、未だ齡四十にも至らざるに、遂に官を罷め、髪を削りて宗玄と號せり。時に朝野の人々親王を痛み奉るゝ同時に、卿の隱退を惜しみて、朝廷の衰微とまで慨嘆したり。卿の衆望を負ひしこと知るべきのみ。

その後、世亂れて麻の如く、四海の民去就に迷ひければ、卿

又かくて久しかるべくもあらず、天日を既墜に回さんとし

東寺領若狹國太良庄申、國  
衙濫妨事、奏聞候之處、被  
付國衙之條、曾無其儀  
候、以申狀之類、則被尋  
問國司一候也、且可令存  
知給之旨、被仰下二候也、  
恐惶謹言。十月九日按察使  
親房狀。  
顯家云々、北島顯家は延元  
三(一九九八)年五月二十  
二日、義貞は閏七月二日  
に戦死す。  
石津 大阪府泉北郡濱寺  
村。  
藤島 福井縣吉田郡西藤島  
村。

て、その辛苦譬ふべくもあらざりき。されど何時の世とて、小北人は利に喩り、君子は義に喩る。島利を追ふものは足利氏に靡き、南風競はずして、遂に延元三年、房顯家は攝津石津に、義貞は越前藤島に、相繼いで陣歿せり。花は咲けども吉野や風荒く、石走る音に御夢を驚かし給ひ、山禽徒に腸を斷つのみ。かくて空しく

春秋を過して、延元四年の秋の半ば、月明き夜南山霧深き處に於て、後醍醐天皇は劔を按じて神去り給ひ、その御陵は南

後醍醐天皇崩御 延元四年  
八月十六日午前二時頃。

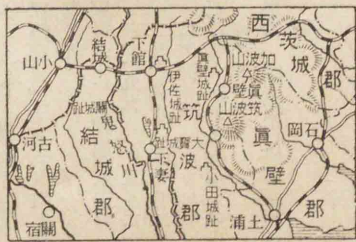
面の例に倣はずして北闕を望めり。時に卿は遠く常陸小田城に在りて此の悲報に接し、萬斛の落涙堰きあふべくもあらざりき。後村上天皇立ち給ふに及びて、卿は猶先帝の顧命と新帝の依託とによりて、遙かに政務にあづかれり。こゝに於て吉野朝を始め、四海勤王の軍は卿を信望するこゝ衆星の北辰に向かふが如し。西陲に據れる阿蘇氏の如きは關山幾百里の遠きを辭せずして、成敗をこの人に請へりといふげにや、卿の徳望は宇内に満ち、その任も亦重かりき。

興國の年號は嚴存す。雖も皇運未だ開くべくもあらず、迷雲南山を巡りて、天日八紘に照り渡らず、まして關城の夜雨蕭々として、羈愁を催す時、楚歌四面に聞ゆ。しかも卿の胸中なほ綽々として餘裕を存し、危坐して神皇正統記を補訂す。一に大義名分を明かにするにありて、論旨堂々筆端風を

石分  
試  
あ

北山  
山  
山

小田城 茨城縣筑波郡小田村。



後村上天皇 後醍醐天皇の第七子。御在位二十九年。正平二十三年(二〇二八)年崩す。壽四十一。

阿蘇氏 代々阿蘇神社宮司として、その地方に雄たり。

生ずるものあり。卿が史學に精通し和漢古今の治亂得失に明かなる誠に驚嘆するに堪へたり。卿は又有職故實にも造詣深く、後村上天皇の立ち給ふや、兵馬倥傯の間において、よく職原鈔を草して、遙かに之を吉野朝に奉る。その博學洽聞なることは臥雲日件録に、前に三房あり、後に三房あり。稱せるにても知るべし。蓋し卿が學問に深奥なりしことは、當時第一に推稱せる所にして、萬里小路宣房、吉田定房と共に後の三房の稱あり。以て後三條天皇の御宇の、大江匡房、藤原伊房、同爲房を前の三房といへるに對せり。三内口訣には、宏才博覽世の推すところ。といひ、尺素往來には、卿が玄惠法印に資治通鑑を受け、この書に精通せしことを記せり。卿が學問の該博なりしこゝかくの如し。その政治的手腕といひ、軍事的經略といひ、卿が雄才大略は天賦に出づ。雖も、亦その

職原鈔二卷。我が國の歴代官職の沿革及び補任の次第を記せる書。

臥雲日件録 七十四卷。北禪和尚の著。

萬里小路宣房 後醍醐天皇に仕へて大納言に至る。その子は藤房なり。

吉田定房 後醍醐天皇の傳たり。内大臣に至る。

大江匡房 學者にて詩歌文章をよくす。大藏卿に至る。

藤原良房 學者。中納言に至る。

藤原爲房 官は參議大藏卿に至る。

三内口訣 一卷。三條西實枝の著。論旨勅書、女房奉書等を記せり。

尺素往來 二卷。一條兼良の著。小朝拜三節會甲

深遠博大なる學問に淵源すること少からざるべし。故に當時敵方と雖も卿に對しては特別の敬意を表したり。凡そ敵方に於ては、吉野朝の官位を認めざるに拘らず、ひゞり卿のみは北畠准后と稱せりといふ。卿の人格の高き、識見の優れたる、天下齊しく之を景慕せしや明かなり。

興國四年の秋、雲霞の如き敵兵の東下するや、卿は屢書を白河に送りて、結城親朝に忠孝の大義を説く。その語辭惻々として人の肺腑を穿つものあり。然るに親朝は遂に卿に従はず、其の父の遺訓に背き、忠孝の大節を抛ちて北軍に投ぜり。かくて一騎の來援だになく、關大寶の二城は忽ちに陥り、諸城も亦相尋いで降りければ、常陸の野また南軍の跡を止めず、卿が五年の辛勞こゝに水泡に歸せり。卿の痛憤如何ばかりなりしぞ。心ならずも海に浮かびて伊勢に還り、程を早

六〇  
胃・書籍・蹴鞠・茶毘・忌日・歳暮等六十餘種の文を載せたり。  
玄惠法師 比叡山の學僧。後醍醐天皇の侍讀。正平五(一三〇一)年歿す。年八十二。  
資治通鑑 二百九十四卷。目錄三十卷。考異三十卷。宋の治平中司馬光勅を奉じ、戰國より五代に至る。凡そ一千三百六十二年間の歴代君臣の事蹟を編修せるものなり。

大寶 茨城縣眞壁郡大寶村。

めて吉野の行宮に謁す。一夜君臣慷慨の涙に更の闌くるを覺えざりしならん。更に卿は久しく撫養せる熊野の水軍に命じ、西國の沿岸に出沒せしめて南軍に氣勢を添へ、一度は男山の行幸に際し、竊に兵を發して京師に入ると雖も、皇運日に非にして遂に賀名生に逃るゝに及んで、憂憤病んで薨ず。嗚呼絶大の忠臣も、天命又如何ともすべからず。

王事は寧ぞ成敗によつて論ぜん。唯順逆を知るこそ忠臣なれ。我が親房卿は生涯盡忠報國の念に燃えたるのみならず、その一族子孫も亦相繼いで王事に勤む。何ぞこれ壯なる。長子顯家は卿に先立ちて戰死せるが、次子顯信の裔は陸奥に残りて、後屢義兵を起して赤誠を天朝に捧げたり。其の末裔は津輕に住し、天文・永祿の頃に至りて、遂に亡びぬ。第三子顯能の子孫は伊勢に残りて伊勢國司と稱し、屢義舉を企て

あま 10 12 子  
三 12 子  
四 2 1 子  
五 4 1 子

六一  
王事云々 大槻清崇の詩に、  
王事寧將成敗論、  
唯知順逆是忠臣、  
斯公一死兒孫在、  
護得南朝五十春。  
顯信 正平中、懷良親王に従ひて少貳頼尙を筑前に攻めて戰歿す。  
天文・永祿 天文は後奈良天皇の御宇。永祿は正親町天皇の御宇。  
顯能 正平中、屢、高師秋を破りて之を擒殺す。同

しが、遂に織田信長に征服せられ了りぬ。されど卿の同族にして近親なる久我氏は、今に至るまで猶存續せり。彼の明治維新の元勳岩倉具視は實にこの家より出でたり。蓋し卿の至誠天に通じ、五百餘年を距て、岩倉公を待ちて其の宿志を遂げられたりといふべし。(田中義成「南北朝時代史」による)

さても八月の十日餘り六日にや、秋霧に侵されさせ給ひて、崩れましぬとぞ聞えし。ぬるが中なる夢の世、今に始めぬ習とは知りながら、かすく目の前なる心地して、老の涙もかさあへねば、筆の跡さへ滞りぬ。昔仲尼は獲麟に筆を絶つとあれば、こゝにて留りたくは侍れど、神皇正統の邪なるまじき理を申し述べて、素意の末をも顯さまほしくて、強ひて記しつけ侍るなり。豫て時をも悟らしめ給ひけるにや、前の夜より、親王をば左大臣の第に移し奉られて、三種の神器を傳へ申さる。後の號をば仰のまゝにて、後醍醐の天皇と申す。天下を治め給ふこと二十一年、五十二歳おましぬ。 (北畠親房「神皇正統記」)

七年京都に入りて足利義詮を走らす。弘和三(二〇四三)年歿す。

田中義成 史學者。文學博士。東京の人。東京帝國大學教授。大正九年歿す。年六十一。

【參考資料】

神皇正統記 六卷。北畠親房の著。神代より後村上天皇までの歴史。參考書には、河喜多真彦「評註校正神皇正統記」今泉定介「神皇正統記講義」大町桂月「神皇正統記評釋」御巫清勇「新註神皇正統記」

九 落花の雪

俊基朝臣は、先年土岐十郎頼貞が討たれし後、召捕られて鎌倉まで下り給ひしかども、様々に陳じ申されし趣げにも、さて赦免せられたりけるが、又今度の白狀ごにも、専ら陰謀の企彼の朝臣にありと載せたりければ、七月十一日に、又六波羅へ召捕られて、關東へ送られ給ふ。再犯赦さざるは法令の定むる所なれば、何と陳ずとも許されじ。路次にて失はるか、鎌倉にて斬らるゝか、二つの間をば離れじと思ひ設けてぞ出でられける。

落花の雪に踏迷ふ交野の春の櫻狩、紅葉の錦を着て歸る嵐の山の秋の暮、一夜を明す程だにも、旅寝こなれば物憂きに、恩愛の契淺からぬ我が故郷の妻子をば、行方も知らず思

【參考資料】

太平記 四十卷。作者不詳。後醍醐天皇の文保二年より後村上天皇の正平二十二年まで五十餘年間の戦亂に關することを記せるものなり。參考書には、西 道智「太平記大全」原 友幹「太平記綱目」今井弘濟・内藤貞顯「參考太平記」三木五百枝・大塚彦太郎「太平記詳解」萩野由之園「太平記註釋」

俊基朝臣 藤原氏。後醍醐天皇の寵眷を得、資朝と共に興復の謀に參し、事露れ、辯疏して漸く解く。後に又僧文觀の陳述によりて再び執へられ、鎌倉にて殺さる。時に元弘二(一九九二)年なり。七月 元弘元年。

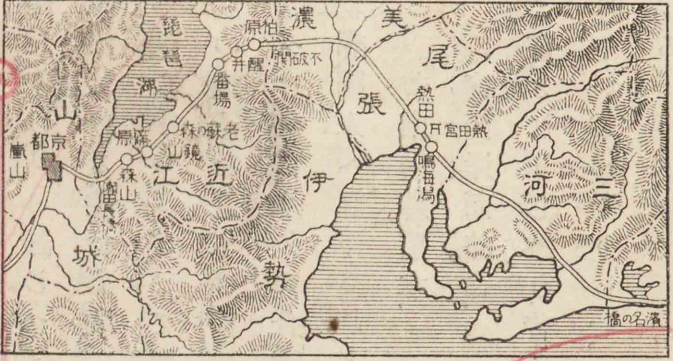
ひ置き、年久しくも住みなれし九重の帝都をば、今を限り願  
みて、思はぬ旅に出で給ふ心の中ぞ哀なる。



憂きをば留めぬ逢坂の關の清水  
に袖ぬれて、末は山路を打出の濱、沖  
を遙かに見渡せば、潮ならぬ海にこ  
がれ行く、身をうき舟の浮沈み、駒も  
さざろと踏鳴らす、勢多の長橋、打渡  
り、行きかふ人にあふみ路や、世をう  
ねの野に鳴く鶴も、子を思ふかこ哀  
なり、時雨もいたく守山の、木の下露  
に袖ぬれて、風に露散る篠原や、篠分  
くる道を過行けば、鏡の山はありこ  
ても、涙に曇りて見え分かず、物を思

交野の春 又やみむ交野の  
み野の櫻がり花の露ちる  
春の曙 藤原俊成  
交野は大坂府北河内郡に  
あり。  
紅葉の錦 朝まだき嵐の山  
の寒ければ紅葉の錦きぬ  
人ぞなき(藤原公任)  
逢坂の關 あふ坂の關の清  
水にかげ見えて今やひく  
らむ望月の駒(紀貫之)

うれの野 近江より朝立ち  
くればうれの野にたづぞ  
鳴くなるあけぬこの夜は  
(古今集)  
時雨もいたく 白露も時雨  
もいたくもる山は下葉の  
こらす色づきにけり(紀  
貫之)  
鏡の山は 鏡山いざ立ちよ  
りて見て行かむ年経ぬる  
身は老いやしぬると(大  
伴黒主)



給ふ。昔元暦三年の比かよと重衛門の中將の東夷のために捕はれたるこの船につき給  
ひし時、東路の石生り小屋ののせきにおくせとつかに驚しがるうらと長老の女が  
よつたりしそり右の哀まほしき涙のこぼれしをよみぬ涙なり。  
旅館の燈かすかにして、雞鳴曉を催せば、匹馬風に嘶えて、

へば夜の間にも、老蘇の森の下草に、  
駒を止めて顧みる、古郷を雲や隔つ  
らむ、番場醒が井、柏原、不破の關、屋は  
荒れはてて、猶もる物は秋の雨の、い  
つか我が身の尾張なる、熱田の八劍  
伏拜み、汐干に今や鳴海、濁傾く月に  
道見えて、明けぬ暮れぬと行く道の、  
末はいづこ遠江、濱名の橋の夕汐  
に、引く人もなき捨小舟、沈みはてぬ  
る身にしあれば、誰か哀さゆふ暮の、  
入相なれば今はこて、池田の宿に着

汐干に今や さよ千鳥聲  
そ近くなる海濁傾く月に  
潮やみつらむ(藤原季能)

天龍川を打渡り、小夜の中山越えゆけば、白雲路を埋み來て、  
 そこも知らぬ夕暮に、家郷の天を望みても、昔西行法師が、  
 「命なりけり」と詠じつゝ、二たび越えし跡までも、羨ましくぞ  
 思はれける。隙行く駒の足早み、日已に亭午に昇れば、かれい  
 ひ進らするほごこて、輿を庭前に昇き止む。轅をたゞきて警  
 固の武士を近づけ、宿の名を問ひ給ふに、菊川と申すなり。こ  
 答へければ、承久の合戦の時、院宣書きたりし咎に依りて、光  
 親郷關東へ召下されしが、此の宿にて斬られし時、  
 昔南陽縣、菊水、  
 汲下流而延齡、  
 今東海道、菊川、  
 宿西岸而終命、  
 と書きたりし遠き昔の筆の跡、今は我が身の上になり、あは  
 れやいと増りけむ、一首の歌を詠じて宿の柱にぞ書かれ  
 ける。

命なりけり 年たけてまた  
 越ゆべしと思ひきや命な  
 りけり小夜の中山(西行  
 法師)

光親卿 中納言宗行卿の誤  
 ならんといふ。

いにしへもかゝるためしをきく川のおなじ流に身  
 をや沈めむ

大井川を過ぎ給へば、都にありし名を聞きて、龜山殿の行  
 幸の嵐の山の花ざかり、龍頭鶴首の舟に乗り、詩歌管絃の宴  
 に侍りし事も、今は二たび見ぬ夜の夢と成りぬと思ひ續け  
 給ふ。嶋田藤枝にかゝりて、岡邊の眞葛うら枯れて、もの悲  
 しき夕暮に、宇都の山邊を越えゆけば、蔦楓いと茂りて道も  
 なし、昔業平の中將の住所を求むとて、東の方に下る時、夢に  
 も人に逢はぬなりけり。と詠みたりしも、かくやと思ひ知ら  
 れたり。清見瀉を過ぎ給へば、都に歸る夢をさへ通さぬ波の  
 關守に、いと涙を催され、向ひはいづこ三保が崎、興津蒲原  
 うち過ぎて、富士の高嶺を見給へば、雪の中より立つ煙、上な  
 き思に比べつゝ、明くる霞に松見えて、浮島が原を過行けば、

龜山殿 京都の西郊嵯峨に  
 ある龜山の離宮。

夢にも人に 駿河なるうつ  
 の山べのうつゝにも夢に  
 も人のあはぬなりけり  
 (伊勢物語)

富士の高根を 富士の根の  
 煙はなほぞ立ちのぼる上  
 なきものは思なりけり  
 (藤原家隆)

汐干や淺き船浮きて、おり立つ田子のみづからも、浮世を廻る車返し、竹の下道行きなやむ、足柄山の峠より大磯小磯見おろして、袖にも波はこゆるぎの、急ぐこしもはなれども、日數つもれば、七月二十六日の暮ほごに、鎌倉にこそ着き給ひけれ。〔太平記〕

先帝の御時、世の中移り變りもてきて、吉野の假宮にわたらせ給ひ、憂かりし年も事の騒の内に暮れはてて、春立つといふばかりなる御節會の様も、いと悲し。

さらざの半ば過ぎゆくほどに、御庭の櫻のやうく、咲きいでたるを御覽せさせ給ひて、勾當の内侍におほせられける

御歌

こゝにても雲居のさくら咲きにけりたゞ假初の宿と

思へど〔吉野拾遺〕

参考資料

吉野拾遺

二卷。作者不詳。延元元年より正平十三年までに於ける吉野朝の君臣の逸事を記せるものなり。参考書には、

中村秋香 「吉野拾遺詳解」

三栖幸一 「吉野拾遺詳解」

先帝 後醍醐天皇。

勾當の内侍 後醍醐天皇の宮女。後に新田義貞に嫁す。

一〇 吉野の軍

元弘三年正月十六日、二階堂出羽入道道蒔、六萬餘騎にて大塔宮の籠らせ給へる吉野の城へ押寄す。菜摘河の川淀より城の方を見上げたれば、嶺には白旗赤旗錦の旗、深山嵐に吹靡かされて、雲か花かこ怪しまる。麓には數千の官軍兜の星を輝かし、鎧の袖を連ねて、錦繡を布ける地の如し。峯高くして道細く、山嶮しうして苔滑かなり。されば、幾十萬騎の勢にて攻むることも、輒く落つべしとは見えざりけり。同じき十八日の卯の刻より、兩陣互に矢合せして、入れかへ入れかへ攻戦ふ。官軍は物馴れたる案内者どもなれば、此處の詰り彼處の難所に走り散りて、攻合はせ開き合はせ散々に射る。寄手は死生知らずの坂東武士なれば、親子討たるれども顧み



大塔宮 後醍醐天皇の皇子護良親王、延暦寺の座主となり大塔に居給ひしを以て大塔宮と稱し奉る。建武二(一九九五)年薨す。御年二十八。菜摘河 奈良縣吉野郡。吉野川の上流。

ず、主從滅ぶれども物の數ともせず、乘越え乘越え攻め近づ  
 く。夜晝七日が間息をもつかず相戦ふに、城中の勢三百餘人  
 討たれければ、寄手も八百餘人討たれにけり。況や矢に當り  
 石に打たれ、生死の際を知らざる者は幾許といふ數を知ら  
 ず。血は草芥を染め、屍は路徑に横たはれり。されども城の體  
 少しも弱らねば、寄手の兵多くは退屈してぞ見えたりける。  
 こゝにこの山の案内者にて、一方へ向かはれたりける吉  
 野の執行岩菊丸、おのれが手の者を呼寄せて申しけるは、東  
 條の大將金澤右馬助殿は、既に赤坂の城を攻落して金剛山  
 へ向かはれたりき聞ゆ。當山の事、われらの案内者たるに依  
 つて、一方を承つて向かひたるかひもなく、攻落さで數日を  
 送ることこそ遺恨なれ。つらく、事の様を案ずるに、この城  
 を大手より攻めば、人のみ討たれて落すこと有り難し。推量

岩菊丸 吉野執行は古より  
 吉水院・新熊野の兩家よ  
 り任す。この頃は吉水院  
 籠を蒙りて其の職に在  
 り。故に新熊野は怒りて  
 反を謀る。岩菊丸は新熊  
 野家なり。  
 金剛山 大阪府南河内郡に  
 あり。

するに、城の後の山、金峯山には峻しきを憑みて敵さまで勢  
 を置きたることあらじと覺ゆるぞ。物馴れたらむずる足輕  
 の兵五十人すぐつて歩立になし、夜に紛れて金峯山より忍  
 び入り、愛染寶塔の下にて、夜のほのく、こ明けはてむ時、鬨  
 の聲をあげよ。城の兵鬨の聲に驚きて度を失はむ時、大手、搦  
 手三方より攻上りて城を追落し、宮を生捕り奉るべし。こぞ  
 下知しける。さらばこゝて、案内知つたる兵百五十人をすぐつ  
 て、その日の暮ほごより金峯山へ廻して、岩を傳ひ谷を登る  
 に、案の如く山の峻しきを憑みけるにや、たゞこゝかしこの  
 梢に旗ばかりを結びつけ置きて、防ぐべき兵一人もなし。百  
 餘人の兵ごも思ひのまゝに忍び入つて、木の下、岩の陰に、弓  
 箭を伏せ兜を枕にして、夜の明くるをぞ待ちたりける。  
 合圖の頃にもなりにければ、大手の寄手五萬餘騎、三方よ

金峯山 奈良縣吉野郡吉野  
 村の東南にあり。

愛染寶塔 愛染明王を祭れ  
 る塔。



り押寄せて攻上る。吉野の大衆五百餘人攻口におり合ひて防ぎ戦ふ。寄手も城の内も互に命を惜しまず、追上せ追下し、火を散らしてぞ戦ひたる。かゝる所に、金峯山より廻りたる搦手の兵百五十人、愛染寶塔よりおり下つて、在々處々に火をかけて鬨の聲をぞ揚げたりける。吉野の大衆前後の敵を防ぎかねて、或は自ら腹を搔切つて、猛火の中へ走り入りて死するもあり、或は向かふ敵に引組んで刺しちがへて共に死するもあり、思ひつゝに討死をしけるほごに、大手の壕一重は死人に埋りて平地になる。

さるほごに、搦手の兵思ひも寄らず勝手の明神の前より押寄せて、宮の御座ありける藏王堂へ打つて懸りける間、大塔宮今は遁れぬ所なりと思しめし切つて、赤地の錦の鎧直垂に、緋緘の鎧のまだ巳の刻なるを隙間もなく召され、龍頭

勝手の明神 吉野八神の内なり。  
藏王堂 吉野町の中央に在り。藏王権現を祭る。  
巳の刻 午前十時頃をいふ意にて、品物の未だ新しき義に轉用す。

の兜の緒をしめ、三尺五寸の小長刀を脇に狭み、劣らぬ兵二十餘人前後左右に立ち、敵の群がりて控へたる中へ走り懸り、東西を拂ひ南北へ追廻し、黒煙を立てて切つて廻らせ給ふに、寄手大勢なりと雖も、纔かの小勢に切立てられ、木の葉の風に散るが如く、四方の谷へさつと引く。敵引けば、宮は藏王堂の大庭に並み居させ給ひて、大幕うち揚げて最後の御酒宴あり。宮の御鎧に立つ所の矢七筋御頬さき、二の御腕二箇處突かれさせ給ひて、血の流るゝこと瀧の如し。然れども、立ちたる矢をも抜かず、流るゝ血をも拭ひ給はず、敷皮の上に立ちながら大盃を三度傾けさせ給へば、小寺相模、四尺三寸の太刀の鋒に敵の首をさし貫きて、宮の御前にかしこまり、戈鋌、劔戟を降らすこと電光の如くなり。磐石岩を飛ばすこと春の雨に相同じ。然りとは雖も、天帝の身には近づかで、

修羅彼がために破らる。こはやしを揚げて舞ひたる有様は、漢楚の鴻門に會せし時、楚の項伯と項莊とが劍を抜き舞ひしに、樊噲庭に立ちながら、帷幕をかゝげて項王を睨みし勢もかくやと覺ゆるばかりなり。大手の合戦急なりと覺えて、敵身方の鬨の聲相交りて聞えけるが、げにもその戦に自ら相當るこゝ多かりけり。見え、村上彦四郎義光、鎧に立つ所の矢十六筋、枯野に残る冬草の風に伏したる如くに折りかけて、宮の御前に参りて申しけるは、大手の一の木戸、いふがひなく攻破られつる間、二の木戸に支へて數刻相戦ひ候ひつる所に、御所中の御酒宴の聲、すさまじく聞え候ひつるにつけて参つて候。敵既にかさに取上げて、御方の氣の疲れ候ひぬれば、この城にて功を立てむこゝ、今は叶はじと覺え候。未だ敵の勢をよそへ廻し候はぬ前に、一方より打破つ

漢楚云々 史記高祖本紀に「項王、因留沛公與飲。項莊入爲壽、壽畢、拔劍起舞。項伯亦拔劍起舞、常以身翼沛公。樊噲即帶劍擁盾入軍門、披帷西嚮立、瞋目視項王。怒髮上指、目眦盡張。」村上義光 通稱は彦四郎。信濃の人。

かさに取上げ かさは物の多きないふ。即ち軍勢を多く集めたるなり。

て、まづ落ちて御覽あるべしと存じ候。たゞし跡に残り留つて戦ふ兵なくば、御所の落ちさせ給ふものなりと心得て、敵づくまでも續きて追懸け進らせむと覺え候へば、恐ある事にて候へども、召されて候錦の御鎧直垂と御物具を下し賜はつて、御諱の字を冒して敵を欺き、御命に代り参らせ候はむと申しければ、宮いかにかかざるこゝあるべき。死なば一處にてこそ、こゝもかくもならぬ。と仰せられけるを、義光詞を荒らかにして、かゝる淺ましき御事や候。漢の高祖、滎陽に圍まれし時、紀信高祖の眞似をして楚を欺かむと乞ひしをば、高祖これを許し給ひ候はずや。これ程にいふかひなき御所存にて、天下の大事を思しめし立ちけるこゝこそうたてけれ。はやその御物具を脱がせ給ひ候へ。と申して、御鎧の上帯を解き奉れば、宮げにもこや思しめしけむ、御物具鎧直

漢の高祖云々 史記高祖本紀に「漢軍絶食、乃夜出女子东门、二千餘人被甲、楚因四面擊之。將軍紀信乃乘王駕詐爲高祖、誑楚、楚皆呼萬歲。之城東、觀以故漢王得遁。」與「數十騎」出「西門」

垂まで脱替へさせ給ひて、われ若し生きたらば、汝が後世を  
弔ふべし。共に敵の手にかゝらば、冥途までも同じ岐に伴な  
ふべし。と仰せられて、御涙を流させ給ひながら、勝手の明神  
の御前を南へ向かひて落ちさせ給へば、義光は二の木戸の  
高櫓に登り、遙かに見送り奉り、宮の御後影のかすかに隔ら  
せ給ひぬるを見て、今はかうと思ひければ、櫓の狭間の板を  
切落し、身をあらはにして、大音聲を揚げて名のりけるは、天  
照大神の御子孫、神武天皇より九十六代の帝、後醍醐天皇第  
二の皇子、一品兵部卿親王尊仁、逆臣の爲に亡され、恨を泉下  
に報ぜむ爲に、只今自害する有様見置きて、汝等が武運忽ち  
に盡きて腹を切らむとする時の手本にせよ。といふまゝに、  
鎧を脱ぎて櫓より下へ投落し、錦の鎧直垂の袴ばかりに、練  
貫の二つ小袖をおし、膚脱いで、白く清げなる膚に刀をつき

立て、左の脇より右のそば腹まで一文字に搔切つて、腸臄ん  
で櫓の板に投げつけ、太刀を口に啞へてうつ伏になりてぞ  
伏したりける。

大手搦手の寄手これを見て、すはや大塔宮の御自害ある  
は、われ先に御首を賜はらむとて、四方の圍を解きて一處に  
集る。その間に、宮は引違へて天の河へぞ落ちさせ給ひける。  
南より廻りける吉野の執行が勢五百餘騎、多年の案内者な  
れば、道をよぎり、かさに廻りて打留め奉らむとぞ取籠むる。  
村上彦四郎義光が子息、兵衛藏人義隆は、父が自害しつる  
時、共に腹を切らむと二の木戸の櫓の下まで馳せ來りたり  
けるを、父大いに諫めて、父子の義はさることなれども、暫く  
生きて宮の御先途を見はてまらせよ。と庭訓を殘しけれ  
ば、力なく暫くの命を延べて、宮の御伴にぞ候ひける。落行く

天の河 奈良縣吉野郡丹生  
川谷の南にあり。十津川  
の上流。

義隆 年十八。

道の軍事既に急にして討死せずば宮落ちさせ給はじと覺えければ義隆たゞ一人踏留りて追ひてかゝる敵の馬の諸膝薙ぎては切りする平頸切つては刃落させつゞらなる細道に五百餘騎の敵を相受けて半時ばかりぞ支へたる義隆節石の如くなりといへどもその身金鐵ならざれば敵の取巻きて射ける矢に既に十餘箇處の疵を被りてけり死ぬるまでもなほ敵の手にかゝらじとや思ひけむ小竹の一群ありける中に走り入つて腹搔切つて死ににけり。

村上父子が敵を防ぎ討死しけるその間に宮は虎口に死を御遁れありて高野山へぞ落ちさせ給ひける出羽入道道蘊は村上が宮の眞似をして腹を切りたりつるを眞實と心得てその首を取つて京都へのぼせ六波羅の實檢にさらすにありもあらぬ者の首なりと申しける間獄門にも懸けら

高野山 和歌山縣伊都郡。

九原 支那の晉の卿大夫の墓ある地名。

千劍破城 大阪府南河内郡金剛山の中腹にあり。

參考資料

新葉和歌集 二十卷。撰者は宗良親主。元弘より弘和に至る吉野朝の君臣の詠歌一千四百十五首を收む。參考書には、村上忠順「頭註新葉和歌集」

れずして九原の苔に埋れにけり。道蘊は吉野の城を攻落したるは專一の忠戦なれども大塔宮を討漏らし奉りぬればなほ安からず思ひてやがて高野山へ押寄せ大塔に陣を取つて宮の御在處を尋ね求めけれども一山の衆徒皆心を合はせて宮を隠し奉りければ數日の粉骨かひもなくて千劍破城へぞ向かひける。〔太平記〕

みやこだにさびしかりしを雲はれぬ吉野の奥の五月雨のころ (後醍醐天皇)

思ふことなくてぞ見ましほのぐと有明の月の志賀の

うら波 (藤原師賢)

鳥の音におどろかさされて曉のねざめしづかに世をおも

ふかな (後村上天皇)

君のため世のため何か惜しからむ捨ててかひある命なりせば (宗良親王) (新葉和歌集)

一一四季

折ふしの移りかはるこそものごごにあはれなれ。物のあはれは秋こそまされ。人ごごにいふめれど、それもさるものにて、いまきは心も浮きたつものは春の景色にこそあめれ。鳥の聲などもこの外に春めきて、のどやかなる日かげに、垣ねの草萌出づる頃より、やゝ春深く霞み渡りて、花もやう／＼けしきだつ程こそあれ、折しも雨風うち續きて、心あわたゞしく散り過ぎぬ。青葉になりゆくまで、萬づにたゞ心をのみぞなやます。花橘は名にこそ負へれ、なほ梅の匂にぞ、古のこころも立ちかへり戀しう思ひ出でらるゝ。山吹の清げに、藤のおぼつかなきさましたる、すべて思ひすて難きこと多し。

參考資料

徒然草 二卷。兼好法師の隨筆。參考書の主なるものは、  
 林 道春 「徒然草野槌」  
 加藤磐齋 「徒然草抄」  
 北村季吟 「徒然草文段抄」  
 淺香久敬 「徒然草諸抄大成」  
 内海弘藏 「徒然草詳解」  
 塚本哲三 「徒然草解釋」

神後



灌佛の頃、祭の頃、若葉の梢すゞしげに茂りゆく程こそ、世

のあはれも、人の戀しさもまされ、人の仰せられしこそ、げにさるものなれ。五月菖蒲葺く頃、  
 六 早苗さる頃、水鶏の叩くなど、心細からぬかは。六月の頃、あやしき家に夕顔の白く見えて、蚊遣火ふすぶるもあはれなり。六月  
 祓 祓またをかし。

棚機祭るこそなまめかしけれ。やう／＼夜寒になるほど、雁鳴きて來る頃、萩の下葉色づくほど、わさ田刈りほすなど、取集めたる事は秋のみぞ多かる。

灌佛の頃 四月八日。佛生會。

祭の頃 賀茂の祭。四月中の酉の日。

六月祓 夏祓・名越祓ともいふ。六月晦日に行ふ。

また野分の朝こそをかしけれ。いひつゞくれば、みな源氏物語、枕草子なごにこそふりにたれど、同じことまた今更にい  
はじごにもあらず、おぼしき事いはぬは腹ふくる、業なれば、筆にまかせつゝ、あぢきなきすさびにて、搔いやり棄つべきものなれば、人の見るべきにもあらず。

さて冬枯の景色こそ、秋にはをさく、劣るまじけれ。汀の草に紅葉の散りこぼまりて、霜いと白う置ける朝遣水より煙の立つこそをかしけれ。年の暮れはてて、人ごごに急ぎあへる頃ぞ、又なくあはれなる。すさまじきものにして、見る人もなき月の、寒けく澄める二十日餘りの空こそ、心細きものなれ。御佛名、荷前の使立つなごぞ、あはれにやむごとなき。公事ごも繁く、春のいそぎに取重ねて、催し行はるゝさまぞいみじきや。追儼より四方拜につゞくこそおもしろけれ。

枕草子云々 卷八「春は曙」参照。

御佛名 十二月十九日より三日間宮中に行はるゝ佛事。六根の罪を消滅さする爲なり。  
荷前の使 毎年諸國より奉る貢穀の荷の初穂を諸陵

つごもりの夜いたう暗きに、松ごもこもして、夜半過ぐるまで人の門たゞきはしりありきて、何事にかあらむ、ことごとしくのゝしりて、足を空にまごふが、曉方より流石に音なくなりぬるこそ、年のなごりも心ぼそけれ。亡き人の來る夜こそ、魂祭るわざは、この頃都にはなきを、あづまの方にはなほすることにてありしこそあはれなりしか。  
かくて明けゆく空のけしき、昨日に變りたりごは見えねご引きかへ珍らしき心地ぞする。大路のさま、松立てわたして、花やかにうれしげなるこそ、またあはれなれ。

（吉田兼好「徒然草」）

木の芽春雨ふるとても、ふるとても、なほ消えがたきこの野べの、雪の下なる若菜をば、今いくかありて摘ままし。春たつといふばかりにや、み吉野の山もかすみて、白雪の消えしあとこそ路となれ、路となれ。（閑吟集）

に献す。その使を荷前の使といふ。十二月中の吉日を選びて遣さる。

閑吟集 室町時代に行はれし小唄を集録したるものにて、歌謡三百餘篇を収む。

### 一二 謠曲の本質

時代の精神を最もよく現した文學は、大抵の場合、その時代の最もよき文學である。謠曲は室町時代の思潮を最もよく代表した文學で、同時にこの時代の最も優れた文學であつた。この謠曲を保護した者は誰であつたか、大成した者は誰であつたか、抑、又謠曲が室町時代の思潮を表はすことは如何なる意味に於てであるか。

今川貞世の鹿苑院准后嚴島詣記に、能樂の最初の保護者たる足利義滿が嚴島詣の折の好みの服装を寫して、

昔も嚴島には高倉院御幸なり、平のおほきおほいもうち君も度々詣でられし例も侍りけめども、此の度は引きかへて珍らしき御姿ごさまもにて、縹色はなだに目結ひこかやいふ紋

を染めて、袖口細く裙ひろき打掛うちかけさいふものを、同じ姿に着給ふ。赤き帯に、青色の脛巾はし、赤色の短き袴なり。御供の人人皆みささミカサカサばかりなる金刀かねども差させらる。傍の人は誹り侍りけめども、かやうの事は強ちに法も式も定まらず、たゞ時代に從ふことぞかし。

格式のやかましい世の中に、將軍の身を以て狂言まがひの赤装束は奇抜過ぎる。世間の陰口も多かつたであらう。併しながら、彼は世間に拘らず自家の趣味を發揮する勇氣を持つて居た。天授年中、今熊野の猿樂に觀阿彌清次を見出し、破格の待遇を敢へてして能樂の創立に骨折らせ、次いで世阿彌元清に殊寵を加へて新藝術の大成に一生を獻げしめた。彼は又狂言師を引立てて、狂言をば能樂に伴なふべき立派な藝術たらしめた。かくして從來趣味の低い民衆僧侶等

#### 參考資料

謠曲 能樂に用ふる歌詞。能樂は神事に際して舞樂を奏し神慮を慰むる風習より起り、平安朝の頃には茶番狂言の如きものとなる。之を猿樂といへり。  
鎌倉時代の初期にはこの技を專業とするものあり。室町時代に至りて觀世流の猿樂師結崎清次・元清の父子、將軍に寵せられて詞曲曲節舞方を一定し、之を將軍家の式樂となせり。觀世・寶生・金春金剛・喜多の諸流あり。その曲目の今日に行はるゝもの約二百番は、皆室町時代の作に係る。參考書には、  
大和田建樹「謠曲評釋」  
和田萬吉「謠曲物語」  
野口米次郎「能樂の鑑賞」  
峰谷時順「謠曲辭典」

今川貞世 剃髮して了俊と稱す。上總介範國の二子。鎮西探題たり。著書多し。鹿苑院准后嚴島詣記 一卷。元中六年三月、今川貞世が足利義滿に侍して嚴島に詣でし時の日記。平のおほきおほいもうち君 太政大臣平清盛。觀阿彌清次 觀世派猿樂師の祖。足利氏に從ひ大和結崎を領す。應永十三(二〇六六)年歿す。年五十二。  
世阿彌元清 觀世清次の長子。足利義滿・義教に仕ふ。能樂の大成者。その作品には八幡相生・養老・老松・龜登・蟻通・箱崎・鶴羽・打・松風・村雨・百萬・檜垣女・薩摩守・實盛・賴政・清經・敦盛・空也・逢坂・戀の重荷・佐野の船橋・泰山府君の二十二曲の他に、その作を傳へらるゝもの七十餘曲あり。康正元(二二一五)年歿す。年八十一。

に弄ばれた幼稚な田舎藝・大道藝・餘興的雜藝は、彼の誘導獎勵の下に統べ合はせ磨き上げられて、眼の高い人に鑑賞せられる程の立派な藝術となり、遂に叡覽に供せらるゝまでに至つた。彼に次いでこの新藝術の興隆に與つて力のあつたのは足利義政である。彼の鑑賞眼は流石に高く、その止むに止まれぬ藝術癖は年々共に募つて來た。その晩年、天下は亂れて朝儀も廢せられ、節會も行はれない時に當つても、猿樂だけは曾て止めたことが無かつた。かやうな間に養はれた趣味が本となつて、謠曲も茶器も雪舟の畫も出來たのである。

武家の天下であつた室町時代は、武士道を本位とし、簡素を主としたことは、大體鎌倉時代の思想を受繼いで居たが、その特色は鎌倉思想と平安朝思想とを調和した所にある。

足利義政 將軍。義教の子。延徳二(一一五〇)年歿す。年五十六。東山に銀閣寺を建てて逸樂をつくせり。これが爲に東山時代と稱する美術工藝の盛時をなせり。

雪舟 畫僧。北宗畫雪舟流の祖。永正三(一一六六)年歿す。年八十七。

打續いた戰亂が漸く治るに及んで、だん／＼に鎌倉式の樸實に過ぎて雅致に乏しいのが厭になり、平安朝文藝の優美で彫琢を極めたのが懐かしくなつて來た。鎌倉武士が治世・修身・安心立命の要具として眞面目に歸依した禪宗を、室町時代には茶味・禪味などいって、我が言行に寂び・床しみを添へる一種の光澤<sup>くわさつ</sup>出し道具として取扱ふ傾向を生じて來た。かくして此の時代は、一種の華美な趣味を發揮して來たが、それは普通の華美、平安朝の如き華美ではなくて、鎌倉式の樸實に燻しをかけた華美であつた。隨つて一面から見れば、やはり一種の樸實趣味であつたが、鎌倉そのまゝの樸實ではなくて、平安朝の艶を帯びた樸實、底に華美の光輝を韜んだ樸實であつた。鎌倉の圓覺寺・建長寺を見て後に、京都の金閣寺・銀閣寺を見れば、此の趣味の相違が解ると思ふ。茶器



にも、雪舟・雪村の繪にも、能にも、謠曲にも、皆この室町趣味が溢れて居る。吾等は、この華麗と簡樸との相反した二要素の奇しき調和に、寂びといふ不思議な美が成立つたもので、そしてこれが此の時代の中心趣味であると思ふが、當時の文學中此の趣味を最もよく現したものは何かといふと、それは謠曲である。

當時の武士は簡易な生活に甘んじて居た。茶の湯なども本來はこの簡易な生活の標章であつたのであらう。四疊半の小座敷に數人相會して狭しこもせず、木の葉で染めた蓑服を纏ひ、簡単な御馳走に安んじて光風霽月の心地を樂しむといふが如きは、此の時代でなくては發明せられぬことである。彼等がかやうに簡易な生活に安んじたが、文藝の方面において憧るゝ所は、前代の艶麗な文學や、漢土の立派な

雪村 畫僧。常陸の人。周文・雪舟の畫風にならひ、一家をなす。正平二(一二〇〇)年歿す。年五十七。

文章などであつた。御伽草子などには、田舎少女の身嗜みに古今萬葉伊勢源氏狹衣を讀破したなどいふことがあり、阿漕の浦の魚屋が源氏物語を説くなどいふことが述べてある。當時相應の學者でさへ容易に讀めなかつた萬葉集や源氏物語が、田舎少女や魚屋や普通の武士などに讀めよう筈がない。これは畢竟噛みこなせぬ古文學に對する時人の憧憬心を裏面から證明したものである。彼等がかやうに和漢の古文學を崇拜した。併しながら文學の衰へた世の中にて、容易にこれを理解することすらも出來なかつた。ましてこれに對抗すべき新作を出すなどいふことは及びもつかぬことであつた。かくして彼等の力に叶ふことで、彼等の理想に近い仕事は、古文學の名文句を集め、これに繼ぎはぎの意匠を施して纏めることであつた。此の骨折の結果として謠

御伽草子 九〇頁參照。

阿漕の浦 三重縣安濃郡さ一志郡に亘れる海濱。

曲といふ繼ぎはぎ文學、綴錦文學が起つたのである。そして此の文學を最も巧みに最も多く書いて、謠曲を大成したものは世阿彌元清であつた。

繼ぎはぎは獨り謠曲の特色であるばかりでなく、當時の文學の殆ど全體に通じた特色であつた。例へば御伽草子の如きは、思想、文章の兩面に通じて適不適をば問はず、唯美ならんことをのみこれ求めた。美なる事物、美なる文句の寄せ木細工であつて、その不自然、背實、矛盾に心づかなかつた。これが當時の小説の傾向であつた。謠曲も是等と傾向を同じうして居つたが、是等ほどには不自然の嫌が無いばかりか、往々古名句を駕御して、獨自の美を發揮して居る所もある。謠曲は集美補綴の方式を最も濃厚に最も激しく用ひて居りながら、しかも他の同臭味の文學に比すれば、長所のみを

御伽草子 室町時代より徳川時代初期までに、婦人、子供の讀物として作られたる小説の概稱。これ等を集録したるものに「御伽草子」と「新編御伽草子」あり。前者には正文草子・鉢かつき・小野小町・御曹子・島渡り・唐絲草子・木幡きつね・七草草子・猿源氏草子・物臭太郎・さざれ石・蛤の草子・小敦盛・二十四孝・梵天國のせざる草子・猫の草子・濱出草子・和泉式部・一寸法師・佐伯・浦島太郎・横笛草子・酒吞童子の二十三種を收め、後者には福富草子・十番の物争・音なし草子・若草

採つて短所を分け前せぬ傾向があつたやうに見える。

謠曲には源氏物語・伊勢物語・古今和歌集・平家物語・和漢朗詠集・白氏文集・佛典などの名文句が無數に取入れてある。併しながら、其等の美しい名句は、謠曲においてはたゞ美しさを現すばかりでなく、其の綴り合はされた間に、不思議にも一種の寂びを現して居る。華やかな裡に苔の生えた、燻しかゝつた、曇つた、物靜かな、幽寂な、神秘的な趣がある。この美麗な數々の文句を寂びた靜かな趣味で裏打して繋いで居る所が、實に當時の武士が簡易に住して華麗に憧憬した心情とびつたりと契合して居る所で、謠曲の特色・價值・生命がここに存するのである。

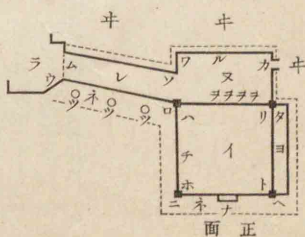
この味ひは謠曲の實演せらるゝ能を見れば、一層明かになる。能舞臺に入つてまづ目につくのは、正面の鏡板に畫か

かざしの姫君・常盤の姫・小おちくば・今宵の少將・毘沙門の本地・貴船の本地・淨瑠璃十二段草子・つき島・化物草子・魚鳥・家狐の草子・ころぎ草子・玉蟲の草子・柿木の系圖・立烏帽子・尤の草子の二十種を收めたり。  
白氏文集 唐の詩人白樂天の詩文集。

能樂  
田樂  
散樂  
儀樂  
神樂

れた一本の老松——千年の苔にさびて大地にすわり込んだやうな神々しい老松——あの老松は天地山川風水月露雨雪雷電花鳥木石等のあらゆる自然現象老若男女貴賤貧富平和鬭争喜怒哀樂等のあらゆる人事の背景として用ひられその寂びた静かな風趣を以て善悪美醜莊嚴滑稽あらゆる所作を統べて居る役者の謠ひぶり舞ひぶりは例の寂びた落ちついた底力のある聲や曲や所作を以て全體を一貫して居る悲しい事も嬉しい事も華やかな事も淋しい事も可笑しい事も恐ろしい事も若い者の事も年寄の事も男の事も女の事も天女の事も鬼神の事も散歩も駄足もすべて寂び色の同一色曇つた苔の生えた底力のある聲であらはず春霞たなびきにけり久方の月の桂の花や咲く。こいふが如き華やかな文句をば鶯の如き嬌音で謠ふかと思へば、

能舞臺



舞臺。シテ座。目附柱。脇正面。後座。鏡板。後見座。切戸口。貴人口。狂言座。橋懸。白洲。二ノ松。三ノ松。鏡ノ間。幕口。物見窓。樂屋。

春霞云々「羽衣」の句。

何のやはりドホラクの老人聲、仙人聲、肉食火食とは縁の遠さうな木食式の聲である。松風や大原御幸の優婉な曲も、業平も、小町も、天人も、源氏ものも、花の精も、燦爛赫奕たる文句も、其の通りである。急ぎ候ほごに。こは謠ふが、悠々寛々、至極太平なものである。泣くには手の目を離るゝ、こゝ三寸ばかり。能の術語に、悲しみて俯向く様を曇るこいひ、泣く事を奏るこはよく云うたもので、いかにもよく能の特色を説明して居る。音楽はこいふこ、大小鼓、笛のドン／＼、パイ／＼、で、叩き聲、ひしぎ聲の餘韻の無いもの。地謠はこいふこ、シテワキ、ツレの聲の甲高になり易いのを曇つたドホラ聲で抑へ抑へ鎮め鎮めて行く。面はあの通りの澁い艶消しの神秘的なものである。華麗に憧憬して簡易に安住した武士の心持は、なんこ此の中に毫末の遺憾もなく現されて居るではな

源氏もの 源氏物語に題材をこれるもの。

いか。殊に謠はれる詞章が絢爛の名句づくめなることと對照して、一層面白い。

我が謠曲能樂の特色を見て思ひ浮かぶのは希臘美術の特色である。ヴィンケルマンは、其の名著「古代美術史」の中に、希臘美術の特色を説明して、希臘美術の妙味は高潔にして靜寂なる威嚴の備つた所にある、其の彫刻を見ること、いづれも情海波瀾の中に於て、靜かな重々しい落付があること、いひ例の名彫刻「ラオコオン」を論じて、表には苦痛呻吟の情の千波萬波を浮かべて居るが、底には寂然として騒がざる落付があること云つて居る。謠曲能樂に現るゝ味ひも大分これに似通うた所があつて、言葉文字の表面には多くの美しい事物や複雑な感情が現れて居るが、それをば一種の單純質樸な、寂びのある威嚴で繋いで落付かせてゐる。そしてこれに

ヴィンケルマン 獨逸の美術批評家。1716—1767。

ラオコオン ローマの詩人  
ヴィルギリウスの敘事詩  
「エネイド」中にうたはれ  
し人物。その海蛇に巻か  
れし苦みを表現したる像  
今ローマのヴァチカン宮  
殿に在り。

接すること、謠ふ者も、舞ふ者も、見る者も、聞く者も、寂びた落付を感じて、心が上品になり、野卑陋劣な俗情を洗ひ流されたやうな心地がする。能のあと三日。といふのはこれで、此の感じは、芝居や、淨瑠璃や、落語や、俗歌や、小説や、音樂などでは、到底得られぬものである。

およそ文藝は、必ずしも人に慰安を與へ心を落付かせねばならぬものとは限らぬ。相手を有頂天にしても、問題を與へて考へさせても、悶えさせても、いま／＼しがらせても、不快を感じさせても、その心を壓迫して人間が厭にならしても、必ずしも其の藝術品たるを妨げまい。けれども、相手の心を落付かせ、鄙俗の心を洗ひ流させること、いふことが文藝の主要な、又高尚な本領の一つであることは疑の無いことで、此の點に於て謠曲能樂は、わが古今の文藝に比類のない位

置を占めて居るものであると考へる。

(五十嵐力「新國文學史」による)

諸道諸事に於ては幽玄なるをもて上果とせり。殊更當藝に於て、幽玄の風體第一とせり。抑、幽玄の堺とは、いかなる所にてあるべきやらん。まづ、世上の有様をもて、人の品々を見るに、公家の御たゝすまひの位高く人望世にかはれる御有様、これ幽玄なる位と申すべきやらん。然らば、たゞ美しく、柔和なる體、幽玄の本體なり。人體のどかなる粧ひ、人體の幽玄なり。又言葉優しくして、貴人上人の御ならはしの言葉遣ひをよくく習ひ、假初なりとも、口より出さんする言葉の優しからん、これ言葉の幽玄なるべし。又音曲において、節がかり美しく下りてなびなびと聞えたらんには、これ音曲の幽玄なるべし。舞はよくよく習ひて、人體のかゝり美しく、靜かなる粧ひにて、見所面白くば、これ舞の幽玄にてあるべし。(世阿彌十六部集による)

五十嵐力 國文學者。文學博士。明治七年米澤市に生まる。東京專門學校文學科出身。早稻田大學文學部長。

一三鉢木

シテ 佐野源左衛門常世  
ツレ 同 妻  
ワキ 旅僧。實は最明寺時頼  
ツレ 同 者  
狂言 右 の 從 者

ワキ次第、ゆくへ定めぬ道なれば、來し方も何處ならまし。

ワキ、これは一處不住の沙門にて候。我この程は信濃の國に候ひしが、餘りに雪深くなり候ほごに、まづこの度は鎌倉に上り、春になり修行に出でばやと思ひ候。

道行、信濃なる淺間の嶽に立つ煙、遠近人の袖寒く、吹くや嵐の大井山捨つる身になき友の里、今ぞ浮世を離れ坂墨の衣の碓氷川、下す筏の板鼻や、佐野の渡りに着きにけり。  
ワキ、急ぎ候ほごに、上野國佐野の渡りに着きて候。あら笑止

信濃なる 信濃なる淺間の

嶽に立つ煙、遠近人の見やはがめぬ(伊勢物語)

大井山・友の里・離れ坂・碓氷川・板鼻 共に信濃より碓氷峠を経て上州高崎に至るまでの地名。

佐野 高崎の東二十町にあ

や、又雪の降來りて候。この處に宿を借らばやと思ひ候。いかにこの屋の内に案内申し候。

ツレ「誰にてわたり候ぞ。」

ワキ「これは修行者にて候。一夜の宿を御かし候へ。」

ツレ「易き御事にて候へども、主の御留守にて候ほごに、御宿は協ひ候まじ。」

ワキ「さらば御歸までこれに待ち申さうずるにて候。」

ツレ「それはごもかくもにて候。妾は外面へ出で迎ひ、この由を申さばやと思ひ候。」

シテ「あゝ、降つたる雪かな。如何に世にある人の面白う候らん。それ雪は鵝毛に似て飛んで散亂し、人は鶴氈を着て立つて徘徊すといへり。されば今降る雪も、もご見し雪に變らねごも、われは鶴氈を着て、立つて徘徊すべき袂も朽ちて袖せ

雪は鵝毛に、雪似鵝毛飛散亂人被鶴氈立徘徊。  
(和漢朗詠集)

細布衣 陸奥の希婦(けふ)の里の名産。

ばき、細布衣陸奥の、けふの寒さを如何にせん。あら面白からずの雪の日やな。あら思ひよらずや、この大雪に何とてこれに佇みて御入り候ぞ。

ツレ「さん候。修行者の御入り候が、一夜の御宿と仰せ候ほごに、御留守の由申して候へば、御歸まで御待あらうずるよし仰せ候ほごに、これまで参りて候。」

シテ「扱その修行者はいづくに渡り候ぞ。」

ツレ「あれに御入り候。」

ワキ「我等が事にて候。未だ日は高く候へども、餘りの大雪にて前後を忘れて候ほごに、一夜の宿を御貸し候へ。」

シテ「やすき御事にて候へども、餘りに見苦しく候ほごに、御宿は協ひ候まじ。」

ワキ「いや、見苦しきは苦しからぬ事にて候。ひらに一夜

を御貸し候へ。

シテ「ごめ申したくは候へども、我等夫婦さへ住みかねたる體にて候ほごになかく、御宿は思ひもよらぬ事にて候。これより十八町あなたに、山本の里とてよき泊りの候。日も暮れぬさきに一足もはやく御出で候へ。」

ワキ「扱はしかご御貸しあるまじいにて候か。」

シテ「御痛はしくは存じ候へども、御宿は參らせ難う候。」

ワキ「あら曲もなや、よしなき人を待ち申して候ものかな。」

ツレ「淺ましや、我等かやうに衰ふるも、前世の戒行拙き故なり。せめてはかやうの人に値遇申してこそ後の世の便りもなるべけれ。然るべくは御宿を參らせ給ひ候へ。」

シテ「左様に思しめさば、何とて以前には承り候はぬぞ。いやこの大雪に遠くは御出で候まじ。某追つ付き止め申し候べし。」

しなうく、旅人御宿參らせうなう。餘りの大雪に、申す事も聞えぬげに候痛はしの御有様やな。もご降る雪に道を忘れ、今降る雪に行方を失ひ、一處に佇みて、袖なる雪を打拂ひ打拂ひし給ふ氣色、古歌の心に似たるぞや。駒とめて袖うち拂ふ蔭もなし、佐野の渡りの雪の夕暮。かやうによみしは大和路や、三輪が崎なる佐野の渡り、地「これは東路の佐野の渡りの雪の暮に、迷ひ疲れ給はんより、見苦しく候へども、一夜は泊り給へや。歌げにこれも旅の宿假初ながら、値遇の縁、一樹の蔭の宿りも、この世ならぬ契なり。それは雨の木蔭、これは雪の軒舊りて、憂き寝ながらの草枕、夢より霜や結ぶらん。」  
シテ「いかに申し候。お宿は申して候へども、何にても候へ、參らせうずる物もなく候はいかに。」  
ツレ「折節これに粟の飯の候ほごに、苦しからずば參らせら

駒とめて云々 藤原定家の詠。

れ候へ。

シテ「さらばその由申し候べし。いかに申し候。御宿をば参らせて候へども、参らせうざる物もなく候。折節これに粟の飯のある由申し候。苦しからずば聞こしめされ候へ。」

ワキ「それこそ日本一の事にて候。賜はり候へ。」

シテ「なう、聞こしめされうざるこ仰せ候。急いで参らせ候へ。」

ツレ「心得申し候。」

シテ「總じてこの粟と申す物は、いにしへ世にありし時は、歌に詠み、詩に作りたるをこそ承りて候に、今はこの粟を以て身命を繼ぎ候。げにや盧生が見し榮華の夢は五十年、その邯鄲の假枕、一炊の夢のさめしも粟飯炊ぐほごぞかし。あはれや、げに我もまた暫しなりこもうちも寢て、夢にも昔を見るならば、慰む事もあるべきに、なう御覽ぜよ、かほごまで、地住

盧生 支那の蜀の國に盧生  
さいふ青年あり、邯鄲の  
市にて道士呂翁の枕を借  
りて眠り、榮華五十年の  
夢を見しが、それは僅に主  
人が黄梁を炊ぐ間に過ぎ  
ざりしさいふ故事。

みうかれたる故郷の、松風寒き夜もすがら、寢られねば夢も  
見ず。何思ひ出のあるべき。

シテ「夜の更くるについて次第に寒くなり候。何をがな火に  
焚いてあてまゐらせ候べきや、思ひいだしたる事の候。鉢の  
木を持ちて候。これを切り、火に焚いてあて申し候べし。」

ワキ「げに、鉢の木の候よ。」

シテ「さん候。それがし世にありし時は、鉢の木に好き、數多木  
を集め持ちて候ひしを、かやうの體に罷りなり、いや、木  
ずきも無用と存じ、皆人に参らせて候。さりながら、今も梅櫻  
松を持ちて候。あの雪持ちたる木にて候。某が祕藏にて候へ  
ども、今夜の御もてなしに、これを火に焚きあて申さうずる  
にて候。」

ワキ「いや、これは思ひも寄らぬ事にて候。御志は有り難



う候へども、自然又お事世に出で給はん時の御慰みにて候間、なかく思ひも寄らず候。

シテ「いや、ごてもこの身は埋木の、花咲く世にあはん事、今この身にてはあひ難し。ツレ、たゞ徒なる鉢の木を、御身の爲に焚くならば、シテ、これぞまことに難行の法の薪と思しめせ。

ツレ「しかもこのほど雪降りて、シテ、仙人に仕へし雪山の薪、ツレ「かくこそあらめ、シテ、我も身を、地捨人の爲の鉢の木、切るごてもよしや惜しからじと、雪打拂ひて見れば、面白やかにせん。先づ冬木より咲きそむる、窓の梅の北面は、雪封じて寒きにも、ご木より先づ先立てば、梅を切りや初むべき。見じごいふ人こそうけれ山里の折りかけ垣の梅を、だに情無しと惜しみしに、今更薪になすべしとかねて思ひきや、櫻を見れば春毎に花少し遅ければ、この木やわぶるご心をつ

埋木の 埋木の花さくごともなかりしに身のなるはてぞあはれなりける(源頼政)

窓の梅 池、東、頭、風、度、解、窓、梅、北、面、雪、封、寒、和、漢、朗、詠、集、見、じ、ご、い、ふ、山、里、の、折、り、か、け、垣、の、梅、の、花、い、か、なる、人、の、見、じ、ご、い、ふ、ら、む、(菅、家、後、集)

くし育てしに、今は我のみわびて住む、家櫻切りくべて、緋櫻になすぞ悲しき。シテ、さて松はさしもげに、地、枝、を、た、め、葉、を、す、か、し、て、か、り、あ、れ、ご、植、え、お、き、し、そ、の、か、ひ、今、は、嵐、吹、く、松、は、も、ご、よ、り、煙、に、て、薪、ご、なる、も、理、や、切、り、く、べ、て、今、ご、み、垣、守、衛、士、の、焚、く、火、は、お、爲、な、り、よ、く、寄、り、て、あ、た、り、給、へ、や。

ワキ「近頃よき火にあたり、寒さを忘れて候。

シテ「御出でにより我等も火にあたりて候。

ワキ「いかに申し候。主の御名字をば何ご申し候ぞ。承はりたく候。

シテ「いや、某は名字もなき者にて候。

ワキ「何ご仰せ候ごも、常人ごは見え給はず候。自然の時の爲にて候。何の苦しう候べき。御名字を承り候べし。

シテ「この上は何をか包み候べき。これこそ佐野の源左衛門

み垣守云々 み垣守衛士の焚く火の夜はもえて書は消えつゝ、物をこそ思へ(大中臣能宣)

尉常世がなれる果てにて候。

ワキそれは何さてかやうの散々の體にはなり給ひて候ぞ。  
シテその事にて候。一族ごもに押領せられて、かやうの身こ  
なりて候。

ワキなう、それは何さて鎌倉へ御上り候ひて、その御沙汰は  
候はぬぞ。

シテ運のつくる所は、最明寺殿さへ修業に御出で候上は候。  
かやうにおちぶれては候へども、御覽候へ、これに武具一領、  
長刀一えだ、又あれに馬を一疋つないで持ちて候。これは、只  
今にてもあれ、鎌倉に御大事あらば、ちぎれたりごもこの具  
足取つて投げかけ、錆びたりごも長刀を持ち、瘦せたりごも  
あの馬に乗り、一番に馳せ参り着到につき、さて合戦始らば、  
地敵大勢ありごても、一番に破つて入り、思ふ敵ご寄りあひ

最明寺殿 北條時頼。剃髪  
して最明寺入道といふ。

討ちあひて、死なんこの身のこのまゝならば、徒に飢に疲れ  
て死なん命、なんぼう無念のこごぞ。

ワキよしや身のかくては果てじたご頼め、われ世の中にあ  
らんほご、まごこそ参り候はめ。暇申して出づるなり。

シテ名残惜しの御事や。はじめは包む我が宿の、さも見苦し  
く候へご、しばしは留り給へや。

ワキ留る名残のまゝならば、さて幾度か雪の日の、ツレ空さ  
へ寒きこの暮に、ワキいづこに宿をかり衣、ツレ今日ばかり

留り給へや。ワキ名残は宿に留れごも、暇申して、ツレ御出で  
か。地さらばよ常世。ツレまた御入り。地自然鎌倉に御のぼり

あらば御尋あれ。けうがる法師なり。かひくしくはなけれ  
ごも、公方の縁になり申さん。御沙汰捨てさせ給ふなご、言捨  
てて、出船のこもに名残や惜しむらん。

たご頼め なほ頼めしめぢ  
が原のさごも草われ世の  
中にあらん限は(新古今  
集)

中 入

シテいかにあれなる旅人、鎌倉へ勢の上るといふはまことか。なに、夥しく上る。さぞあるらん。東八個國の大名、小名、思ひ思ひの鎌倉入り、さぞ見事にて候らん。白金物打つたる絲毛の具足に、金銀を展べたる太刀、かたな、飼ひに飼うたる馬に、乗り、乗替、中間きらびやかに、うち連れうち連れのぼる中に、常世が常にかはりたる馬、物の具や打物の物、そのものにあらざる氣色、さぞ笑ふらん。さりながら、所存は誰にも劣るまじこ、心ばかりは勇めども、勇みかねたる瘦馬の、あら道おそや。地、急げども、急げども、弱きに弱き柳の絲、シテ、縊れに縊れたる瘦馬なれば、地、打てども、煽れども、先へは進まぬ足、弱車の、乗り力なければ、追ひかけたり。

ワキ、いかに誰かある。

ツレ、御前に候。

ワキ、國々の軍勢ごもは、皆々來りてあるか。

ツレ、さん候。悉く参りて候。

ワキ、その諸軍勢の中に、いかにもちぎれたる具足を着、錆びたる長刀を持ち、瘦せたる馬を自身ひかへたる武者一騎あるべし。急いでこなたへ來れと申し候へ。

ツレ、畏つて候。いかに誰かある。

狂言、御前に候。

ツレ、君よりの御説には、諸軍勢の中に、ちぎれたる具足を着、錆びたる長刀を持ち、瘦せたる馬を自身ひかへたる武者あるべし。急いで尋ねて御前に参れとの御ことにて候。

狂言、畏つて候。いかに申し候。

シテ、何事に候ぞ。

狂言上意にて候。急いで御前へ御参り候へ。

シテ何ぞ某に参れ候や。

狂言なか／＼のこご。

シテあら思ひよらずや。これは定めて人違ひにて候べし。

狂言いや／＼、そなたのこごにて候。その仔細は、諸軍勢の中に、いかにも見苦しき武者をつれて参れこの上意に候が、見申せば、其方ほど見苦しき武者も候はぬほごに、さて申し候。急いで御参り候へ。

シテ何ぞ、たごへば諸軍勢の中に、いかにも見苦しき武者に参れ候や。

狂言なか／＼のこご。

シテさては某にて候べし。畏り候と御申し候へ。

狂言心得申し候。

シテげに／＼、これも心得たり。某が敵人、謀叛人と申し上げ、御前へ召出され、頭を刎ねられたためなよし／＼、それも力なし。いで／＼、御前に参らんと、大床さして見渡せば、地、今度の早打に上り参れる兵、綺羅星の如く並み居たり。さて御前には諸侍、その外數人並み居つゝ、目をひき、指をさし、笑ひあへる。その中に、シテ、横縫ひのちぎれたる、地、古腹卷に錆長刀やう／＼に横たへ、わるびれたる氣色もなく、参りて御前に畏る。

ワキやあ、いかにあれなるは佐野の源左衛門尉常世か。これこそいつぞやの大雪に宿借りし修行者よ。見忘れてあるか。いで汝佐野にて申せしよな。今にてもあれ、鎌倉に御大事あらば、ちぎれたりともその具足取つて投げかけ、錆びたりともその長刀を持ち、瘦せたりともその馬に乗り、一番に馳せ

參すべきよし申しつる、言葉の末を違へずして参りたるこそ神妙なれ。まづ、今度の勢づかひ、全く餘の儀にあらず。常世が言葉のする、眞か偽か知らんためなり。又當参の人々も、訴訟あらば申すべし。理非によつてその沙汰致すべきところなり。まづ、沙汰の始には、常世が本領佐野の庄、三十餘郷返し與ふるころなり。又何よりも切なりしは、大雪降つて寒かりしに、祕藏せし鉢の木を切り、火に焚きあてし志をば、いつの世にかは忘るべき。いでその時の鉢の木は梅櫻松にてありしよな。その返報に、加賀に梅田、越中に櫻井、上野に松枝、合はせて三個の庄、子々孫々にいたるまで、相違あらざる自筆の狀、安堵にこり添へたびければ、シテ常世はこれを賜はりて、三度頂戴仕り、これ見給へや人々よ。始め笑ひしこそがらは、これほどの御氣色、さぞ羨ましかるらん。地さて

國々の諸軍勢、みな御暇賜はり、故郷へこてぞ歸りける。シテその中に常世は、地よろこびの眉を開きつゝ、今こそ勇め、この馬に打乗りて、上野や佐野の船橋、こりはなれし本領に安堵して歸るぞ嬉しかりける。(謠曲集)

高砂

四海浪靜かにて、國も治る時つ風、枝をならさぬ御代なれや。  
あひに相生の、松こそめでたかりけれ。げにや仰ぎても、ことも愚かやかゝる代に、すめる民とて豊かなる、君の惠ぞ有り難き、君の惠ぞ有り難き。

鶴龜

庭の砂は金銀の玉をつらねて敷妙の、五百重の錦や瑠璃の屏、しほ碓のゆきげた瑪瑙の橋池の汀の鶴龜は、蓬萊山も餘處ならず、君の惠ぞ有り難き、君の惠ぞ有り難き。(歌謠集)

### 一四 入間川

大 名 熨斗目・素襖・大臣烏帽子・小き刀。  
 太郎冠者 半袴上下、太刀持つ。  
 入 間 長袴・小き刀。

大名、八幡大名ながく、在京致すところに、訴訟思ひのまゝに相叶ひ、このやうな嬉しいことはない。まづ太郎冠者を呼出し、喜ばせうと存ずる。やい／＼太郎冠者あるかやい。冠者はあ。大名、居たか。冠者、お前に居ります。大名、早かつた。汝を呼出すこと、別のことではない。ながく、在京するところに、訴訟思ひのまゝに相叶ひ、追つ付け國許へ下る。何とめでたいことではないか。冠者、これは御意の通り、おめでたいことである。大名、その儀ならば、追つ付け下らう。供をせい。冠者、畏つてござる。大名(道行)、やい／＼汝は精を出して、よう奉公したほ

【参考資料】  
 狂言 能樂の幕間に演ずる滑稽を主とする劇。これに大藏・鷲・和泉の三流あり。狂言全集には狂言記續狂言記、狂言記拾遺を集録せり。

ごに、國許へ行たらば、馬に乗せうぞ。冠者、それは忝うござる。大名、さりながら、馬に乗るまでは牛に乗れといふ。まづ牛に乗せうぞ。冠者、それはさもなくもござる。大名、これは戲言。

馬に乗せうぞ 身分の無きものは馬に乗ることならざるが當時の制なり。

馬に乗せうぞ。冠者、いよく忝うござります。大名、やい太郎冠者、向に眞白に見ゆるは富士山であらうなあ。冠者、成程富士山でござる。大名、三國に隠れもない名山ぢやと云ふが見事な山ぢやなあ。冠者、左様でござります。大名(道行)、さあ来い、さあ来い。はや駿河の國へ来た。急げ／＼。やあ、これは渺々とした野へ出た。定めてこれが武藏野であらう。さても／＼廣いことぢやなあ。冠者、廣い野でござります。大名、もはや國許へも程近い。さあ来い、さあ来い。冠者、参ります。大名、やあ、これに大きな川がある。これは何といふ川ぢや。上りにもあつた川が覚えぬ。冠者、されば覚えませぬ。大名、誰ぞ在所の者が見え

たら尋ねたい。

入間何某これは入間に隠れもない何某でござる。川向へ用所  
 あつて参る。大名やあ、向に人が見ゆる。尋ねて見よう。やいや  
 い向な者に物が問ひたいやい。入間これは如何なこゝ。この  
 邊で、某にあの如く云ふ者は覚えぬ。返事の致し様がある。や  
 いく、物が問ひたいと云ふはこちのこゝか。何事ぢややい。  
 大名これは憎い奴の。太郎冠者や太刀をおこせい。冠者これ  
 は何となされます。大名いや、某に今のやうな慮外をぬかす。  
 打切つてくれう。冠者いや、左様でござらぬ。お國許でこゝこ  
 なたを見知りませう。こゝもこゝでは、見知らぬによつてのこ  
 こでござる。言葉を直してお尋ねなされませ。大名それもさ  
 うぢや。言葉を直さう。まうしく、向なお方に物が問ひたう  
 ござる。入間これは如何なこゝ。言葉を直した。まうしく、物

が尋ねたいと仰せらるゝは、此方のこゝでござるか。何事で  
 ござるぞ。大名さてもしく、可笑しいこゝかな。言葉を直した。  
 川の名を問はう。まうしく、この川は何と申す川でござる。  
 入間これは入間川と申します。大名やい、太郎冠者、入間川ぢ  
 やと云ふわ。冠者さやうでござる。大名渡り瀬を問はう。まう  
 しく、この川は何處もを渡ります。又こなたの名は何と  
 申す。入間身ごもは、入間の何某でござる。この川は、これより  
 上を渡ります。此處は深うござる。大名やい、何某ぢやと  
 云ふは、最前腹を立てたが道理ぢや。渡り瀬は上を渡ると云  
 ふ。さあ、知れた。渡れ渡れ。冠者いや、其處は深いと申  
 します。御無用でござる。大名いや、身ごもが合點ぢや。此  
 處を渡れ渡れ。入間まうしく、其處は深うござる。御無用ぢ  
 や。止めさせられ、止めさせられ。大名さあ、太郎冠者、渡れ

渡れ。これは如何なこ。南無三寶やれ、流れるは流れるは。入間「はあ、これは深いと申すに、笑止な。」大名、おのれ憎い奴のや。るこではないぞ。成敗する。入間、これは何ごめさるぞ。大名「最前に川の名を問へば、入間川といふ。渡り瀬は、と問へば、此處は深い、上へ廻れといふ。總じて入間言葉には逆語さかことばを使ふにより、此處を深いと云ふは浅いと云ふこと、上へ廻れといふは此處を渡れと云ふこと、心得て渡つたれば、諸侍に欲しうもない水をくれたほごに、成敗するぞ。入間、扱ぢはこなたには、入間言葉をよく御存じでお遣ひなさるゝな。大名、なかなか知つて居る。入間、何と成敗せうと仰せらるゝは、定ぢやうでござるか。大名、なかく、定ぢや。入間、ごものことに御誓言で承りませう。大名、何がさて、弓矢八幡成敗いたす。入間、あら心安や、ごつと濟んだ。大名、これは如何なこ。成敗せうと云へ

南無三寶 驚きの甚しきにいふ詞。ごうぞ三寶よ守護し給への意。

定 必定といふに同じ。

弓矢八幡 弓矢の道の祖神たる八幡に誓を立つる意。

ば、あら心安や、ごつと濟んだと云ふは、ごうしたこぢや。入間「さればそのこぢや。こなたは入間言葉を御存じでお遣ひなさるゝによつて、成敗せうと仰せらるゝは、弓矢八幡成敗せまいと云ふこぢやと思つて、あら心安や、ごつと濟んだと申すこでござる。大名、これでほうごした。助けずばなるまい。冠者、お助けなされたがようござりませう。大名、これこれわごりの命を、最早助くるでもおりないぞ。入間、身ごもが命を助けもなさらねば、忝かたじけなくうもござらぬ。大名、(大笑あり)さてもさてもをかしいこぢかなやい。太郎冠者、命を助かつて忝かたじけなくうないと云ふは、可笑しいこぢではないか。何ぞ遣つて入間言葉を聞かう。これ、この扇は京折りでもなければ、ごもそなたへ進ずるでもおりないぞ。入間、京折りでもござらぬ扇を下されも致さねば、満足にも存じませぬ。大名、(大笑あり)さて

ほうごした 困却したる意。

おりない 御座らぬの意。

京折り 京都にて折りたる扇は上等の品なり。



もく、可笑しい物を貰うて嬉しうない云ふはこれく、この太刀かたなは重代なれども遣るでもおりにぞ。入間重代でもござらぬ太刀かたなを下されもなされねば、祝著にも存ぜぬ。大名(天笑あり)「なうく、可笑しや、可笑しや、何をやつても嬉しうない云ふ。太郎冠者も何ぞ遣つて、入間言葉を聞かぬか。冠者「いや、私は何も遣る物がござらぬ。大名「やあ、この袴・小袖もやつて、入間言葉を聞かう。さあく、脱がせ、脱がせ。なうく、この袴・小袖は、水に濡れも致さねば、其方におまするでもおりやらぬぞ。入間「これは結構にもない袴・小袖を、下されも致さねば、嬉しうもござらぬ。大名「まだ嬉しうないといふ。さてもく、可笑しいことかな。入間言葉は面白いものかな。

入間「一段の仕合せでござる。すかさうと存ずる。大名「なうな

う、これく、先づ戻りやるな。入間「いやこれを置いてまゐるまい。大名「いや、用がおりない。先づ戻りやるな。入間「何事でおりにやる。大名「何と、その如くに色々の物貰うて、眞實嬉しうか、嬉しうないか、おしやれ。入間「いや、忝うもござらぬ。大名「いや、いや、それは入間やう。最早入間言葉をさらりと捨てて、眞實は嬉しうか、嬉しうないか、おしやれ。入間「眞實は思しめしてもござらうぜ。この如くに太刀・刀・袴・小袖まで下されて、何がさて忝うもござらぬ。大名「はてさてくごい人ぢや。その入間言葉をさらりと止めて、眞實をおしやれ。入間「眞實は何がござらう。この如くに結構なもの、さまく、下されて忝うない云ふことがござらうか。身にあまりて忝うござる。大名「何と、忝い。入間「なかく。大名「忝いとは、忝うない云ふことであらう。こちへ返せ。入間「いやく、遣ることでないぞ。大名「どう

でも返さぬか。さあ取つたぞ。入間やい／＼たらしめ。どこへやることでないぞ。やるまいぞ、やるまいぞ、やるまいぞ。

〔狂言記〕

このごろ都にはやるもの、夜討強盜にせ給旨、召人、早馬から騒動、生頸、遠俗、自由出家、俄大名迷ひもの、安堵恩賞から、軍本領はなれし、訴訟人、文書入れたる細つゞら、追従、讒人、禪律僧、下剋上する成りでもの、器用の堪否沙汰もなく、漏るゝ人なき決斷所着つけぬ冠、上の衣、持ちも習はぬ笏持ちて、内裏まじはり、珍らしや、賢者顔なる傳奏は、われも／＼と見ゆれども、巧なりける詐は、愚かなるにや劣るらん、(申略)させる忠功なけれども、過分の昇進するもあり、定めて損ぞあるらんと、仰ぎて信をとるばかり、天下一統めづらしや、御代に生まれてさま／＼の、ことを見聞くぞ不思議なる、京童への口ずさみ、十分の一をもらすなり。〔建武年間記〕

### 一五 永徳と山樂

桃山時代は強く大きく我が國民の躍動した時代である、國民精神の大いに振興した時代である。この活躍の中心にあつて、これを統一し指揮したものは豊太閤である。彼が不世出の偉才はよく戰國の紛亂を平定し、國內を統一し、遠く大明をも席捲しようとした。その氣宇の豪邁雄偉なること、古今稀に見る英雄といはなければならぬ。かゝる英雄に支配せられた當時に於ては、一國の文化がその氣風を受け影響を蒙つたことは當然のことであらう。永徳・山樂の藝術が規模の雄大なるも、自由潤達にして絢爛の趣に富めるも、亦これに基づいたのは否み難いことである。太閤は大明を攻略せんが爲に、事を外に構ふるに拘らず、

#### 參考資料

中井宗太郎「永徳と山樂」

永徳 狩野松榮の長子。織田信長に仕へて法眼に叙せられ、後豊太閤に仕ふ。天正十八(二二五〇)年歿す。年四十八。  
山樂 豊臣秀吉の近侍木村永光の子。狩野永徳の義子となり、修理亮と稱す。寛永十二(二二九五)年歿す。年七十七。

内に大土木を起し、大阪・聚樂・桃山などに大城郭を經營し、結構莊麗無比の壯觀を極めた。これを奈良朝文化の象徴である、聖武天皇によつて造營せられた東大寺の建築に想ひ比べるに、一は佛教寺院の建設であり、一は城郭・居宅の造營であつて、その差別に又時代の相異を見るこゝが出来る。聚樂第の規模については、行幸記に次の如く記してある。

四方三千歩の石の築垣山の如し。樓門の固めは鐵の柱、銅の扉、瑤閣星を飾り、瓦の縫は王虎風に嘯き、金龍雲に吟ず。儲の御所は檜皮葺なり。御ばしまに御輿寄せあり。庭上に舞殿、左右に樂屋を建てらる。後宮の局々に至るまで、百工心を碎き、丹精手を盡くす。その美麗あげていふべからず。その他、桃山・伏見・大阪の諸城も、一として結構莊麗世人を驚かしめなかつたものはない。當代の藝術がその規模・風趣に

於て、此等の大建築に依據するこゝの多かつたこゝは必然である。殊に當代藝術界の第一人者であつた永徳・山樂と豊太閤との關係は見逃すべからざるものである。

從來史家の多くは、當代の藝術を以て太閤の性格・趣味の反映とし、恰も藝術家が太閤の命令のまゝに、その性格・趣味を體現したものであるやうに考へてゐるが、私はこれと聊か見解を異にしてゐる。勿論永徳や山樂は太閤の命によつて描いたのである。又その好みを顧慮したこゝもあつたであらう。併し太閤の與へた影響は外面的・形式的のものに過ぎないのであつて、藝術の核心である創造の領域には一歩も入るこゝは出来なかつたのである。大城郭を建設したのは太閤であり、之に描かしたのも彼である。併し藝術家の創造の神域は何人も之を犯すこゝはできないのである。

元來、太閤は身卑賤から起り、兵馬の間に人となつた武將であるから、傳統的趣味の教養がない。生まれながらにして藝術愛好の心を持つてゐたにしても、それは藝術創造そのものではない。太閤の要求に藝術至高の形式を與へたのは永徳・山樂の如き藝術の天才の力である。彼はこの天才に導かれ教へられこそすれ、藝術家を導き教ふるものではない。晩年に至つて餘程藝術味を解したやうではあるが、これは此等の天才に教へられて然るを得たのである。永徳や山樂の巨匠なくば、桃山時代は徒に金碧燦爛の卑俗に墮して了つたであらう。

永徳は狩野氏の嫡流として畫技を祖父元信に受け、技進んで信長に仕へ、次いで太閤に重用せられ、大阪・聚樂の障壁に描いた。又諸侯の邸宅を營むものは競うて彼に畫を求め

元信 古法眼と稱す。足利將軍に仕へて繪所預・越前守に任ぜらる。永祿二(二二九)年歿す。年八十四。

た。畢世の英雄と時を同じうして此の世に出で、その技を世人に認められて思ふがまゝに巨腕を振うた彼の如きは、正に在るべき時に生まれ出でた天才といふべきであらう。永徳の偉大は先づ自然の觀照に目覺めた所に始る。恐るる所なく帳を掲げて光に直面した彼が自然觀照の態度は、方に藝術界に革新を齎すものであつた。いづれの時代に於ても藝術が最も純粹な形に於て發展する爲には、自然の觀照に覺醒しなければならぬ。自然は廣大無邊なる美の生命である。藝術は生命の泉をこゝに求むることによつて純粹に生きるのである。自然は純眞なる心を以てこれを叩くものには容易に扉を開いて、惜しげもなく求むるものを與へるが、心の濁れるものには其の姿を現さない。これを歴史に徴するに、上代の佛教藝術隆盛の時代にあつては、彼岸に

憧憬する超越的な信仰に影響せられて、人々は自然に求むる所がなかつたから、與へらるゝ所も亦無かつたのは當然である。平安朝には、人々は自然に求むる所が少くなかつた。併し此の時代は、自然を人間に對立する獨立の存在を見て、春の花は人の心を慰めんが爲に咲き、秋の月は人に眺められる爲に輝き、自然は人間を悦ばしめ、人生を裝飾するものと考へられた。鎌倉時代に於ては、自然の觀照も、西行法師の歌などに現れてゐるやうに、次第に變つて來たことが知られるが、繪畫に於ては一逼上人繪傳の如き傑作が出たに拘らず、前代の套襲を脱することが困難であつた。人心の甚しく萎靡した室町時代の藝術が、自然觀照に活躍を缺いたのは亦止むを得なかつたことであらう。然るに桃山時代には國民精神が上下に瀰漫して、燃ゆるが如き時代精神を成し

一逼上人繪傳 一逼上人の一生の行狀、濟度の功德を講述したる繪卷物。

た。これを權勢の上で代表したのが豊太閤であり、藝術の上  
に高く體現したのが永徳であつた。

永徳は、驀地に自然を見た。過去の傳承に拘泥することなく、一切を斷切つて自然に直面した。その大安寺に描いた藤を見るに、右下手から幹は組みかはされた竹棚を頼りに、覺束なくも其の枝を上へ左へと伸ばしてゐる。上手より垂れさがる葉と花と、花の盛の温かい靜かな空氣を漾はしながら、麗日の美を飾つてゐる。併しこの組立のみでは餘りに靜かなる爲に、左手へ伸びる枝を追うて廣い空間を上下に劃して、蔓は温かい日の中に、なごやかに伸びてゆく。その蔓の先の纖巧なる線律は、清らかな花の姿と相合して、清楚なメロディを奏でてゐる。地色の金碧と白緑の諧調とは春の日の空氣の厚味と廣がりとを遺憾なく表現してゐる。かくて

大安寺 大阪府堺市の一國寺を今は大安寺といふ。

メロディ 旋律。Melody.

此の作品には一點の無理もなく、それが直接的な自然に對する感激から描かれてゐて、私心の蟠りを留めない。清純な自然の心は作者の心と相結んでこの繪の中に溶込んでゐる。永徳は稀世の名匠で、その純粹な自然觀照は、自ら表現方法として、過去の技巧を綜合して自己の中に渾融せしめ、遂には傳承を超越するに至つた。その過去を綜合したことは、作品に現れて色々のものの統一となつてゐる。日本畫未來の發展は此の一面を進展させてゆく所に基礎づけられなければならない。山樂は即ち此の道を歩んだのである。山樂は永徳に師事し、後その養子として狩野家を繼いだ。單に家名を繼いだのみならず、筆法を用ふることに専らその正傳を得たり。本朝畫史にあるが如く、彼は養父永徳について水墨の格調・精神を會得したのであつた。たゞに水墨の

本朝畫史 六卷。初め狩野永納が、我が國の有名な畫家の傳歴を記して五卷とせしむ、後に増補して六卷とせり。



大 安 寺 襖 (筆 德 永)



同



(筆樂山) 襖院球天



同

技法に通じたのみならず、永徳の綜合描法、特に裝飾的表現法をも合はせて會得した。故に一面から見ると、永徳の到着點は山樂の出發點であつたことも考へられるのである。斯様にしてその畫技の習熟が漸く成つた時に、師の死に會し、太閤晩年の豪華隆運の日に迎へられて、彼が巨腕を振ふ時が到來したのであつた。

抑、繪畫が純粹な藝術である限り、それは畫家の無限の創造であつて、外より何等の拘束を受くべき筈のものではない。けれどもそれが定まつた目的に使用せられる場合には、最初からその目的に役立つことを考へなければならぬ。永徳・山樂の描く所は、主として新に建設せられた城郭の障壁に用ひられたのであるから、裝飾的因子を多分に持つてゐる。この裝飾的因子を、師にも勝つて一層強調したのが山



樂の特色である。若し凡庸の畫家であつたならば、その使用目的の爲に自由を奪はれて、美的價値をも失ふのであるが、流石に二名匠はその目的を失はず、しかも縦横にその天分を發揮して立派な藝術を成就したのであつた。永徳が自然の直接な感激を土臺としたのに反して、山樂は自然の中から美なるものを抽出し、これを按排統一して絢爛瑰琦な裝飾美を作り出したのである。それだけ自然に遠ざかつた爲に、自然の持つ空間の大きさ深さに於て師よりも缺くる所があつたが、又それが饒かな甘美を件なうたのであつた。自然の姿に忠實ならんことを藝術は、こもすれば寫實に泥む傾がある。繪畫がたゞ寫實にとゞまると、裝飾的効果を失ふのが常である。山樂は自然を無視したのではない。彼は自然の美を知り、その貴きを知るが故に、美を抽出して、それ

によつて甘美の世界を創造したのである。たゞこれを裝飾的に表現する爲に、單純化し、或は強調し、煩はしい無用の細部を截捨てたのであつた。斯様な點から見れば、彼の描寫は稀薄な部分が捨てられてゐるだけに印象は強い。甘美をのみ生かすが爲に裝飾的目的によく一致したのである。彼が描いた天球院の朝顔を見るに、金襖の半ばを領するのは莊重の中に優雅な趣を見せた竹垣である。これは細い小竹を組みあはせたのであるから、悉く直線から出來てゐる。この竹垣の間を上へ下へこまつはりつゝ、流れ行くのは朝顔である。變化の少い葉は殆ど同一の姿を繰返しながら重なつて、單調の中に變化を求めてゐる。特に伸び行く蔓の纖細な旋律には溢るゝばかりの自然の眞趣が傳へられてゐる。朝顔は蔓も葉も花も悉く曲線から成立つてゐる爲に、垣の直

天球院  
京都府葛野郡花園  
村。

線は天地を二つに截斷したものでいはずなればならない。その大膽な構圖が巧みに溶融統一してゐるのは、よく自然の眞實を羅し來つたからである。此の繪の特に優れてゐる所は、自然に現れる空間の大きさでもなければ、夏の朝の情趣でもない。垣根に配する百合と菊花とに色様々の色彩を施して、ごもすれば流れ易い上部の單調を救うて、滋味の中にも五彩の綾を織り出した所にあるのである。

概して山樂の筆は豪華な中に豐潤な味がある、明快な中に朗かな柔かみがある。此の點は永徳の剛健卓拔で温雅な中に峻烈な閃きを持つのと好對比をなしてゐる。永徳の藤を山樂の朝顔に比較すると、前者は豪宕の中に勁拔な趣を湛へて、筆致は細かくて力がある。後者は華麗の中に濃艶な風尚を含んで、筆も亦太く柔かである。無論山樂も狩野の技

法に熟達してゐたから、筆路は嚴正であるが、性格の相異は又剛柔の差別を生じたのであつた。勿論永徳にも太い墨筆を用ひることもあれば、山樂にも細い線を使用することもある。併しその中に含まれた感情の姿に、一は直線に見る強さと鋭さがあり、一は曲線に伴なふ丸味と柔かさがある。

永徳と山樂とは共に自然の觀照に目覺め、個々に徹し、全體に味到した名匠であつた。たゞ二人は、その見方、表現の態度を異にした爲に、その藝術に差異を生じたのであつた。併し價値の本質に至つては共に同一の意義を持つものである。大安寺の藤、天球院の朝顔、いづれも單調の中に變化を求め、變化の中に統一を得て、渾然たる融合の妙を示して居る。その韻致は清楚であり、豪宕であり、華麗であり、雄渾である。一世の英傑豊太閣の偉業は泯滅しても、永徳・山樂の藝術は

時と共に光り輝いて、永久に滅する時はないであらう。

(中井宗太郎「永徳と山樂」による)

文祿三年二月中旬、太閤秀吉公花見の御遊思しめし立たせけるが、古へより花に名高き芳野の峯の雲間をわけて枝折りせし道踏み見ざらんは口惜しとて、二月二十五日、阪城を出でさせ給ふ。御供に参り仕うまつる諸の大將より下司に至るまで、今日を晴れと麗しく粧ひ出でたるは、花よりさきに人の目を驚かしぬ。難波より大和わたりの鄙人等老いたるも若きも打群れつゝ、街に出でて拜み奉る。太閤は例の如く附鬘に作り、眉鐵漿ぐろに若やかなる御形勢なるを、賤しき者の見奉りて、御齡のまだ末永くおはしますとて悦びぬるぞ、誠に民は君子なりけりと、いとかはゆし。二十七日は紀伊の國六田の橋も過ぎ給ひ、市の坂に到り給へば、大和中納言秀俊卿の御儲けとて、清き屋形をしつらへ給ひ、中納言殿自ら途に出迎へ請じ入られ給ひ、数々の御饗應意をこめてものし給へば、太閤御氣色麗しく、緩やかに其所をも立たせ給ひ、聞ゆる芳野山に到り着きては、麓より輿をおり、山路を歩みて輿をやり給ふ。(繪本太閤記)

中井宗太郎 美術批評家。東京帝國大學文學部出身。京都帝國大學講師。

### 一六 俳諧の變遷

俳諧といふ文字の文學上の書物に用ひられたのは、延喜五年古今和歌集編輯の時であつて、その時に不圖俳諧と書いたが、何事にも保守的で、古からの慣例といへば改めないといふのが歌道や連歌道の通則の様になつてゐたので、誤と知りつゝも、元祿時代に至るまで八百年間そのまゝ、俳諧と書かれて來た。これを俳諧と書き改めたのは芭蕉翁の力であつて、俳諧に古人なし。と翁が喝破すると共に、その文字をも改めたのである。

併し古今和歌集の誹諧といふのは、今日の俳諧とは全く別のもので、例へば、

山吹の花色ごろも主やたれ問へご答へずくちなし

參考資料  
佐々政一「連俳小史」

古今和歌集 卷七「古今和歌集序」参照。  
延喜五年 醍醐天皇の御宇。(一五六五)

にして

の類で、云はば後世の狂歌の稍上品なものであつた。その後、鎌倉時代の初から連歌が盛んになつたが、連歌もその初は大抵滑稽的なものであつて、連歌といへば眞面目でないものと知られてゐたのであつた。然るにその後、頗る眞面目な和歌の様な連歌が行はれて來たので、これと區別するため、別に名稱を立てる必要が生じて來た。こゝに於て古今集の文字を借用して誹諧の連歌といふ名稱が起つたのが、抑、今日の所謂俳諧といふ語の初であつて、この誹諧の連歌といふ語が、何時しか俳諧とのみ稱せられるに至つて、滑稽的連歌を指すこととなつたのである。それは恐らく室町時代のことであらう。かくて連歌眞面目な連歌と俳諧(滑稽な連歌)とは相對した名稱となつて、何れも五七五の句と七七の

句とを交互に長く續けたものであつた。ところが室町時代の終から俳諧の方が盛んになると共に、その最初の五七五の句、即ち發句といふものばかりを作ることが流行し初めて、これを俳諧の發句といつてゐたが、何時しかこれをも俳諧とか俳句とかいふことになつて、やがて俳諧とは發句のことであると思ふ人さへあるに至つたのである。併し元祿時代までは、未だ俳諧といへば長く續いたものを指したのであつて、芭蕉が、發句は門人に上手多し。俳諧は老吟骨を得たるが如し。といつてゐるのを見ても、俳諧がまだ發句に對した名稱であつたことが明白である。發句をも俳諧と呼ぶやうになつたのは、何時のころとも判然しないが、大抵天明以前であらう。何となれば、天明の頃になると、俳諧とばかり云つては、發句のことか長く續けるもののか解らなく

元祿時代 東山天皇の御宇。

芭蕉 俳人。伊賀の人。元祿七年歿す。年五十一。十卷「元祿文壇の三偉人」參照。

天明 光格天皇の御宇。

なつたと見えて、發句に對して別に附合つけあひといふ語が専ら用ひられたからである。

俳諧の意味には、かゝる形式上の變遷の外に、又別に内容上の著明な變遷があつた。即ち室町時代までの俳諧は滑稽を意味するものであつたが、徳川時代に入ると、俳諧とは和歌や連歌に用ひない新しい詞、即ち漢語や俗語などを用ひて作つた連歌發句のことであるといふ新しい定義が出来た。ところが、それが更に一轉して、必ずしも漢語や俗語を用ひなくとも、意味の上に斬新奇抜なものがあれば、それが俳諧である、詞の俳諧はなくとも、心の俳諧があればそれが俳諧であるといひ初めた新派が起つた。併し、かく相争ひながらも、やはり俳諧といへば、何となく道化した不眞面目な洒落が主眼となつてゐたのである。然るに、芭蕉が出て、俳諧は風

一四〇  
附合 俳諧體の鎖連歌の一  
名。

雅みやびといふことである。詩歌には一定の趣味が固定してゐて甚だ偏狹であるが、俳諧趣味は至らざる所がない風雅であつて、卑俗な趣味ならざる限は、悉くこれ俳諧である。唱説するに至つた。かくて俳諧は風雅の異名になつて、全く滑稽趣味を忘れてしまつても、新意しんぎといふことのみは固く守られてゐた。和歌や漢詩以外に別趣の風雅を探らうといふ考は、俳人の頭を去らなかつたのである。但し天明から寛政に至つては、頗る詩歌に近い古めかしい俳諧が行はれた。化政度から天保にかけては、仁義道德をも俳諧の材料とし初めた。而してかの潑刺な斬新な滑稽を、俗趣味と見損じて排斥しようといふ企てた傾向がある。俳諧はこゝに全く發句や附合つけあひといふ形式の名となつて、俳諧としての特殊の趣味は亡びようとしたのである。

天明より寛政に至る俳人  
蕪村・曉齋・白雄・蓼太・閑  
更等。  
寛政 光格天皇の御宇。  
化政 文化・文政の略。文  
化は光格天皇、文政は仁  
孝天皇の御宇。  
天保 仁孝天皇の御宇。  
化政度から天保への俳人  
士朗・眞兆・大江丸・成美・  
一茶・蒼虬・梅室・鳳朗等。

俳諧はその形から見れば、發句といふ五七五の形と、附合  
といふ長句と短句とを交互に連ねるものごとであつて、この  
形式は俳諧流行以前、連歌の形式として既に出來てゐたの  
である。更にその源を極めるに、短歌の上の句と下の句とを  
分けて二人で詠ずるといふ戲から起つてゐる。短歌を二人  
に分けて作ることは、既に奈良朝時代に行はれてゐるし、そ  
れより以前にも、三十一文字よりも短い歌、即ち五七七の片  
歌といふもので二人が唱和することもあつて、その二首の片  
歌を續けて見るに、宛も旋頭歌を二人で半分づつ作つた  
様に見えるので、片歌で問答をしたのが連歌の初であること  
も説かれてゐる。今日に残つてゐるもので、片歌の問答の最  
も古いのは、名高い新墾筑波の歌である。この歌を連歌の初  
とする所から、連歌のこゝを筑波の道ともいふのである。又、

旋頭歌 雙本歌混本歌、換  
頭歌等ともいふ。五七七  
五七七の六句より成る。

新墾筑波の歌 卷七「日本  
武尊」(五〇頁)の日本武  
尊と火焚翁の問答の歌參  
照。

一つの短歌を二人で作つたので、古いのは萬葉集の佐保川  
の歌である。この後短歌を二人に分けて詠ずるといふ遊戯  
は次第に流行して、金葉集の頃には勅撰集にまで入れられ  
た。折ふし支那の聯句といふ遊戯が輸入せられて、僧侶や公  
卿の間に、これが行はれ初めた。これは排律といつて、終始對  
句ばかりの詩を、澤山の作者が集つて一句づつ作るのであ  
る。當時は何事につけても支那を眞似ることが流行した時  
代であるから、早速その聯句の法に倣つて、從來たゞ二句に  
限つてゐた連歌を、更に長く續けることを工夫したので、後  
世の長く續ける連歌の初であつて、隨つて俳諧の附合もこ  
れから起つて來たのである。漢詩の聯句は、全篇が一首の詩  
になつてゐて、終始に一貫した意味があるが、連歌は相接し  
た二句のみは意味が關係してゐても、一句を隔てること全く

佐保川の歌 萬葉集卷八  
に、

佐保川の水を堰きあげて  
植えし田を(花)

はらひ(はらひ)  
かる早飯はひさりなるべ  
し(家持)

金葉集 十卷。崇徳天皇の  
天治元(一七八四)年、源  
俊賴が白河法皇の院宣を  
受けて、撰進せしものに  
て、六百七十首の歌を春・  
夏・秋・冬・賀・別・戀・雜  
連歌に分類列載せり。

關係がない。譬へば親しい仲間の世間話の様に、それからそれへ話の種が變化して行く。これは連歌の特色で、その後俳諧の附合となつても全篇に一貫した意味のないといふことは變らなかつた。

發句といふものも、これ亦連歌の流行した時代に既に出来てゐた。當初一首の短歌を二人して作った時代には、七七の下の句の方から先に作ることもあれば、五七五の上の句から先に作ることもあつたが、長く續ける様になつては、必ず五七五の句から初めるといふことに定まつて、その最初に置く句を發句といつた。發句の名も亦漢詩から來たものである。平安朝時代には、漢詩の句を後世の様に起承轉結といはないで、發句・胸句・腰句・落句などと唱へたもので、隨つて聯句でも第一句を發句と稱した。又第二句即ち脇句を入韻

連歌の例(猿蓑)

鶯の羽もかいつくろひぬ 去來  
初時雨 去來  
一吹き風の木の葉しづま  
る 芭蕉  
股引の朝から濡るゝ川越  
えて 几兆  
狸を怖す篠張の弓 史邦  
まゐら戸に葛這ひかゝる  
宵の月 芭蕉  
人にもくれば名物の梨 去來  
書きなぐる墨繪をかしく  
秋くれて 史邦  
はき心よきめりやすの足  
袋 几兆  
何事も無言の内は靜かな  
り 去來  
里見え初めて午の貝ふく 去來  
芭蕉  
(下略)

とも稱した。連歌や俳諧で五十句續けるのを五十韻、百句續けるのを百韻と稱したのも、皆漢詩の聯句から來た名稱である。

この發句といふものは、古くから「けりこか」「かなこかいひ切るか」又は名詞で留めるので、次の句に讀みつゞけねば意味を成さぬ様な形には決して作らぬこと、鎌倉時代の初から定まつてゐた。併し當時は、未だ後世の様な切れ字などいふ考が附かなかつたから、獨立した意味はあるが、獨立した詩趣のないものが多かつた。即ち發句ばかり讀んで見れば面白くも何ともないものが多かつた。随つて發句ばかりを短冊に書くといふ様なことはしなかつた。殊に鎌倉時代には、連歌は全く歌人仲間の一時の戯と考へてゐたので、非常に面白い趣向が浮かびでもすると、それは連歌にして

切れ字 一句の中にて語を  
いひ切りたる文字。

了ふのは惜しいから、仕舞つておいて短歌にするがよいと戒めた位であつたから、連歌のやゝ面白いのが出来初めたのは、純粹の連歌専門家の澤山に出来た室町時代のことで、發句にもこの時代に所謂切れ字といふものが出来て、稍面白くものを見る様になつたのである。但しまだ室町時代の連歌師である宗祇や宗長も、短冊に發句だけを書いたといふことは聞かない。發句を全く和歌と同じ様に獨立した文藝上の作物と考へる様になつたのは、俳諧が流行し初めてからのことで、室町時代の末期の守武や宗鑑の頃からであらうか。この時代に初めて短冊に書いた發句を見ることが出来るのである。それはともあれ、發句は連歌の題であつて、その季節に違はぬ様に作らねばならぬといふことから、發句には常に春夏秋冬の季節を表はす語を詠込まねばなら

宗祇 飯尾氏。紀州の人。京に上りて心敬僧都に連歌を學び、和歌を東常縁に受く。當時連歌の達人として海内第一と稱せらる。文龜二(一一六二)年歿す。年八十二。  
宗長 島田氏。駿河の人。十八歳にして宗祇の門に入りて連歌を修む。師の歿後、花の本宗匠を印可せらる。享祿五(一一九三)年歿す。年八十五。  
守武 荒木田氏。伊勢神宮の神官。天文十八(一一二二)年歿す。年七十七。  
宗鑑 支那氏。近江の人。

ぬことになつたので、和歌の戀や雜の様な季の語がないものは、自然發句には極めて尠かつた。

以上で形式の起源を略叙したから、更に俳諧の内容を溯源しよう。古の俳諧、即ち滑稽趣味の詩歌の上に現れたのは萬葉集の戲咲歌が初で、尋いで古今和歌集に誹諧歌が見えてゐるが、その後は餘り流行しなかつた様である。平安朝の後半期になると、歌詞と平常の口語との間に餘程間隔が出来て来て、こゝに歌詞でない語を用ひた滑稽な作物が漸く現れた。その最も著明なものは金葉集や散木集などに見える所謂連歌である。その後、新古今和歌集の頃から連歌といふものは長く續けるものとなり、眞面目なものとなつて、先の滑稽なものは連歌の會の餘興にのみ行はれて、これを俳諧の連歌といふ様になつた。この變遷は宛もかの猿樂の能

世々足利氏に仕ふ。天文二十二(一一五三)年歿す。年八十九。

戲咲歌 萬葉集十六卷、大伴家持の歌に、  
石麿に吾もの申す夏瘦によしといふものぞ鯉こりめせ  
瘦すも生げらばあらむをはたやはた鯉を取るこ河に流るな  
散木集 十卷。散木奇歌集。源俊賴朝臣集などとも稱す。源俊賴の家集なり。  
新古今和歌集 卷八「家菴くらべ」參照。



が、その初は滑稽なものであつたが、眞面目な猿樂即ち今の能樂が出来ると共に、その古の滑稽なものを狂言と稱して、能樂の餘興にのみ用ひる様になつたのと同様である。

一體鎌倉時代には未だ滑稽な文藝はさまで流行しなかつた。栗本衆とか無心座とかいふ名で、後鳥羽上皇の頃に狂歌を好んで作つた仲間もあつたが、これ亦頗る微々たるもので、當時の滑稽作物の現存してゐるものは、少數の俳諧の連歌と戦記文などに見える落首位のものである。然るに室町時代の中葉以後に於いて、一般に滑稽趣味が盛んになつて、能樂と共に狂言が流行する、職人歌合だとか、狂歌合だとかいつて、俗語を詠込んだ狂歌が盛んになる、一休・曾呂利一流の笑話、或は秀句と稱する地口などが行はれて、お伽草子にまでも滑稽的なものが頗る多くなつて來た。蓋し古典的

栗本衆 後鳥羽上皇の御時、水無瀬殿に連歌の會あり、上手を柿本と稱して眞面目なる連歌を事とし、下手を栗の本と名付けて滑稽なる連歌を事とせり。  
無心座 柿本衆を有心座といひ、栗本衆を無心座といへり。  
狂歌 俚言・俗語をも用ひたる滑稽を主とする和歌。徳川時代の後半に流行せり。蜀山人・唐衣橋洲・鹿津部眞顔・頭光・朱樂・菅江・宿屋飯盛等著名なり。  
落首 狂體の中に諷刺・嘲弄の意を含みたる匿名の

知識が戦亂を経て漸く社會の上下に缺乏して來た上に、所謂歌詞は日に月に當時の口語と遠ざかつて、作者も讀者も擬古に疲れて來た。しかも所謂歌學といふものは當時唯一の權威であつて、俗語や口語は一切野卑なものと思はれたので、新しい詞を用ひたものは、大抵滑稽的色彩を帯びざるを得なかつたのである。かゝる時勢に於いて、俳諧は當然勃興せざる可からざる運命をもつてゐた。この勃興を代表してゐるものが山崎宗鑑と荒木田守武とである。

總べて連歌師は俳諧を餘興として輕蔑してゐた。隨つて眞面目にこれに努力する人もなかつたが、連歌の方には七面倒な位煩雜な法則が出来てゐて、殆ど記憶も出來ぬ程な式目といふものが定まつてゐたので、その道の人に指導せられねば、なかく、素人には試み得べきものではなかつた。

詩歌。職人歌合 歌人を左右に分ち、判者ありてその詠歌を評して勝負を定むるを歌合といふ。職人の身上について詠みたる歌を左右に分けて判じたるが職人歌合なり。  
一休 京都紫野大徳寺第四十七世の住僧。名は宗純。書畫・狂歌をよくす。文明十三(二一四)年歿す。年八十八。  
曾呂利 名は新左衛門。和泉の人。慧敏を以て豊臣秀吉に寵せらる。慶長八(二二六)年歿す。  
地口 一つの語に、似通ひたる音の語を寄せて、他の意を表はす洒落。

元來連歌が鎌倉以後に流行したのは、歌道に面倒な法則があつて、その煩はしさに堪へない者が、連歌の自在なのを歡んだのであつたが、今や連歌師も亦それよりも煩はしい様な方式を立てたものであるから、そこで一層自由な我が儘な形式で、しかも俗語でも漢語でも勝手に使つてよいといふ俳諧が、稍流行し初めたのである。中にも山崎宗鑑は連歌も上手であつたが、又この氣樂な俳諧が好きであつたので、當時の連歌師等が戯れに作つたものや自作やを得るに従つて書き留めた。それが犬筑波である。

宗鑑は、將軍義尙の侍臣であつたが、十三歳で將軍の薨去に遭ひ、遁世して、後に一休に従つて頗る悟脱した所があつたと傳へられる。初め攝津の尼崎に居つたが、やがて城州山崎に庵して歌書を講じ連歌を教へてゐた。時の連歌師宗祇

犬筑波 一卷。山崎宗鑑の撰せし俳諧集。永正十一(二一七五)年成る。連歌の撰集に菟玖波集・新筑波などあるにより、之に似て非なるもの意。

尼崎 尼崎市。  
山崎 京都府乙訓郡大山崎村。

宗長等と共に内大臣實隆を訪うたことがあるのを見るに、畢竟當時の一連歌師で、これを以て糊口の資としてゐたものであらう。晩年西國に遊歴して讚州の一夜庵に滞在中、癪を發して歿した。その寡欲恬淡な資質と、磊落洒脱で、物に拘らぬ氣風とは、遺憾なく犬筑波に顯れてゐる。

松の尻木からしらぬもみぢ哉 宗鑑

宗鑑筆

松の尻木からしらぬもみぢ哉 宗鑑

内大臣實隆 三條西實隆。後土御門・柏原の兩朝に仕へ内大臣に至る。和歌連歌に秀で、故實に通ず。天文六(二一九七)年歿す。年八十三。  
一夜庵 香川縣豊田郡坂本村の興昌寺の傍にありき。

宗鑑と名を等しうしてゐるのは荒木田守武である。守武の俳諧も、その趣味に於ては宗鑑と甚しい相違はないやうであつたが、併し守武といふ人は頗る眞面目な人で、正四位上中川平太夫といふ伊勢皇大神宮の神官であつたから、自らお小姓上りの宗鑑よりも上品な傾向があつた。この人も、

勿論俳諧ばかりを作つたのではなくて、夙に連歌道に入つて當時の名流宗祇宗長宗牧など交遊して居り、宗祇の選んだ新筑波集にもその連歌が採られてゐる程であるが、或年に心願の筋があつて、千句連歌を作らうとして、なるべくは俳諧の連歌が作り易いからそれにして置きたいと思つて、神前で本連歌にすべきか俳諧でもよいかといふ御鬮を引いて見たところが都合よくも俳諧といふ御鬮が當つて、大いに歡んで作つたのが守武千句である。これが今日に存してゐる長篇の俳諧の最古のものである。これより以前には、俳諧といへば大抵は二三句か精々五十韻であつて、百韻や千句といふことは恐らく守武に初つたのであらう。守武は元來連歌の達者であつたから、犬筑波の中に散見するやうな野卑な調子は、その千句には見えてゐない。いはば當時

宗牧 京都の人。宗祇の門人。天文十五(二二〇六)年歿す。  
新筑波集 二十卷。宗祇法師が後土御門天皇の明應四年、内勅を以て撰せし連歌集。

守武千句 一卷。獨吟千句。飛梅千句などともいふ。  
荒木田守武の獨吟。その立句は梅柳・花時鳥・扇・七夕・秋月・氷雪なり。更に五十韻の追加あり。

の和歌や連歌に盛んに用ひられた縁語や弄語を俗語に改めたといふ形が、その大部分を占めてゐる。徳川時代に入つて、松永貞徳は頻りに犬筑波を研究して宗鑑を祖述した様にいつてゐるが、實は貞徳流は寧ろ守武に近いので、守武流と自ら唱へてゐた宗因の談林派の方が、却つて犬筑波に似



貞徳筆

てゐるのである。守武の句、殊にその發句には、殆ど滑稽趣味を離れてゐるものがある。かの宗鑑の發句にも、

手をついて歌申し上ぐる蛙かな

の如く、全く弄語の境を脱してゐるものがあるが、これ亦滑稽を忘れてゐない。同じ人の作といはれる、

松永貞徳 京都の人。細川幽齋に和歌を、里村紹巴に連歌を學び、貞門俳諧を創む。承應二(二二二一)年歿す。年八十三。その門人に立圃・重頼・貞室・季吟言水等あり。  
雪月花一度に見する  
卯木かな 貞徳  
行水や汗もほこりも  
夕祓 立圃  
順禮の棒ばかり行く  
夏野かな 重頼  
これはくさばかり  
花の吉野山 貞室  
まさしくこゝにありますが  
如し魂祭 季吟  
尼寺よ唯菜の花の散る徑 言水  
京衆も大さのもりにやよひ哉 延陀丸  
宗因 西山氏。談林派俳諧の祖。肥後の入、大阪に住す。天和二(二二四二)年歿す。年七十八。その門人に西鶴才廣・來山等

元日の見るものにせん富士の山  
 は、富岳の秀麗を謠つた様にも見えるが、やはりこの山はお  
 正月向だ、節季師走の忙しい時に富士見どころでもないこ  
 いふ洒落に解するのが宗鑑の真意であらう。守武も、  
 飛梅や軽々しくも神の春



宗因筆

と洒落た。  
 落花枝に歸るこ見れば胡蝶かな  
 も、等しくこぼけた洒落こも見れば見られるたゞ、  
 元日や神代のこども思はるゝ  
 こいふに至つては、身皇大神宮の神官として、元日の嚴かな

あり。  
 白露や無分別なる置  
 所 宗因  
 浮世の月見過しにけ  
 り末二年 西鶴  
 鶯の細腰よりぞこぼ  
 れ梅 才麿  
 わがれたを首あげて  
 見る寒さかな 來山  
 談林派 西山宗因の創めし  
 俳諧の一派にて、滑稽を  
 旨とす。  
 戸さしせぬ世さや水鶏の音  
 もなし 宗因

る神事に列しては、油然として太古の幻覺に襲はれたもの  
 と感ぜられる。決してこれは洒落と見做すことは出来まい。  
 されば俗語を混用して滑稽的な作物を出してゐる間に、自  
 らかゝる幽遠な趣致にも逢着したのであらう。  
 宗鑑・守武相尋いで逝いて後は、暫くその俳道を傳へるも  
 のはなかつた。連歌道には里村家が獨り繁昌した。里村紹巴  
 の如きも稀には俳諧に遊んで、  
 海の中にも武士はありけり  
 こいふ句に、  
 釣針にかゝりて上る兜蟹  
 と附けたと傳へられる曾呂利狂歌咄を初として、織豊時代  
 の笑話には俳諧に類したのもも尠くはないが、世間では連  
 歌ばかりがなほ流行してゐた。殊に上流社會は御能は舞は

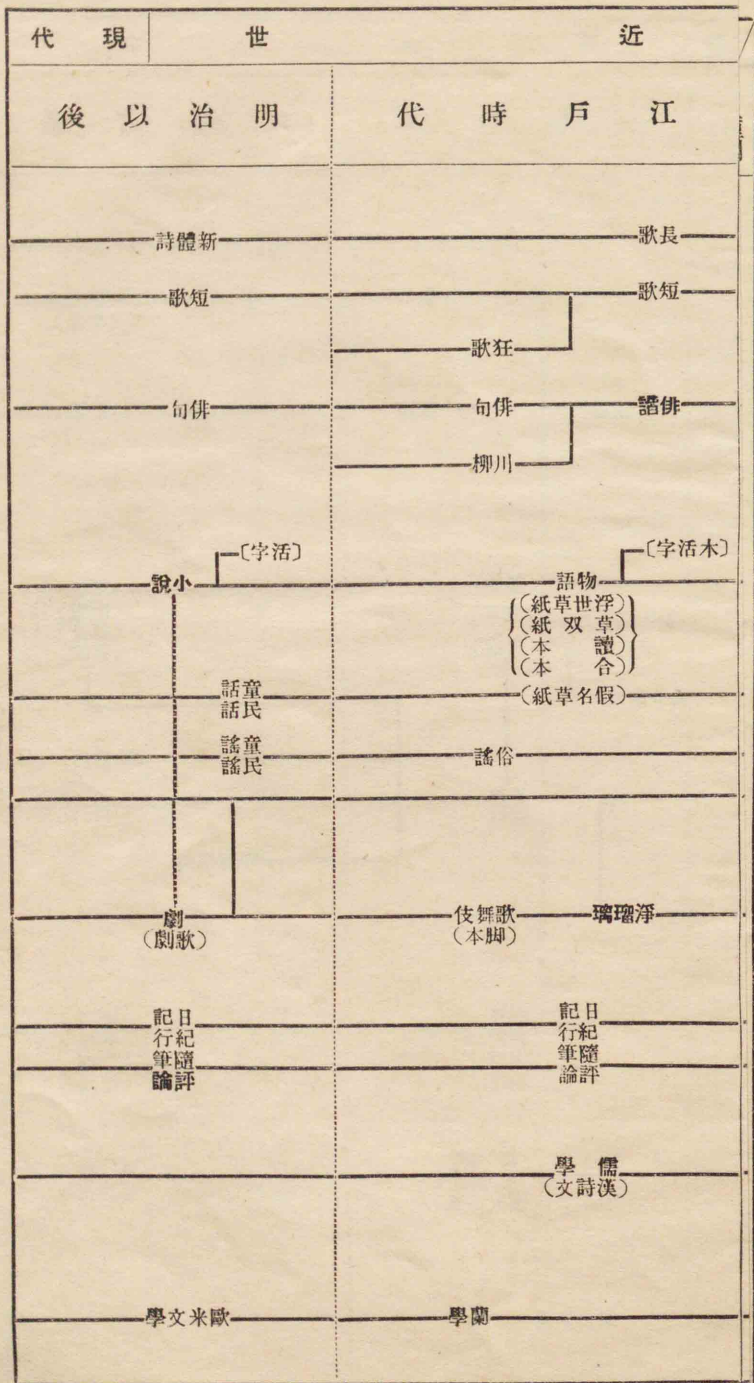
里村紹巴 連歌師。周桂の  
 門人。奈良の人。慶長五  
 〇(一三二六〇)年歿す。年七  
 十九。

曾呂利狂歌咄 二卷。古來  
 の狂歌を列擧し、一々其  
 の時の事情由來を記した  
 るもの。

れるが狂言には手を出さないと同様に、怪しげな雅語をひねくつても、武將連中は連歌ばかりを弄んでゐたので、俳諧はお座敷乞食が座興を添へるの具たるに止つてゐた。俳諧の流行は上品振る必要を感じない社會、即ち平民社會の勃興を待たなければならなかつたのである。徳川時代の演劇は歌舞伎狂言といふ名で始つた。江戸の小説は洒落本といふ名で起つた。一切の斬新なものは滑稽といふ名、洒落といふ名で平民社會の大膽な創意を歓迎したことから萌す様になつたのである。(佐々政一「俳諧史」による)

佐々政一 國文學者。文學博士。京都の人。東京帝國大學國文科出身。東京高等師範學校教授。大正六年歿す。年四十六。

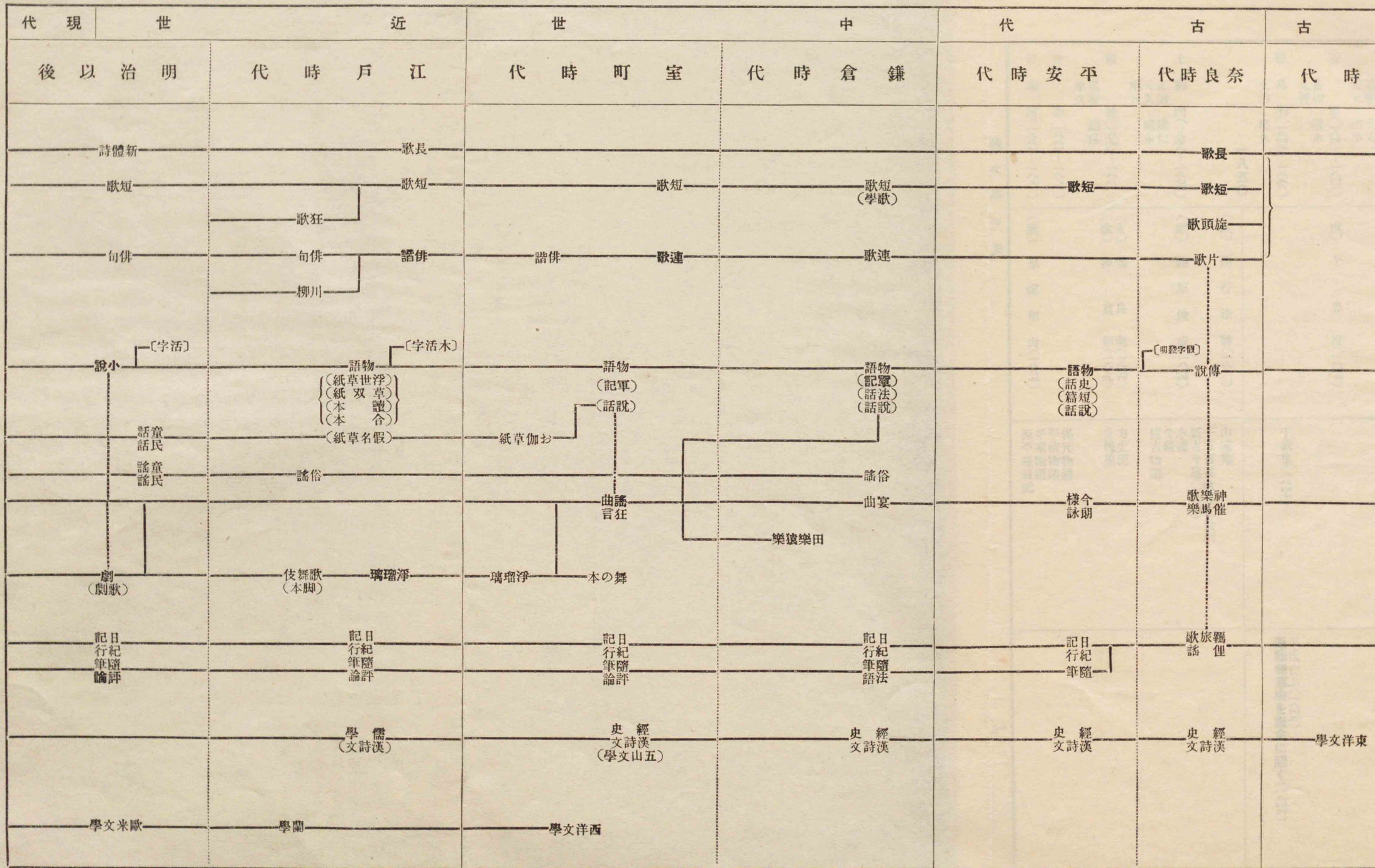
國文學形態史圖表 (國文選附録)



國文學形態史圖表（國文選附録）

近		世		中		代		古		古		上	時代
代時戸江		代時町室		代時倉鎌		代時安平		代時良奈		代時和大			種別
	歌長								歌長				
	歌短		歌短		歌短 (學歌)		歌短		歌短				
歌狂									歌頭旋				
句俳	諧俳		歌連		歌連				歌片				
柳川													
	[字活木]								[明發字眼]				
語物 (紙草世浮) (紙双草) (本讀合) (本) (紙草名假)		語物 (記軍) (話説)		語物 (記軍) (話説)		語物 (話史) (籍短) (話説)		語物 (話史) (籍短) (話説)	説傳			學文の謠傳	
	紙草伽お												
謠俗		謠俗		謠俗		謠俗		謠俗					
	曲謠 言狂			曲宴		曲宴		曲宴					
	樂猿樂田								歌樂神 樂馬催				
伎舞歌 (本脚)	璃瑠淨	璃瑠淨	本の舞										
	記日 行紀 筆隨 論評		記日 行紀 筆隨 論評		記日 行紀 筆隨 論評		記日 行紀 筆隨 論評		歌旅羈 謠催				
	學儒 (文詩漢)		史經 文詩漢 (學文山五)		史經 文詩漢		史經 文詩漢		史經 文詩漢			學文洋東	
	學蘭		學文洋西										

師範學校教授。大正六年發  
す。年四十六。

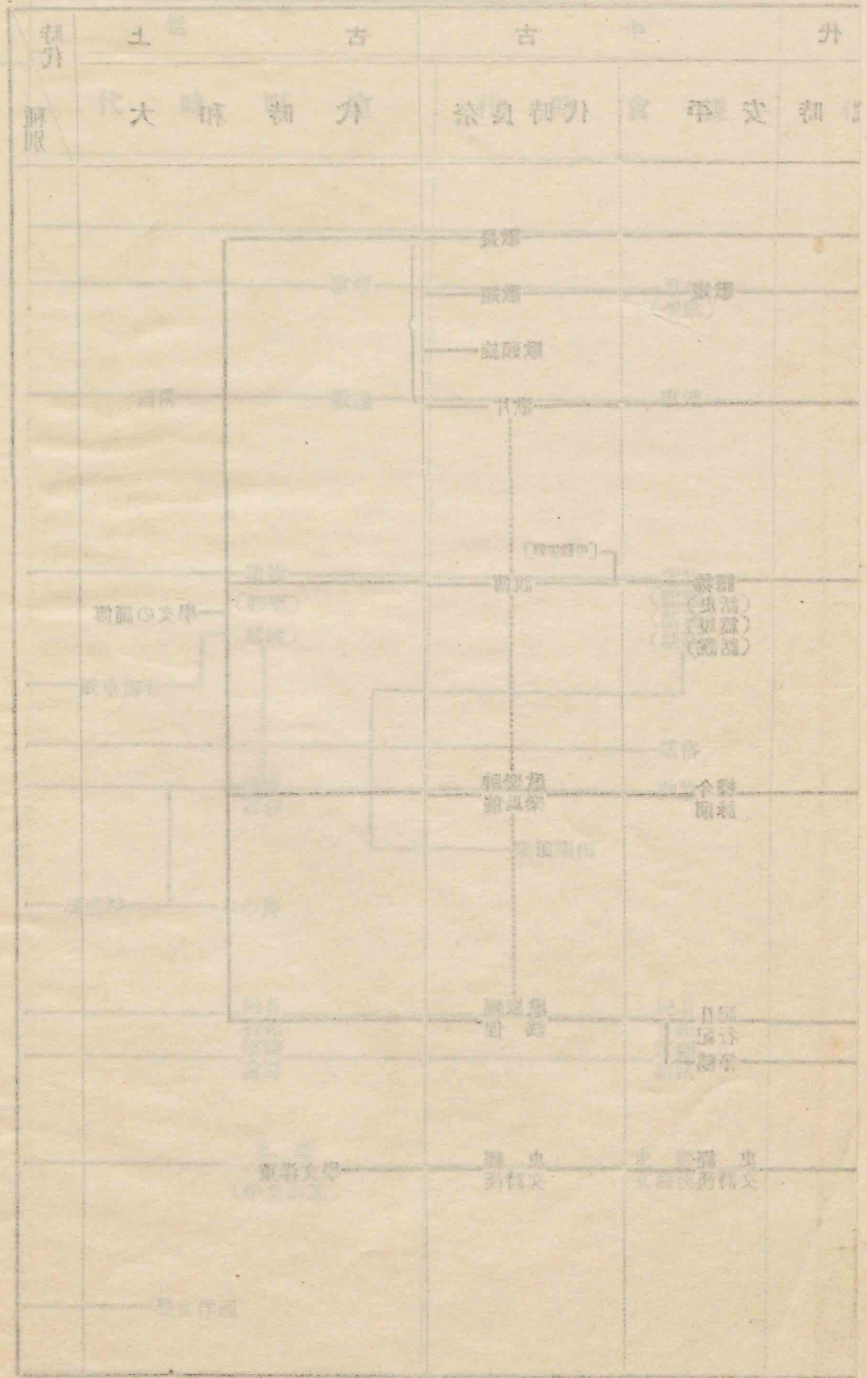


國文學年表

天皇(御在位)	文學者(歿年)	著作物	雜
高倉(八六一—八四〇) 嘉應 承安 安元 治承	(歌) 平忠度(八四七)	千載集(八七)	平氏亡(八四五) 源賴朝幕府を鎌倉に開く(八四六)
安徳(八四一—八四五) 養和 壽永 元暦	(歌) 西行法師(八五〇)	山家集 千五百番歌合(八六)	
後鳥羽(八四一—八五八) 文治 建久	(歌) 藤原俊成(八六四)	新古今集(八五五) 水鏡 今鏡 住吉物語	
土御門(八五八—八七〇) 正治 建仁 承元 建永	(文) 鴨長明(八七六)	方丈記 金槐集	
順徳(八七〇—八八二) 建曆 建保	(歌) 源實朝(八七九)	保元物語 平治物語 平家物語 源平盛衰記	
仲恭(八八二—八九三) 承久 建保	(歌) 慈鎮和尙(八九)		
後堀河(八九三—八九三)			

國文學年表下(國文選附錄)

國文學源流史圖表(國文選附錄)





貞應 元仁 嘉祿 安貞 寬喜 貞永	四 條(九二一—九三二)	天福 文曆 嘉禎 仁治 延應	一 九 〇 〇	(歌) 藤原定家(九二二)	貞永式目(八九二) 新勅撰集(八九四)	
嵯峨 寬元	後 深 寶治 康長 正嘉	後 草(九〇六—九一九)		詠歌大概 東關紀行 撰集抄 宇治拾遺物語 今物語		
龜 山(九一九—九四四)	後 宇 多(九四四—九四七)	文應 弘長		續後撰集(九二二) 十訓抄(九三三) 古今著聞集(九四四)		
伏 見(九五七—九五八)	正應 永仁	一 九 五 〇	(歌) 藤原爲家(九三五)	續古今集(九五五) 吾妻鑑(九七〇)		
後 伏 見(九五八—九五九)	正安	後 二 條(九六一—九六六)	(歌) 阿佛尼(九四三)	續拾遺集(九六六)		
乾元 嘉元			(歌) 飛鳥井雅有(九六六)	十六夜日記 中務内侍日記 野守鏡(九五五)		
				新後撰集(九六三)		

德治 延慶	花 園(九六八—九七九)	應長 正和	(歌) 藤原爲相(九六八)	玉葉集(九七三)	建武中興(九八〇)
後 醍 醐(九七九—九九九)	元應 元亨 正中 嘉曆 元弘 建武 延元	(光) 嚴		續千載集(九八〇)	
(光) 嚴	正慶	(光) 明		建武式目(九八六) 神皇正統記(九九九)	
曆應 康永	後 村 上(九九九—一〇〇三)	興國 正平		風雅集(一〇〇〇) 增鏡 徒然草	
長 慶(一〇〇三—一〇〇四)	建德 弘和	二 〇 〇 〇		建武式目(九八六) 神皇正統記(九九九)	
(崇) 光	天授 弘和			風雅集(一〇〇〇) 增鏡 徒然草	
後 光 嚴	文和 延文 康安 貞治			苑政波集(一〇一六) 新千載集(一〇一九)	
後 龜 山(一〇三三—一〇三五)	元中		(歌) 頓阿法師(一〇四四)	連歌新式(一〇三三) 新葉集(一〇三一)	
					足利義滿將軍なる(一〇三六)

後圓融 永和 康曆 永德 至德 嘉慶 康應 明德 後小松	1100 小松(1051-1073) 應永 光(1071-1084) 正長 花園(1068-1124) 永安 嘉吉 文安 寶徳 享徳 康正 長祿 寛正	(詩) 僧 絶 海(1081) (歌) 今川 貞 世(1090)	新後拾遺集(1133) 近來風體抄(1077)	太平記 吉野拾遺 言塵集(1066) 忍音物語	觀世清次歿す(1066)
後土御門(1144-1166) 文明 應仁 延徳 長享 明德 明應	1150 東 常 縁(1154) 飯 尾 宗 祇(1163)	(歌) 僧 正 徹(1184) (連) 飯 尾 宗 祇(1163)	連歌新式追加(1133) 曾我物語 義經記 中書王物語 水無瀬三吟百韻(1148)	足利義政將軍となる(1339) 觀世元清歿す(1335) 東常縁古今傳授を宗祇に傳ふ(1333)	
後柏原(1166-1188) 文龜 永正	1200 荒 木 田 守 武(1209) 山 崎 宗 鑑(1213)	(連) 飯 尾 宗 祇(1163) (歌) 三 條 西 實 隆(1197)	新菟玖波集(1157) 連歌新式今案(1263) 大筑波集(1274)		

後奈良(1261-1277) 享祿 天文 弘治	1300 親 町(1277-1292) 永祿 元龜 天正 陽 成(1346-1371) 文祿 慶長	(連) 牡丹花宵 柏(1287) 島田 宗 長(1292) 三條 西實 隆(1297)	淨瑠璃姫物語 御伽草子	
後水尾(1371-1384) 元和 寛永	1350 正(1369-1404) 明 1400 光 明(1410-1434) 正保 慶安 承應 後 明 曆 寛文 萬治	(連) 里 川 紹 巴(1360) 細 川 幽 齋(1370) 藤 原 昌 隆(1379) 里 村 昌 琢(1396)	犬子集(1393) 油糟(1395) 醒睡笑	徳川家康幕府を江戸に開く(1333) 家康林羅山を幕府に召す(1336) 古書出版
後靈 延寶 天和 貞享 元祿 寶永	1450 元(1333-1344) 山(1347-1369) 1450	(俳) 荒 木 田 守 武(1209) 山 崎 宗 鑑(1213)	可笑記(1401) 俳諧御傘(1411) 因果物語(1413) 薄雪物語(1414) 二人比丘尼(1418) 談林十百韻(1435) 萬葉集代匠記(1436) 好色一代男(1441) 出世景清(1446) 日本永代藏(1448)	大日本史編纂開始(1377) 竹本義太夫竹本座を大阪に立つ(1445) 北村季吟幕府に召さる(1449)

中 御門(三三九—三九九) 正徳 享保	櫻 町(三九五—四〇二) 元文 寛保 延享	桃 寛延 寶曆 園(四〇七—四三三)	後 櫻 町(四三一—四三〇) 明和	後 桃 園(四三〇—四三九) 安永	光 天和 寛政 享和 文化 格(四三九—四七七)
俳 小 松井 尾原 芭西 國 契 蕉 鶴 歌 北 村 季 吟 睡 沖 俳 服 部 本 田 茂 角 雪 狂 近 森 川 左 衛 門 六 儒 室 萩 鯛 新 井 松 門 許 衛 門 儒 室 生 屋 井 白 柳 石 俳 上 荷 島 田 鬼 春 貫	俳 國 上 荷 島 田 鬼 春 貫	劇 小 紀 八 文 字 屋 海 音 竹 烏 丸 田 出 光 雲 劇 國 賀 茂 眞 淵	俳 國 加 賀 千 成 平 富 士 賀 源 儒 儒 俳 俳 大 大 横 谷 窪 島 井 口 詩 蓼 也 蕪 村 佛 太	俳 俳 大 大 横 谷 窪 島 井 口 詩 蓼 也 蕪 村 佛 太	俳 俳 大 大 横 谷 窪 島 井 口 詩 蓼 也 蕪 村 佛 太
猿蓑(三五五) 和字正濫抄(三五三) 梨本集(三五八)	長町女腹切(三六〇) 藩翰譜(三六一) 八百屋お七歌祭文(三六四)	國姓爺合戦(三七五) 心中天網島(三八〇)	平假名盛衰記(三九九)	仕懸文庫(四五一) 群書類從(四五五) 東西遊記(四五五) 繪本太閤記(四五七) 古事記傳(四五八)	東海道中膝栗毛(四六二—四六九) 詞の八衢(四六六)
異學の禁(四五〇) 幕府洒落本の作を禁す(四五〇) 林述齋大學頭さなる(四五三)					

仁 孝(四七七—五〇六) 弘化 天保	孝 嘉永 明(三五六—三五六) 元治 慶應 萬延 文久 嘉永 安政
俳 小 松井 尾原 芭西 國 契 蕉 鶴 歌 北 村 季 吟 睡 沖 俳 服 部 本 田 茂 角 雪 狂 近 森 川 左 衛 門 六 儒 室 萩 鯛 新 井 松 門 許 衛 門 儒 室 生 屋 井 白 柳 石 俳 上 荷 島 田 鬼 春 貫	俳 小 松井 尾原 芭西 國 契 蕉 鶴 歌 北 村 季 吟 睡 沖 俳 服 部 本 田 茂 角 雪 狂 近 森 川 左 衛 門 六 儒 室 萩 鯛 新 井 松 門 許 衛 門 儒 室 生 屋 井 白 柳 石 俳 上 荷 島 田 鬼 春 貫
猿蓑(三五五) 和字正濫抄(三五三) 梨本集(三五八)	長町女腹切(三六〇) 藩翰譜(三六一) 八百屋お七歌祭文(三六四)
異學の禁(四五〇) 幕府洒落本の作を禁す(四五〇) 林述齋大學頭さなる(四五三)	

明 明治 治(五七—五七) 二五〇	(歌) 八田知紀(五五) 太田垣蓮月(五五)	新體詩抄(五四) 經國美談(五三) 小說神髓(五四) 浮雲(五七) 孝女白菊の歌(五四)	圖書館の設置(五三) 新聞・雜誌 歐化主義 學制頒布(五三) 印刷術の進歩
大 正 正(五七—五六)	歌 河竹默阿彌(五五) 小 假名垣魯文(五四) 小 樋口一葉(五六)	默阿彌全集 桐一葉(五四) 一葉全集 天地有情(五九) 不如歸(五九)	政治小説 新體詩 國粹保存主義 小説の革新 言文一致論 日清戰役起る(五四) 俳句・和歌・戯曲の改革 評論の勃興 自然主義 餘裕派小説
今 昭和 上(五六—)	歌 藤岡作太郎(五七) 小 夏石目川漱石(五七) 小 森鷗外(五七) 小 芥川龍之介(五七) 小 徳富蘇峰(五七) 小 大槻文三(五七) 小 若山内	日本歌學史(五七) 國文學全集 啄石全集 鷗外全集 大日本國語辭典 校本萬葉集(五六)	新浪漫主義 世界戰爭起る(五七) 新理想主義・新現實主義 社會問題 大眾文藝 翻譯文學 新詩・童謡・童話

昭和五年六月二十三日印刷  
昭和五年六月二十六日發行  
昭和五年十一月二十二日訂正印刷  
昭和五年十一月二十五日訂正發行

國文選(全十冊)  
自卷一各金四拾三錢  
自卷二各金四拾三錢  
自卷三各金四拾三錢  
自卷四各金四拾三錢  
自卷五各金四拾三錢  
自卷六各金四拾三錢  
自卷七各金四拾三錢  
自卷八各金四拾三錢  
自卷九各金四拾三錢  
自卷十各金四拾三錢  
昭和五年六月二十三日印刷  
昭和五年六月二十六日發行  
昭和五年十一月二十二日訂正印刷  
昭和五年十一月二十五日訂正發行

編者 垣内松三

發行者 株式會社 明治書院  
東京市神田區錦町一丁目十番地

取締役社長 鈴木友三郎

東京市神田區雉子町三十四番地

印刷者 綾部喜久二



發行所

東京市神田區錦町一丁目  
(振替東京四九九一番)

株式會社 明治書院

電話神田一四一四番

